

「それでは、今から6月号に予定されている、ワーホリ大特集についての編集会議を始めます。オーストラリアと日本で、ワーキングホリデー制度が1980年12月にスタートして以来、今年で35年目を迎えますので、それに合わせての記念大特集です」

オーストラリアで最古の月刊日本語新聞「豪州プレス」の編集部では、毎週月曜日の3時から編集会議が開かれる。最近バツ一になったばかりの鈴木編集長が、ワーホリ特集について説明する。40代半ばの鈴木は、離婚のかげりなどは一切なく、いきいきとしている。

10年前に地方の新聞社で編集者として働いていたという鈴木は、この会社に求職の「熱い手紙」を出し、永住権を取ってもらい、一家で移住して来たそうだ。すぐ編集長に抜擢され、彼によって新聞がようやく新聞らしくなったと聞く。確かに、資料室にある昔の新聞を見ると、高校生新聞に毛が生えたようなシロモノであった。

ところが、社内のワーホリの女性編集者との不倫がばれ、佐和子は会ったことがないが、美人だと評判の奥さんは彼に三行半を叩きつけ、5才の女の子を連れて家を出て、2年がかりで正式に離婚したらしい。奥さんは日本へは帰らず、シングルマザーとして、シドニーで生活している。

自身もバツ一でシングルマザーの佐和子は、異国で一人で子育てをしながら生活することが容易でないことを、身に染みて経験しているので、例え離婚は両成敗としても、やはり鈴木のおさんの方に大きな同情を感じる。特に鈴木のせいせいとしたノーテンキな顔を見ていると、余計にそう思う。

今回のワーホリ大特集はLOVE&SEX with AUSSI がサブタイトル。シドニーの日本女性のワーホリに焦点を当て、オージーの男性とのラブ&セックスという角度から切り取り、海外の若い日本女性の実態に迫るといのがテーマだ。

鈴木の説明を聞きながら、35年という時の流れに改めて佐和子は驚く。10年一昔というが、それにならうと、ワーホリがスタートして三昔以上という時間がすでに経過しているのだ。

自身もワーホリ出身で、シドニーで自分に起きたドラマはかなり波乱万丈だったと思っているが、この35年の間にさまざまな日本女性のドラマがこの街で起きたのだろうか、一種の感慨が湧き上がった。それは、同胞への連帯感のようなものだった。

「アイ・ラブ・ユー・フオエバー」って言ったじゃない

身体はどこかで火がついた怒りのような感情が、次第に大きくなって行く。これまで27年の人生で、こんな感情を味わうのは初めてだ。屈辱と呼べるそれは、美人の美紀には縁がなかった筈だ。特に男から受ける屈辱というものには。

隣に座っている、通訳を兼ねて付き添い役で来てもらった雅子も沈黙を守っている。目の前に座るトムは結婚する意志がないことをはっきり告げた後は、貝のように口をつぐん

だままだ。美紀は妊娠2ヶ月という身上。気まずい雰囲気がますます濃厚になって行った。オーダーしたテーブルの上のコーヒーには、誰も手をつけておらず、コーヒーはすでに冷たくなっていった。手元を見ながら、今日のためにきれいにネールされた爪も、精一杯おしやれをしてきたことも、全く無駄だったことを噛みしめていた。

美紀は最後の切り札としてとっておいた言葉を、口にすることにした。ヒステリックな口調にならないよう、呼吸を整える。

「でも、永遠に愛すると言ってくれたわ」

「永遠に愛すると言ったからって、黙って妊娠するなんて。そんなことは子供がすること  
で大人がすることじゃない」

トムの言葉の隅々に、侮蔑のトーンが行き届いていた。(黙って妊娠なんか出来る訳ないじゃない。あんたがやったからじゃない。ましてや子供が妊娠なんかできるの?)と、気の利いた皮肉を言ってみたいと衝動的に思ったが、英語ではそれは不可能。

「それに僕は、ピルを飲んでるねと確認した筈だよ。美紀はイエスと答えたのに、あれは嘘だったんだ……」

いつもうっとり眺めた彫りの深いトムのスイートな顔は、美紀が妊娠を告げて以来取りつく島もない冷淡なものに変貌したが、今日もそれは変わらない。トムは顔をしかめると、美紀と雅子を交互に見つめ思い切ったように言った。

「率直に言って、僕は日本人との混血の子を持つ勇氣を持ち合わせていない」

美紀は突然目の前が暗くなり、奈落の底へ落ちて行くような気がした。この男は、人種差別者だったのだ！意識が戻ると怒りが頭のとっぺんからつま先まで、身体中であらわれている。外人に遊ばれたジャパニーズ・ガールという事実を突きつけられただけでも、大きな侮辱であったが、その外人がレイシストだったとは！

「どうしたんだよ。この頃、いつも心ここにあらざっていう感じだぞ」

「え、何？」

「何かに気を取られていて、美紀の気持ちはどこかへ飛んで行ってる」

「そんなことはないわよ。孝の話だってちゃんと聞いているじゃない」

美紀は内心、さすが私のパートナーだけのことはある。きっちり心の中までお見通しだと感心した。が、とっさに「ごめんなさい。年末にかけて仕事が忙しくて少々疲れ気味」と、その場を取り繕う言葉が出た。

「誕生日のプレゼントは何がいい？」

「別にいいわよ。レストランで孝と何か美味しいものを食べるだけで」

そう言っ、食事の最後に出てきたコーヒーを口にし孝に微笑む。

西麻布にあるイタリアンレストランはいつも混む人気レストランだが、金曜日の夜は芋の子を洗うような混みようになる。それでもウィークデーの夜とは違って、仕事からの開放感からカリラックスした喧騒に満ちている。

孝の柔らかい光を放つ瞳が美紀を包み、愛されていることの幸せを感じる。

「そうは言っても、毎年やっていることを今年ストップすることはできないだろう」

孝とはもう4年越しの付き合いだ。

最初の年のバースデー・プレゼントは有名ブランドの香水。次の年はブランド物のハンドバッグ。昨年はティファニーのシルバー・リングだった。毎年毎年プレゼントはより高価なものに移行した。それは愛情が、毎年毎年大きくなって行ったことを意味する。その向こうにあるものが結婚だということも、理解している。プロポーズも時間の問題だろう。

普通に見れば、幸せを絵に描いたような時期と表現できるが、皮肉にもそれが憂鬱の原因であり、時々心がここにあらずという状態になる理由なのだ。

最近美紀の心に巣食っているものは、結婚の前にもう少し何か面白いことがあってもいいのではないかと思う、言ってみれば、独身最後のあがきのようなものかも知れない。

美紀は名古屋から東京の4年制の女子大に入り、卒業するとそのまま東京に残り大手電気メーカーに就職した。受付からのスタートだったが、順調に出世階段を上り、今は広報部のサブ・マネージャーのポジションを与えられている。恵まれたキャリアを歩いてきたと言えるのだろうか。が、その恵まれたキャリアも、結婚すれば家庭に入るのが当然と暗黙の内に取り決められている程度のものだ。

物心付く頃から、「可愛い」、「きれい」という言葉を浴び続けてきた。いつもその場その場で、ランクの高い男性のハートを射止めてきた。中学、高校時代はクラスで一番人気のある男の子が、大学時代はテニス部のキャプテンがボーイフレンドだった。

会社勤めが始まり、すぐ同僚のエリート男性社員との交際がスタートしたが、彼の転勤によって自然消滅。その後合コンで知り合い孝と付き合うようになったが、すぐに2歳年上の孝が、スポーツマン的な感じの良い容貌だけではなく、人間としても質のいいことに気付く。

付き合い始めて1年がたった頃、お互いが生涯のパートナーであることを、徐々に了解し始めていた。

他の普通の女性から見れば、いい仕事と一流企業に勤めるいい男を両手に持つ美人の美紀は、羨望の的と言えるだろう。だが、美紀は普通の女だとは思っていない。

美紀は、「計算された感じのいい美人」。自分が美人であることは百も承知だ。だが、そんなことは、これっぽっちも表に見せない。他人への気配り、同性へのそれは特に気をかける。引くべき時には引き、控えるべき時には控える。

けれど、もし人の心を透視できる鏡があり、それで美紀の心を覗けば、そこには美人の特権意識で鼻持ちならないものが映るにちがいない。

美紀はいつも思っていた。道を歩けば必ず他人の視線を受ける私に、何故シンデレラ物語のようなドラマは起こらないのかと。よく雑誌などで読むように、街角でスカウトされ、モデルになったりタレントになったりするラッキーな女たちが居るが、私の身上には何故そういう幸運の女神は微笑まないのかと。

モデルは身長から無理だとしても、テレビで花を添える程度のタレントになってもおかしくないと思う。現にテレビで人気のあるその種のタレントをいろいろと思えば、自分の方がずっと綺麗で感じがいいと思う。

27歳の美紀は、まさに結婚適齢期に居た。孝は理想に近い男性だと言えるだろう。容姿、性格、才能と、それぞれかなりのレベルに位置した点数の高い男性なのは間違いない。

これ以上のパートナーは、まず出現しないだろう。

しかし、美紀は知っている。結婚して最初の数年間は楽しくても、すぐ退屈な日常という日々の繰り返しになることを。ましてや子供でも出来れば、途端にオバサンとなりそして一生を終えなければならぬのだ。勿論いつかその「日常生活」というものに入っていくかなければならないことを知っているが、だからこそ、その前に何か特別な経験をしたという渴望があった。

孝との結婚が秒読みという段階を迎えて、フラストレーションと焦りからよく上の空という状態に陥るのだった。このまま、私の人生が終わってしまうのだろうかという焦りが胸を噛む。美紀ランクの女なら、恋愛、結婚という普通の女のコース以上のものがたとえ短期的なものでもいい、用意されてもいいのではないか、いや用意されるべきだと思う。

地下にあるレストランから出て表参道を歩くと、いつものようにカップルで溢れかえる金曜日の夜の風景が目の前に広がる。カップルが幸せを競い合う舞台。クリスマスのためにライトアップされた街は、ファンタジーの世界のようで現実のものとは思えない。華麗なイルミネーションが延々と続く並木道を歩いていると、経済が悪化し失業者も増加の一途だというのは、一体どこの国のことかと思う。

孝と腕を組み青山方面へ向かって歩き出した。かなりの率ですれ違った人間が好奇の目を美紀へ向けるのを、いつものように確認して満足感を覚える。孝はこういうことにはまったく無頓着なので、気付きもしないだろう。しかし、今夜は何か違和感を覚える。賑々しい嬌声が耳に入ってくる。軽快な動作が目に入ってくる。すれ違う女の子たちの若々しさがいちいち心にひっかかる。美紀は突然理解した。自分はもう決して若い女ではないことを。

天啓は、会社から帰宅中、立ち寄ったブックストアで立ち読みの際に、頭に落ちてきた。海外旅行の本コーナーでオーストラリアの旅という本を手に取り、何気なくページをめくっていた美紀の目にそれは飛び込んできた。

前から知っていたが、オーストラリアにはワーキング・ホリデー（通称ワーホリ）という制度がある。正式に現地で働ける制度で、働きながらホリデーも楽しみ生活体験ができる仕組みだ。期間は1年間。本は、新情報としてこれまで年齢制限が25歳までだったが、5歳幅が延び30歳までになったことを伝えていた。

これだと内心手を打った。勿論海外旅行の経験はある。女友達と、ヨーロッパとアメリカの西海岸のツアーに参加したし、孝とはゴールデンウィークにハワイに出掛けた。数日間、異国情緒の中で見る食べる買うをエンジョイする時間は確かに楽しいのだが、束の間の楽しさでしかない。

「外国で生活をする」というフレーズを、頭の中でリピートしてみた。ロマンチックな感情が、じわじわと身体はどこかから湧き上がってきた。これまでアメリカやヨーロッパにしか目が向かなかったが、オーストラリアもなかなかいいのではないだろうか。それに治安の良い国としても定評があり、生活するには好都合だ。結婚の前に1年間、外国で生活したい。絶対そうすると、美紀は心に誓った。

「そろそろ、ちゃんと結婚の話を進めようか」

暗闇の中で聞く孝の声は、いつも少し威張ったように聞こえる。そして、それは決して不快ではない。むしろ頼もしく感じる。孝の腕枕でメイク・ラブの後の心地良い疲れの中に居た美紀は、その時が来た、話すなら今だと悟った。

「ありがとう、孝。ちよつと話したいことがあるんだけど」

そう言いながら思い切ってベッドから立ち上がり、フロアに落ちていたバスローブをおると、部屋のライトを点けた。

孝はベッドの上で身体を起こした。上半身が裸で眩しそうな目が美紀を見ている。一体どうしたんだよ、とその目が問いかけている。

「さつき飲み残したワインでも飲もうよ」

美紀は殺風景な孝のキッチンに入り冷蔵庫を開けると白ワインのボトルの取り出し、2つのグラスに注ぎベッドルームに戻ると孝にグラスを手渡し、ベッドの近くのシングルソファに腰掛けた。

「結婚の話、ありがたうお受けします」

美紀はかしこまってそう言い、それから極上の笑顔を作った。

「ただ、1年間だけ私に時間を下さい」

孝は、どういう意味なのかと大きく目を見張った。

美紀はこれまで何度も復唱してきた説明を、孝に向かって喋り始めた。オーストラリアへワーキング・ホリデーで1年間住んでみたいというところでは、孝は明らかに困惑した表情を見せた。英語学校に通い資格を取りたいというところでは、少し好意的な驚きの表情に変化した。そして、美紀は孝を説得するのにここが一番重要なポイントだと思っていたが、「私、生まれてくる子供に英語を教えられる母親になりたいの」という言葉に、孝は感心したように肯いた。

美紀は内心ヤッタ！とVサインを掲げた。

いわゆる寿退社をし、シドニーに向かって成田空港を飛び立ったのは3月の末。シドニーは、夏が終わろうとする頃。

美紀は最初の1週間は、一流のホテルに滞在することに決めていた。若い学生ではないのだから、優雅な感じでワーホリの生活をスタートさせることにしていた。ツーリストの時間を楽しみながら、住む所や英語学校を決めるつもり。

日本から予約していたインター・コンチネンタル・ホテルは五つ星のホテルで、クラシックとモダンな感じがうまく調和された瀟洒なホテル。シドニーでは屈指の一流ホテルだが、日本円に換算すれば一泊3万円程度で泊まれる。

ホテルは、シドニーと言えばすぐ頭に浮かんでくるシドニー湾に架かるハーバー・ブリッジと、白いオペラハウスのすぐ近くにあった。美紀は通された部屋で、ハッピーな気分ですぐ部屋の窓を開けた。新鮮な朝の空気が部屋になだれこむ。

早朝に到着したシドニー空港からこのホテルに着くまで、全ての人々が美紀に好意的な

のだ。税関の係員、タクシーの運転手、ホテルのレセプションのハンサムな男性、ポーターと、皆が美紀に優しくフレンドリーだ。中にはウインクを投げてる者も居た。窓から見下ろせる広大な植物園のしっとりとした美しい緑も、美紀の心を和ませた。異国の街を好きになるには、勿論どういう経験をしたかが大きく左右するが、その街に流れている空気が合うかどうかは直感できる。美紀はシドニーに来たことは大正解だったと確信した。手提げバックからノート型パソコンを取り出し、部屋のインターネット接続回線に繋がると、早速孝にEメールを送った。無事着きました。傍に孝が居ないと思うととても心細い。でもわがままを聞いてくれた孝のためにも、一生懸命英語の勉強に励みます。という内容のメールを。

住まいと英語学校を決めようと張り切って街に出た美紀は、シドニーが日本語の情報誌で溢れているのを知って驚いた。ニューヨークやパリやロンドンと比べて日本在住者の数はかなり少ない筈なのに、日本語による情報誌が多くバラエティに富んでいる。

20年以上も続いているという100ページもある月刊新聞から電話帳まで多くの無料情報誌が、インフォメーション・センターや日本レストランや免税店などに並べられており、ピックアップできる。

それに、日本を出る前にオーストラリア大使館で情報を集めたが、ワーホリのための情報センターがかなりあり充実していることも知っている。

美紀はシドニーの街を歩きながら、ここで何か素敵なことが起きるに違いないと確信に近いものが湧き上がり、ウキウキとした気持ちになった。住まいもきつといい所が見つかるに違いない。そう思った。そしてそれはその通りとなった。

シドニーは、セントラル・ビジネス・ディストリクト(通称CBD)を中心に、さまざまなキャラクターを持つエリアから成り立っている。

高級ブティックが並び、ロールスロイスやポルシェが無造作に停まっているダブルベイ。ポルノ・ショップやストリップ劇場があり、深夜まで喧騒が続くキングスクロス。湘南海岸のようなボンダイビーチなど。そして一番の特徴は、どこからでも直ぐ青い海に出られることで、それがシドニーという街に大きな開放感を与えていた。

CBDは北端がオペラハウスとハーバーブリッジのあるサーキュラーキーで、南端がチャイナタウン。サーキュラーキーからチャイナタウンまでゆっくり歩いて30分程度。その区域はビルが立ち並ぶビジネス・エリアだ。

メインス・トリートであるジョージ・ストリートを歩きながら、シドニーは一言で言えば大きな田舎町だと美紀は思った。都会過ぎる訳でもない。田舎過ぎる訳でもない。そのバランス加減がとてもいいのだった。

CBDにあるワーホリのための情報センターで民子という女性から声をかけられたことから、住まいはすんなりと決まった。センターの告示板を見ていた美紀に民子が話しかけてきた。

「日本人?」「ワーホリ?」「部屋探し?」とたたみかけるように聞く民子は、美紀の頭

のてっぺんからつま先までを見下ろすと目を輝かせた。美紀には、民子の口から出てくる次の言葉が分かっている。「あなた綺麗ね」と民子は降参したように呟いた。こういう場合、「そんなことないです」などと謙遜してはいけない。「お世辞でもそう言われると嬉しいわ」という程度に留めておく。美紀が事情を説明すると、「あなたのような人が、そこのワーホリ姉ちゃんに住んでいるような所を選んでじゃ駄目。すごい掘り出し物があるから今からいらっしやいよ」と、民子に半ば強制的に連れて行かれた所は、CBDから電車で10分程のボンダイ・ジャンクションという区域。

大きなデパートが入ったショッピング・モールを中心にして、高層ビルが立ち並ぶ。その殆どがマンションだと言う。ベージュ色の外観のマンションに入りエレベーターで16階まで行き、民子はある部屋のドアを開けた。入った所がラウンジとオープン・キッチンになっており、それを囲むようにしてベッド・ルームが3室ある。シャワーとバスタブが分かれている本格的なバス・ルームがあり、それにシドニー湾の青い海が少しだけだが眺望できる小さなバルコニーが付いていた。

民子は、ここで2人のワーホリの日本女性と部屋をシェアしていた。1年近くここに住み、日本へ帰る前にオーストラリア一周の旅をするため、丁度月末にマンションを出るのだそうだ。家賃は一人週150ドルで決して高くない。それに清々とした雰囲気も気に入った。「雅子も千鶴子も、あなたのことを絶対気に入るわよ」と、肥満気味ではいるジェーンズがピチピチの民子は、腕を組んで得意そうに美紀に笑いかけた。

住まいが決まると、次はCBDにある英語学校の中級クラスに籍を置いた。1年間の生活費を用意したが、学校で今のコースが終われば働いてみるのも悪くない。出来れば、日本レストランや免税店や日本商社などではなく、英語に挑戦できる現地の職場が理想だ。

雅子も千鶴子も気さくで、他人に余り干渉しない理想的なシェアメイトであることが分かる。英語がペラペラ、優等生で真面目なんだろう、自室にこもりがちなのが雅子で、友達とつるんで嬌声の中に居るのが千鶴子。

まるで学生時代に戻ったかのようなだった。美紀は若返った気持ちで毎日英語学校に通った。孝へのEメールは、最初は毎日送信していたが、週末にその1週間を手短く報告するカタチに落ち着いた。孝が爽やかな笑顔を見せた写真はベッドのサイドテーブルに立てられている。

美紀がそのゲームに初めて加わったのは、マンションでの共同生活がスタートし一ヶ月が過ぎた頃。ゲームとは、週末の夜クラブに出掛けて、決められた時間に何人の男から声がかかるかを競うものだ。千鶴子と彼女の友達連中が、週末の夜に楽しむ遊び。雅子はそれに加わらない。美紀は数回誘われてはいたが、何だか子供っぽく馬鹿馬鹿しい気がして断っていた。が、ある週末ふと気が変わり行くことに同意した。「今夜は美紀さんの勝ち。私たちは出番がないわよ」と千鶴子は笑いながら叫び、美紀も内心そうなるだろうと思っ

た。千鶴子の友達2人を含め総勢4人で向かったのは、CBDのチャイナタウン近くにあるクラブ。地下にあるドアを押すと、強烈なサウンドが耳に飛び込んできた。

中央にバーがあり、そこでドリンクを求めると、壁に沿って張られたカウンターで立つ

たまま辺りを偵察できる。奥にあるダンスフロアは満杯で、皆が好き勝手なフリで自己陶醉の真っ只中に居る。

服装はジーンズで十分と言われたように、若者向きの普通のクラブだ。よく言えば庶民的、率直に言えばチープなクラブ。

と、間もなく千鶴子に声が掛かった。金髪をムースで固めた背の高いオージーだ。

5分ぐらいすると、「出ようと誘われちゃった。携帯の番号はゲットしたもんね」と、ダンスフロアから得意げに千鶴子が戻ってきた。そして、また千鶴子に声が掛かった。今度は頭をシェイブしたワイルドな感じの男だ。「チーちゃん、いつももてるのよ。オージー好みのジャパニーズ・ガールなのよね」と、千鶴子の友達が異句同音にそう喋る。

美紀は次第に焦ってきた。その内に、千鶴子の友達2人にも声が掛かる。美紀は、表面上は余裕の微笑みを見せていたが、内心は（どうか神様、声がかかりますように）と祈り続けた。

四方八方から男たちの視線は飛んでくる。けれど声は掛からない。この私が「壁の花」になるなんて信じられない！という気持ちで胸がいっぱいになる。美紀は、このクラブにたむろする男たちから例えばデートに誘われたとしても、応じる気はこれっぽっちもない。その程度のランクの男たちなのだ。しかし、この種の男たちからも声は掛かる女でいたい。

結局、美紀には声が掛からなかった。4回男から声が掛かった千鶴子の大勝利となった。帰り道、「私はもう年だから、ああいう場所じゃオバサンよ」と心にもない自嘲をしたが、千鶴子は、「あそこそこら辺のオージーのあんちゃんが来る所だから、美紀さんのような正統派美人にはどうやって声を掛けていいのか分からないのよ」と、屈託のない声を出した。その通りと、美紀は心の中で相槌を打った。頭のいい子だとは思わなかったが、現実はきちんと見れる子なんだ。そう思うと、千鶴子への好意が湧いてきた。

美紀は千鶴子たちを見ていつも不思議に思った。彼女たちは一応チャージングだし、服装や身の回りに関するセンスも悪くない。聞けば、それぞれが日本ではちゃんとしたバックグラウンドを持っていた女性たちだった。言い換えると、美紀を含めてだが、日本では彼氏の選択に厳しい女性たちである。容姿、身長、仕事、学歴、家柄と様々なポイントをチェックする女たち。

それがどうだろう。こちらでは、勿論不細工なオージーは駄目だが、ある程度のルックスであれば嬉々としてその辺のオージーと付き合っている。ウェイターやガイドや店員などのそこいらのオージー。そして、かなりの率でゴールインしていることも分かった。

外人をありがたがる時代など、すでに消滅した過去のものと思っていた美紀は、千鶴子たちの恋愛話を聞きながら意外な気がした。そう言えば、かつて松田聖子がアメリカで恋におちた相手も、確かウェイターだった。ジャパニーズ・ガールは、今でも容易に「イェローキャブ」になりうる部分を持っているのだろうか。

孝が居る美紀には無縁のことだが、仮に外人のボーイフレンドを持つことを想像しても、ウェイターや店員に食指をそえられることはまずないと断言できる。例えどんなにルックスが良くてもだ。そこが、美紀と千鶴子たちの間に明らかに存在する、女としての格の違い。そう自負した。

敗者復活戦とも言える機会は数週間後にやってきた。

美紀は、もう決してあんな馬鹿げたゲームに加わる気持ちはこれっぽっちもなかったが、その金曜日の夜、ダブルベイにあるクラブ「ベイ」に行くことを誘われた時、迷った。

千鶴子から、そこはスノッブな連中が来る場所で、シドニーのリッチな独身男女のハンティング場所だと告げられる。シーズンでは門前払いで、ドレスコードがある。このクラブだと、一回声が掛ければ大勝利と言える程のハイクラスのクラブだと説明される。美紀は同行することにした。

その夜、美紀は「クラブの華」となった。

チャイナタウンのクラブとは比べものにならない程、「ベイ」は全てが高級感で溢れていた。シックなインテリアと躍動感はあるが心地良く刺激する上品なミュージック。フロアで踊る若者たちも、大げさな振りではなくちよつとだけセクシーに身体を動かす様はカッコいい。

千鶴子たちと、深々としたソファに座った途端、「踊らない？」と美紀に声が掛かった。ルールに従い、10分が過ぎると、「ごめんなさい。友達と一緒だから」と千鶴子たちの所へ戻ってくる。すると直ぐ次の声が掛かる。「凄い。やっぱり美人は違うわ」と、千鶴子の賞賛の声が上がった。

美紀は、声を掛けてきた男とどうこうする気持ちはない。男と、ちよつと踊りちよつと話しちよつと飲むだけ。それで大満足だった。

12時が過ぎゆつくり帰り支度を始めた時、美紀は肩を軽くたたかれた。「ちよつと話をしていますか？」。振り向くと、豊かな金髪が波打つ上背のある男が微笑んでいた。（可愛い）と思わず言葉が出そうになった程、甘い顔立ちの男だ。

「ジャパニーズ？」「イエス」「名前は？」「ミキです」「僕はトム。会えて光栄」「こちらこそ」「あちらのバーで飲みませんか？」「ごめんなさい。友達ともう帰るところなの」「オ、それは残念」。トムという男は一呼吸置くと、「電話番号を教えてください」と聞いた。美紀は何の躊躇もなくトムに番号を伝えた。

帰り道、千鶴子は感嘆の声を上げる。「美紀さん尊敬しちゃう。日本人で、あそこに来るレベルの男をボーイフレンドにしている子なんて居ないわよ」。「電話がかかってきたら付き合うつもり？日本の彼はどうするの？」。千鶴子が無頓着に質問を重ねた。

微かな寝息を立てて眠るトムの顔を、美紀は（何て綺麗な寝顔なんだろう！）と惚れ惚れと眺める。こんなスイートな顔をしているくせに、セックスはとてもワイルドだ。先程の「熱い時間」を思い出すと、身体の温度が上がる。孝も学生時代バスケットをやっていただけあって、筋肉質のバランスのいい身体だったが、鍛えているこちらの男に身体にはかなわない。特にトムの場合、甘い顔立ちなので、筋肉隆々とした身体を初めて見たときは驚きの発見だった。発見と言えば、こちらの男は寝るときは素っ裸なのだ。

美紀はベッドから静かに立ち上がると、トムの薄いブルーのワイシャツを素肌の上に乗とった。シルクのシャツは肌触りがいい。確か外国の恋愛映画では、ヒロインが情事後相手の男のワイシャツをまとい、物憂げにタバコをくゆらした筈だ。

美紀はバルコニーへ出た。デッキチェアに身体をよこたえる。夜の涼風が頬をなでて気

持ちがいい。ボンダイジャンクションのアパートのちやちなバルコニーではない。日本のマンションのリビングの3倍ぐらいあるスペースに、バーベキューが設備され、テーブルやチェア、デッキチェアなどが置かれ、大きな観葉植物がアクセントとして配置されている。インテリアの雑誌のページを飾れそうなファッショナブルなスペース。

そして庄巻は、真正面に広がるライトアップされたハーバーブリッジとオペラハウスの夜景。リッチな人間にだけ許される第一級の夜景だ。

クラブで会って数日後にトムから電話があり、今では世界中に名前が知られている、日本人がオーナー・シェフのレストラン「テツヤ」で食事をした。その後彼のマンションに誘われた時、確かに最初のデートで応じるべきではないという「女としてのマナー」が一瞬頭に浮かんだが、それはすぐ消えた。このような美しい男に「ノー」と言える女が居るだろうか。

モデルでもしているのかなと思ったトムの職業は証券マン。年齢は32歳。成功者であることは、住んでいるマンションを見ればすぐ分かる。優しい性格。そしてセックスだっていい。孝とのセックスがストレートな直球だとすると、トムとのものは変化球に富んだものと表現できた。美紀はこれまで孝とのセックスを十分満足していたし、決して自分のことをセックスに捕らえられる女とは思わなかったが、要するに知らなかっただけなのを自覚した。

しかし、一番素敵なのは、愛の言葉の洪水だ。「アイ・ラブ・ユー・フォエバー」と言う言葉を一体一日に何回聞くだろう。「ビューティフル」「プリティ」「世界中で一番大切な人」「美紀となら世界の果てへでも」等等。言葉がこれほど人間の心を震わせるとは、これまでに想像も出来なかった。

そして、この百万ドルの夜景を前にして、美紀ははつきりと理解した。海外に長期滞在してみたと思ったのは、結局心の底でトムのような男とのロマンスを求めていたのだというのを。孝とは変わらず1週間毎のEメール通信は欠かさなかったが、もう孝は心の中に住んでいなかった。

トムと付き合い始め、週末はいつもトムのマンションで過ごすという生活が4ヶ月を経ている。美紀は初めて自分が正しく評価されているという満足感に浸っていた。モデルのような美形のパートナー。四六時中囁かれる甘い言葉。男としてのパワフルなエネルギー。それに超豪華なマンション。これが日常のものとなるのは可能だろうか？トムはいつかはプロポーズしてくれるのだろうか？6ヶ月後にはワーホリのビザが切れる。何度もささやかれる言葉、永遠に愛するというのは結婚を意味してる筈と思われる。頭の中で何かが始動した。それは「幸せのプラン」というものだ。

シドニーへ行こうとあの時ブックストアで決心したが、それはトムに出会うためだったのだ。これは運命だと確信した。運命の結論をスピードアップするためには、何かの出来事が必要だと美紀は考える。何と言っても、トムは永遠に愛すると言ってくれているのだから。

気まずい沈黙のまま、時間が流れる。天と地がひっくり返るようなことが起きても変わらないものは、トムとの結婚が不可能ということだ。例え奇跡が起きてもトムが結婚に同意し

たとしても、人種差別者とは一緒に住むことは出来ない。

美紀は雅子に目配せをした。前もって打ち合わせをした通り、後の話を任せると言う合図だ。

美紀は立ち上がった。最後に一言トムに気の利いた捨て台詞を残したかったが、英語では思い浮かばない。

ホテルのロビーを横切りながら、怒りが再び膨れ上がってきた。(何よ。トムなんか大嫌い！シドニーという街も大嫌い！オーストラリアなんて大嫌い！)と、心の中でそう叫んでいた。

### バージンにサヨナラ

何度寝返りをうつても、眠りに入ることができない。雅子は天井を睨み付けた。

2時を過ぎているというのに明美の部屋から嬌声が聞こえてくる。また男を連れ込んで騒いでいるだ。千鶴子を「遊んでる女の子」と白けた目で見ていたが、美紀の後釜として住むことになった明美には度肝を抜かれた。

毎週、まるで何かのゲームの相手を変えるかのように、ボーイフレンドが変わっている。それは明美に執着する男が居ないことを意味しているが、とにかく蝶々のようにヒラヒラと男から男へ移り、毎日楽しく生きていることは間違いない。

雅子は民子のことを懐かしく思い浮かべた。美人1対不美人2の共同生活は、それなりにバランスを保っていた。千鶴子と民子と3人で住んでいた時がそうだった。ところが美人2対不美人1になると、日常生活でちぐはぐになる場面がいつぱい出てくる。だから表面上はともかく、精神的には孤立した状態がずっと続いていた。

それにしても、美紀には驚かされた。雅子は美紀に対して好感を持っていた。掛け値なしの美人。あれだけの美人なら、自己中心の鼻持ちならない女になっても不思議ではないが、美紀は気配りの出来る性格のいい美人だった。

しかし、どう考えてもあの妊娠茶番劇は理解できない。付き合っている男が結婚してくれるかどうかは、女なら分かる筈のものではないか。雅子は確信する。あれは、美紀が「できちゃった婚」を企んだものだ。そこらのワーホリねえちゃんではない。大人っぽい美人で聡明だと思っていた美紀が、そんなくだらないことを実行するとは、容易に信じることはできなかった。

「だって永遠に愛するって言ってくれたじゃない」だなんて。だから結婚してくれると思うなんてとんでもない、馬鹿じゃないの。あの時、傍で雅子が内心呟いたのは(こちらの人間は犬にだって「アイ・ラブ・ユー・フォーエバー」って言うよ)という言葉だった。

だがある意味理解できる。英語を直訳することで起きる悲劇や喜劇が。

例えばシー・ユー・レイターという言葉がある。直訳すれば後で会おうという意味になる。ある日本女性は新しい外人のボーイフレンドが、デートの終わりにシー・ユー・レイターと言ったので、後で彼のアパートを訪ねると、彼が違う他の女の子といちゃついているのを目撃してしまう。驚いたボーイフレンドが、なんで今頃来るんだよと詰問すると、

彼女曰くだってシー・ユー・レイターって言ったじゃないって言い返したというドラマ。

雅子にしても今は、それが、シー・ユー・アゲインと同じ、じゃまたという意味なのを知っているが、英語に慣れ始めた最初の頃、外人が別れ際シー・ユー・レイターと言うので、え、いつどこで会うのと慌てたことがある。

だからアイ・ラブ・ユー・フォエバーも大好きだ程度の意味しかないが、美紀が直訳し、結婚するつもりとなんだと解釈しても、馬鹿女と一刀両断することはできない。

美紀が逃げるようにしてその場を去った後、雅子は結局トムと深夜まで話し込む羽目となった。

「アイム・ソーリー」

雅子がそれまでの沈黙を破るように第一声を放つと、トムの表情が少し緩んだ。

「彼女から、妊娠したことが分かってからあなたとの間がギクシヤクしてコミュニケーションが取れなくなったので、是非ヘルプして欲しいと頼まれたのです。彼女あまり英語が出来ないので」

トムに電話を掛け、ホテルのロビーで会うことをアレンジしたのも雅子だ。

「僕には分からない。ずっとコンドームを使っただけで全然問題なかったのに、美紀がピルを使用したいと言いつ出したんだよ。それが、計算間違いしたのかしら妊娠したみたいと突然言うんだから」

雅子は端正な顔にコンドームという言葉は似合わないなと思いつつ、トムを見つめていた。普通のジャケットをはおっただけだが、トムの美形は際立っていた。これならどんな女だってノーとは言えないなと雅子は感じ入る。

「結婚する気なんてまったくくないし…。オージー・ガールだろうとジャパニーズ・ガールだろうと」

トムは真つ直ぐに雅子を見ると、

「さつきはゴメン。あんな人種差別的な言葉を口にしてしまつて。今回のことですつかり頭にきていたので」

と、謝罪した。この美形の男にハートがあることを知って、雅子は緊張感が少し薄れた。

「美紀は妊娠という事実で僕を釣ろうとしたのじゃないかな？」

探るような目付きのトムに、雅子は反応しない。

「だいたい、僕はジャパニーズ・ガールには全然興味が持てなかったんだ。英語は殆ど喋れない。いつも恥ずかしそうに笑うだけで子供っぽい。何がしたいのかはつきりしないから、じれったくなる。日本ではそういう女性を男性が好むの？」

「違うと思うわ」

「どのように」

「彼女たちは、日本では自分の欲しいものやしたいことはハッキリと主張するわ」

「じゃ何故、ここでは主体性のない人形みたいになっちゃうの」

「言葉の問題があるのは間違いないわ…」

勿論それだけではない。しかし、未だに外人コンプレックスがあるからよ。特にあなたのようなハンサムな外人には、という本音は口にできない。

「だからクラブで初めて美紀を見たとき、何としたりとした大人っぽい美女なんだろう

と、すぐ声を掛けてしまったんだ。あんなビューティフルなジャパニーズ・ガールにこれまでお目に掛かったことがなかったから。落ち着いた振る舞いや喋り方も大いに気に入ったし。こんな醜いドラマに巻き込まれるなんて夢にも思わなかった」

雅子は、話を切り出すなら今だと思った。

「実はその醜いドラマに終止符を打つため、あなたと話したいことがあるんだけど」

トムの顔に緊張が走った。

「美紀は日本へ帰ります。でもその前に中絶の手術を受けなければならぬわ。それで、あなたにその費用を出して欲しいって、彼女は要求しています」

トムの顔が見る見るうちに、安堵というカラーに染まった。

「オーケイ。ノー・プロブレム」

トムにしてみれば、厄介な問題から解放されるグッド・ニュースなのだろう。トムが態度がフレンドリーなものに急変した。

「雅子、この後何か用事があるの」

「いいえ」

雅子の心臓がドキンと音を立てた。

「じゃ最上階にあるバーで飲まない。雅子のように英語をパーフェクトに喋るジャパニーズ・ガールは初めてだ。雅子から日本のことをいろいろ聞きたい」

「いいわよ」

断る理由は何一つない。雅子は最上階にあるバーへトムと行き、夜景を見下ろしながら深夜を過ぎるまでトムと話し込んだ。トムが、途切れなく日本に関してさまざまな質問をした。その質問に雅子は一つ一ついいねいに答えた。ただそれだけのことだ。

ベッドのサイドテーブルに置かれた目覚まし時計を見ると、2時を指している。

雅子は意を決して立ち上がり、そっとキッチンに入るとそこでグラスにジンを注ぎ、氷キュービックスを二つ落とし、それを持ってバルコニーへ出た。

眠れない時は、いつもこのジンにお世話になる。白い籐椅子に腰掛け、ジンを口にする。

舌と頭のどこかでしびれるような感覚が走る。ゆっくりとグラスを空ける頃には眠気が襲ってくる筈だ。

今にも泣きだしそうな声でトムとの問題を美紀が訴えたのも、日本へ帰国前に美紀が雅子の手を取って感謝したのも、このバルコニーでだった。感謝されて当たり前だと雅子は思う。中絶のアレンジもし、当日はクリニックにまで同行してやったのだから。

つくづく美人は得だと、ため息が出る。美紀はあっけらかんと言ったものだ。「これで私のワーキング・ホリデーは終わり。日本へ帰り孝と結婚していい奥さんになるわ」

その孝は写真で見る限り、精悍ないい男だ。普通のプライドがあれば自殺をしたくなる程の醜態劇を演じた後でも、日本でかなりのレベルの男がちゃんと待っている。美人だけに許される不条理だと、雅子は憤慨する。衝動的に、トムとのことを一部始終綴って匿名で孝という男性に送りつけてやろうかというアイデアが、頭をよぎる。

シドニーでも、結局バージンを捨てるのが出来なかった。雅子の胸に、失望と絶望を混ぜ合わせたような感情が込み上げる。世界中で、生涯バージンのまま一生を終える女

の数は何れぐらいにのぼるのだろうかという愚問が湧く。

勿論、自分がルックスだけで勝負できる女でないことは、鏡を見ればすぐに分かる。しかし、びつくりするようなブスでも、時間がくれば誰かの妻になり誰かの母親になっているのだ。美人とハンサムな男にだけに、恋愛や結婚が許されている訳ではない。世の中にはありふれた男と女がひしめき、ありふれた恋愛や結婚をしている。それが社会の大筋の流れだろう。雅子がそのありふれた流れからはみ出したような孤立感を覚え始めたのは、一体いつ頃からだったのだろうか。

地方の高校から、英語教育が他の大学に比べてレベルが断然上だという、東京の有名私立大学に入り、卒業後は通訳の道を選んだ雅子。

英語という外国語に多大な興味を持ったのは、小学校へ入る前だった。ABCという不思議な発音が幼い雅子を捉え、大きくなったら、英語という言葉を話す外国へ行ってみたいと夢見た。

母にねだり地元の英語塾に通い始めたのは、小学1年生の頃からだ。アメリカへ留学した事があるという塾の先生の英語の発音が、子供心にもネイティブとは全然違うのが分かった。取り寄せた教材のアメリカ人の発音と比べて、リズム感がなく、ぎこちない英語という感じがした。だから、ここでは結局、英語の文法をしつかりと頭に叩き込んだ。

本物の英語に接したのは、県庁のある中学校に上がってから。ここでは、日本人の奥さんを持つ、イギリス人が英語教室を開いていたので。ここへ通う事になって、雅子の英語熱はピークを迎えた。

言葉は未知の世界を開く扉の鍵だと、雅子は思った。英語をマスターしその扉を開くと、雅子の前にこれまで想像もできなかった世界が待っている。そう実感すると英語の勉強が面白くてたまらない。雅子の頭はスポンジのように、英語を吸収していった。

高校を出るまでは、英語習得に夢中だったことに加えて大学受験の準備で、ボーイフレンドというキーワードは、頭の片隅にもなかった。勿論高校では、誰と誰が付き合っているとか、B子は最後まで行ったなどのゴシップがささやかれていたが、雅子にとってはまったく異世界の出来事としか思えず、何の興味も覚えなかった。

雅子に、いわゆる青春がやってきたのは、大学に入ってからだった。大学や、東京での一人暮らしにも慣れ、友達も出来た。合コンにも顔を出したし、友達とダブルデートをしたこともあった。携帯の電話番号も交換したが、電話がかかってくることはなかった。雅子の方から電話をかけるような積極性は持ち合わせていなかった。

社会に出て翻訳と通訳を専門にした事務所に勤めた頃も、プライベートでは何の変化もなく、住んでいるアパートから事務所へ通うだけの日々が続く。そして最終目標の通訳の国家試験の準備が始まると、ボーイフレンドどころではない秒刻みの生活が続いた。

無事合格し、仕事がフリーランス形式になると、もう会社という後ろ盾はなく、サバイバルのため無我夢中で働いているうちに、気が付くと、雅子は27才でバージン、そしていっぱしのキャリアウーマンに成っていた。

仕事は多忙で充実しているも、無味乾燥な私生活に空しさで胸がいっぱいの日々が限度に達した時、雅子はワーキングホリデーでオーストラリア行きを決意する。

仕事上の関係者には、現地で英語をブラッシュアップしたいためと説明したが、雅子はこの旅のキーワードは外人のボーイフレンドを作ることと、密かな期待を抱いた。

仕事上、雅子は日本人を妻に持つオーストラリア人のビジネスマンにかなりの数出会ったが、ハンサムな夫に冴えない地味な日本人妻というカップルは稀でないという意外な発見があった。オーストラリアならボーイフレンド、うまく行けば将来のハズバンドが見つかるかも知れないという希望を持った雅子を、一体誰が責めることが出来るというのか。それに雅子には英語が完璧に喋れるといううちから強い武器があるのだ。たとえステディなボーイフレンドが無理だとしても、初体験をする、エッチをするという事を絶対に実現する、そう心に誓った。

しかし、1年間というワーキング・ホリデーの終わりを目前にして、そういうドラマは起きなかった。

シドニーに到着後、数ヶ月間上級の英語学校に通ったが、ここでは学ぶものは何もないと失望した。メルボルンや、ゴールドコースト、ケアンズにもツーリストとして足を伸ばし、シドニーではワーホリが集まるパーティーに出たり、ワーホリだけの合コンにも出た。そこでも心がときめくようなことは起きなかった。パーティーではいつものように、オージーに「ヨア・イングリッシュ・イズ・パーフェクト!」と感嘆される、それだけだった。そして、大学を出て以来こんなにくつたりとした生活は初めてだなと思ってる内に、あつという間に1年が過ぎた。

雅子はこちらで、自身を表現するピッタリの言葉を見つけた。雅子は醜い訳ではない。plainでasexualな女だ。凡庸で性的なおいが皆無の女。そんな女に男が近寄ってくる筈がない。美紀からよく、「雅子さんのように語学に才能のある人が羨ましい。私も若いときにもっと勉強すればよかったな」と賞賛されたが、英語が喋れることが何だというのだろうか。そんなものは男をゲットするために何の役にも立ちほしくない。

ジンが効き始め、眠気が襲ってきた。雅子は籐椅子から立ち上がり、よろよろと自分の部屋へ向かった。

「雅子さん、おはようございます。コーヒー出来てますよ」

キッチンテーブルで男とコーヒーを飲んでいた明美は、部屋から出てきた雅子を見ると、明るい声を掛け立ち上がり雅子用のマグを手にすると、パークレーターのコーヒーをそれに注いだ。角砂糖一個に少々ミルクを加えると、「ハイ、どうぞ」と雅子の前に差し出す。雅子のコーヒーの飲み方も先刻承知の慣れた手付きだ。

「こちら、ピーターです」と、男を紹介することも忘れない。「ハロー」と男に声をかけ、雅子もテーブルに着いた。ピーターは、頭にそう大したもの詰まっているようには見えないが、がつちりした体格の気の良さそうな若者だ。

明美を見る度に、雅子はある種の感慨に打たれる。

25才を超えている明美だが、ティーン・エイジャーだと言っても誰も疑わないだろう。黒目がちの大きな瞳と少女のような風情は、何か純なものを感じさせる。が、実際は男をとつかえひつかえるスラットなのだ。明美はそういう奔放な性をみじんにも感じさせない。その矛盾する大きなギャップが、いつも雅子をして参りましたと脱帽させる。

「マサコ、ジャパンのどこから来たの」

「東京よ」

本当は違うが、出身地の県を言っても、オージーにはチンプンカンプンの筈。だからこの種の質問には、いつも東京と答えておはく。

「どこでそんなにパーフェクトな英語を習ったの」

「学校で勉強したのよ」

良く聞かれるこの質問にも、そう答えておく。

性格はいいんだろうなと、無邪気とも言える天真らんまんなピーターを見ながら思う。ただ彼の典型的なオーストラリア英語の発音に苦笑する。

一口に英語と言っても、日本語に多くの方言があるように、国によって千差万別。雅子は最初の外人の先生が英国人だったため、イギリス英語。日本人に人気があるのはアメリカ英語。この二つ英語の発音は、雲泥の差がある。イギリス英語でさえ、あそこは階級社会なので、出身によって発音が違ってくる。一番とされるのは、ロイヤルファミリーや上流階級がしゃべるいわゆるクイーンズイングリッシュ。アイアンレディと異名をとった、今は亡きサッチャー女史は労働階級の出身だが、ものすごい努力をして、キングズイングリッシュをしゃべるようになったのは、有名な話。きれいな男の代名詞、ベッカムは端正な顔だけ見ていると、どこの高貴な出身かと思いがちだが、口を開くと労働者階級出身がばればれの英語だそうだが、日本人は区別がつかない。

オーストラリア英語は、簡単に言うと、**ア**エイを**アイ**と発音する。だから TODAY は、トユデイではなく、トユダイと発音する。田舎英語とみなされている。来豪するまえに、雅子はそういうインフォメーションをゲットしていたが、来豪以来、その田舎英語を聞いた事がなかった。多くの移民を受け入れ、国がグローバル化したため、そういう生粋のオーストラリア英語は淘汰されていったのだろうと想っていた。ところが、このピーターはしっかりとオーストラリア英語の伝統を守っていたのだ。「マサコ、トユダイは何をする予定」と聞かれ、雅子は苦笑したのだった。「トユダイ、映画を見にいくつもり」と返すと、ピーターは爆笑した。それに連れ、雅子も明美も大笑いした。

屈託の無いピーターと少女のような明美を見てみると、自然と顔がゆるんでくる。このピーターは、人生の悩みとか悲しみには無縁に違いない。多くのオージーが、何があっても、「ノーワリー・ノープロブレム」で生きているのだ。そう思うと、雅子の中で、チャレンジ精神が湧いて来た。このワーホリの旅の最低目標だった、バージンにサヨナラをするというチャレンジが。シドニーを発つまで、まだ10日ある。とにかくアクションを起こそう。

雅子は腕時計を見る。9時になったところだ。今から1時間ここに居ても起きなければ帰ろう。カウンターの椅子に腰掛け、カクテルをすすりながらそう決める。

CBDにあるクラブ。20代後半から30代のヤングアダルトに人気のあるクラブだ。

金曜日の夜。会社を退けた後、どこかで食事をしてそしてここへ来たのだろう。スーツ姿の男女が多い。ミュージックは流れていないが、さまざまな会話が重なりかなりの音響となっている。今から雅子は1時間ばかり、ボーイフレンドと待ち合わせをし、イライラし

ながら待っているという演技をしなければならぬ。

千鶴子の友達が豪語したものだ。「デートにあぶれたら、一人でクラブに行けばいいのよ。そこでボーイフレンドと待ち合わせをしているのになかなか来ないって感じていれば、絶対男から声がかかるって。特に簡単なのは、CBDにあるクラブ」。

それは確かに一理あると雅子は思った。週末に一人でクラブに行く勇氣は皆無だが、待ち合わせという大義名分があればクラブのドアを押せる。今、雅子は簡単だというクラブで、それを実行していた。

20分が過ぎ、雅子は今度はジントニックをオーダーした。ちらちらと腕時計を見ることも忘れない。しかし30分が過ぎ40分が過ぎても何の変化もなかった。10時が過ぎたので、雅子はあきらめ帰ることにした。芝居の終わりに、もう一度腕時計に目をやる。その時どこから声が出た。

「どうしたの？彼にすっぱかされたの？」声の方向を見ると、何のことはない。ジントニックを作ってくれた、カウンターの中の初老のバーテンダーが微笑んでいる。「ええ、そうみたい」「携帯は持って来なかったの？」「彼に連絡出来るじゃない」「そう、家に置き忘れて出てきちゃった」（勿論携帯はハンドバッグの中にある）「携帯を持たずに家を出ちゃいけないよ」と、彼は雅子にウイंकをした。

雅子はカウンターの椅子から下りながら、こんな声しかかからない我が身を他人事のように哀れに思った。彼との待ち合わせを装う女の子というアイデアはなかなか要を得ていると思ったが、その女の子には可愛いという形容詞が必要なのだ。

ボンダイジャンクション行きバス停へとぼとぼと歩く。ハイヒールの靴音が、惨めさを倍増する。雅子は最後の手段はもうあれしかない。そう覚悟をした。

バスルームに入り、身だしなみを整えた。何回も同じようなことをしている。見る度に綺麗になって行く訳では勿論ない。緊張感から、バスルームに出たり入ったりするのをストップすることが出来ないのだ。

もうすぐ、このホテルの部屋に男が来る。雅子が買った男が。

日本へ帰る前の数日間はホテルに泊まり、そこから空港へ行くことにしていたが、そこで売春夫すなわちコールボーイを買うという一大決心をした。それが、シドニーでバージンにさようならをするための、最後の手段なのだ。

シドニーでは、普通の新聞にも、男女用のこの種の広告が満載されている。雅子はその中から一番趣味のいい広告を出していたエスコート・エージェントに電話を入れ、男を選んだ。旅の恥はかき捨てとはよく言ったものだ。こんなことは日本では想像も出来なかった。かつてよくオヤジたちの東南アジアへの買春旅行が非難の槍玉に上がっていたが、自分も同じことをしているのだという自嘲に蓋をした。

ドアがノックされた時、雅子の心臓が少しだけ飛び上がったような気がした。ドアを開けると、ほぼ希望通りの男性が、営業用のスマイルを浮かべてそこに立っていた。20代後半。ブロンドで身長6フィート以上。筋肉質。美形というよりは普通っぽいグッド・ルッキング。それからアジア人に偏見のない男性というリクエストをした。

「アーケーミー？」「イエス。あなたがジョンね」（本当の名前は教えていない）。

雅子はジョンを部屋の中へ招いた。部屋のライトの中で見ると、なかなか感じのいい男であることを確認し、雅子は安堵する。もつとそれらしいコールボーイを予想していたから。ジョンの目の中で（へえー、一体何故？）という好奇心一杯の疑問符が大きくなるのが、見て取れる。

「どうしたの？」

「えっ…。とっても若いので驚いたよ。中年のジャパニーズレディが、クライアントだと思っていたので」

「何で若いジャパニーズ・ガールがこんなことをしてるんだらうと、訝っている訳？」

「その通り」

雅子は少しひるんだが、思い切って口にした。

「それは、誰も私をフアックしてくれないからよ」

ジョンは目を丸くし顎を落とすような表情をすると、それから大笑いした。ジョンの豪快な笑いにつられて雅子も笑った。雅子のは苦笑いというものだ。

「いやー、驚いた。ジャパニーズ・ガールがフアックなんて言うのを初めて聞いたよ」

雅子だってスラングを使ったことはない。ましてや、フアックなんていう最悪のスラングはこれまで一度だって口にしたことがなかった。ただ、コールボーイを買うという行為が、雅子をして偽悪的な言動を容易にさせているような気がする。

「それに、アーケミーの英語はパーフェクトだね。どこで英語をマスターしたの？」

「英語が喋れることは、何の得にもならないわ（女性としてもてる訳ではないわ）」  
ジョンは、雅子を好奇の目で見ながら聞く。

「良ければ、何か飲みながら話をしない？」

雅子はヤレヤレという気持ちになる。いつもそうだ。英語がペラペラだから話はしたい。それだけ。その先へは決して進まない魅力のない女。それが私だと自虐的な思いが一瞬浮かぶ。

けれど今夜は違う。今夜はその先へ進むためにお金を払っているのだ。そう思うと、慌てることはない。このジョンというコールボーイと、少しコミュニケーションを取ってもいいかなという気持ちに変わった。

「分かったわ。飲み物は何がいいの。大体のものは揃っているわよ」

「じゃビールを」

雅子は緊張を和らげようと、ジョンが来る前に数杯グラスを重ねていたが、再びジントニックを自分用に作り、ジョンに缶ビールを手渡した。そして、小さなソファ・セットが置かれている部屋のコーナーに、ジョンを促した。

「あなたは何故こんなことをやっているの？」

雅子は、意地悪なインタビュアーになってやろうと決めた。

「学費稼ぎ」

「学生なの。で、専門は」

「ヒューマン・コミュニケーション」

「あら、じゃ好都合のアルバイトをしている訳ね」

雅子の言葉には明らかに刺があったが、ジョンは無頓着だ。

「そう。時間的にも自分の都合のいい時だけ働けるので便利。それに素晴らしいヒューマ

ン・スタデイの場だしね」

どこまでも楽天的な言葉が返ってくる。

「でも不細工な女が相手の場合(例えば私のように)、どうやってあなたのプリックをスタンドアップさせるの」

男性の性器の意味を持つプリックも、言葉にするのがはばかれるスラング。

「その時は、憧れのスターやシンガーを思い浮かべながら、想像力を駆使して励むだけ」

ジョンは目を細めて面白そうに雅子を眺めていたが、今度は自分が質問する番だとばかりと口を開いた。

「アーケーミーはバージンなの？これまでの経験から言うと、スラングをボンボン使う女性には、アバズレのビッチか攻撃的なバージンのどちらかだけだ…。アーケーミーはアバズレには見えないから」

コールボーイを前に取り繕うことはない。

「そう、私はバージンよ」

これまで誰にも言ったことのない言葉がこぼれた。すると心の中に封印していたものが解放されたような開放感に満ち、続けて堰を切ったかのように言葉が次から次へと流れ出した。

「これまでずっと、一人だけでいい私のことを好きになってくれる男性をめぐり合うことを祈ってきたわ。ダブルデイトもしたし、合コンにも頑張って出掛けたわ。でも誰からも声がかからない。気が付くと、通訳という立派なキャリアは手にしていても、もうすぐ30に手の届く年増のバージンという有様よ。もしかして外国でならと思いついたら、1年間住んだけど、やっぱり同じこと。英語がペラペラだから話したいという男は居ても、付き合いたいと言ってくれる男は一人も居なかった。それは、私が plain で a s e x u a l だからよ。だから日本へ帰る前にバージンを捨てようとして、あなたを買ったのよ」

雅子は知らぬ間に涙を流していた。悔し涙ではない。癒しの涙と呼ぶべきだろう。何故なら、喋ることで心が次第に軽快になって行くのを感じていたから。

ジョンが正面に立ち中腰になって雅子の涙を指でぬぐうと、静かに両手で雅子を抱き締めた。雅子は目を閉じた。

ジョンの腕枕でベッドに横たわる雅子は、男に守られるように抱かれることが、何と気持ちのいいことなんだろうと感じていた。どれぐらいの時間が経ったのだろう。ほんの一瞬の出来事だったような気がする。

「どうだった」。ジョンの声が暗闇の中でやさしく響く。どう答えるべきか迷う。「ナイス・メモリーになると思うわ」と、言葉にする。「しばらくこうしているといいよ。僕がアーケーミーをやさしく抱きしめておくから」。雅子は、身体を深くジョンに預けた。

目を覚ます。どういう状況に居るのかを理解するのに数秒を要した。心身ともにリラックスしたのか、うたた寝をしてしまったのだ。隣に居たジョンが消えている。

現実に戻った雅子はベッドから跳ね上がり、急いでハンドバッグの中身を調べた。外国で、眠っている間に売春婦(夫)に身ぐるみをはがれるのはよく聞く話だ。良かった。財

布の中身もOKだ。パスポートもエア・チケットも大丈夫。そして、テーブルの上に100ドル紙幣が2枚と置手紙があるのに気付く。

置手紙は、ジョンからのものだった。

「Dear AKEMI。アケミはplainでもなければsexualでもない。インテリジエントで興味深い女の子だよ。日本で必ずアケミに似合った素敵な彼に出会う。それは僕が保証する。女の子の初体験はいいメモリーであるべきだから、お金のやり取りをするのは禁物。だから貰った200ドルは返しておくね。グッドタイムをありがとう。日本でグッドラック！ ジョン」

売り専の男から貰った「ラブ・ストーリー」。これは喜劇なの、それとも悲劇？

機内の安全ベルト使用と禁煙のサインが消えたので、雅子は締めていたベルトをルーズにし、シートを斜めにして目を閉じた。昨夜のことを思い浮かべる。ジョンの顔、手足、身体。そして初体験の感覚を。それからジョンに貰った手紙を。手段はどうであれ、今回の最低の目的は果たしたと自身に言い聞かせる。小さな満足が生まれた。

### セックス大好き

「ねえねえ、ちよつと聞いてくださいねー」

チエが甘えた口調で会話の主導権を取ろうとする。甘ったれた喋り方が可愛いと錯覚した、大昔の日本のブリツ子はシドニーで生き延びて生息していた。

「この間、ガールズ・トークというのをしたんでーす」

「何なの。そのガールズ・トークというやつは」

「あそこが一番いいのはナニジンかというトークでーす」

「それで」

「一番いいのはアメリカ人でーす。でっかくて硬い。次は日本人。小さいけれどとても硬いでーす。最低なのはオージーでーす。大きいけれどフニャフニャ」

ドツと笑いが起きる。明美は内心、ちよつとちよつとそれは違うんじゃないという気持ちになるがあえて口にしない。

「でも一番いいのはやつぱり黒人よ。大きすぎて太くて硬くて、茶筒みたいなものよ。私の友達は大き過ぎるから、あそこの根元にタオルを巻きつけてやってももらったんだって」

美紗子が、身振り手振りでそう説明する。

「黒人のと比べられちゃ、日本人は出る幕がないよな」

香川が笑いながら、部下たちに同意を求めた。

向こうのテーブルでカラオケが始まった。スーツを着た中年のリーマンが「昂」を歌い始めた。なかなかの音量で、堂々と歌い終えると皆から拍手喝采を浴びている。

明美はこの店で、時々自分がシドニーに居ることを忘れてしまう。

白と黒を基調にしたシックな店内に、ゆつたりとしたソファとテーブルが8セット揃え

てある。全てが埋まることは稀だが、普通6割方は埋まるテーブルの客は日本人。商社や旅行会社や銀行に勤める日本人のサラリーマンだ。シーズンになると、赤銅色に焼けた一団で店内がいっぱいになる。遠洋漁業に従事する人たちの群れ。船がシドニー港に寄港するためだ。

ウェイターが膝を折って、お手拭を持ってきたりオーダーを取ったりする様子も日本と変わらない。少なくとも、日本の地方都市のB級のクラブには負けないと明美は思う。

日本で、テレビ局という派手な職場であったが、受付という普通のOLの仕事をしてきた明美は、シドニーでの仕事はこれまでとは180度転換したものをと考えていた。

明美はシドニーにこのようなクラブがあることを知り、クラブのホステスをすることに決める。クラブは3軒あったが、どれも怪しいところのないちゃんとしたクラブで、どこもホステス不足だった。だから売り手市場だったが、給料も条件も大差はなかった。

明美は、クラブ「藍」を就職先に決めた。明美を面接した藍子というママは、ねっとりしたその目付きに水商売のオーラが漂っていたが、口を開けるとぶっきらぼうな喋り方で、10分も話すと太っ腹な女性というのが分かった。そのギャップを明美は面白いと思いい、その場で働くことを即決した。

ホステス業を始めてすぐ思ったことは、時間給は安かったがこんなことがお金になるのかという驚きであった。男たちの傍に座り、することはお酌をするのとタバコに火を点けることの二つしかない。面白い会話を提供する必要もない。むしろ客の方が明美たちを喜ばそうと、ジョークを飛ばしたり面白い話を聞かせてくれる。

クラブは常時10人前後の女性を抱えていたが、その8割までが素人。1人か2人、日本でもホステスをしていたというセミプロが混じっていたが、明美はその彼女に聞いてみたことがある。「日本でもホステスの仕事って、こんなにイージーなの？」彼女は、「日本ではノルマがありしがらみが出て、とてもじゃないけどこんな学生アルバイトのような気軽さはないわよ」と笑っていたが…。

とにかく定職をシドニーでゲットした。語学の心配は杞憂に終わった。日本語だけで十分に生活できる。

昼間はショッピングをしたり友達に会ったり散歩をしたりして時間を過ごし、夜は「藍」に勤め、休みの日はその時その時のオージーのボーイフレンドと一緒に居るというライフ・スタイルが出来上がる。給料の支払いが週ごとの週単位の生活は目まぐるしく、あっという間に1週間が過ぎて行く。

幸せかと聞かれば答えに窮するが、快適な生活というのは実感できた。一番いいのは、個人主義の西洋社会では「他人の眼」というのが皆無であること。それは「冷淡」というものと背中合わせのものではあったが、明美には都合が良かった。

ここでは誰からも、「可愛い顔をして、男出入りの激しい女」と、日本に居た時のように噂をされることはない。

「明美ちゃん。渡辺さんのテーブルへ行っちゃおうだい」

藍子ママがそっと明美に近付くと、そう耳元で囁く。明美は頃合を見計らって静かに立ち上がり、渡辺のテーブルへ移動する。

今夜はかなりの客が入っている。最近売り上げが落ち余りいい顔をしていなかった藍子だったが、今夜は上機嫌でテーブルの間を泳いでいた。

「渡辺さん、今晩は。いらっしやいませ」

明美はそう挨拶し、渡辺の傍に座る。

「明美ちゃん、しばらく。元気だった」

商社に勤める40半ばのオジサンである渡辺は、笑った時、どこか少年のような無邪気な面影が残っており、それに惹かれて明美は誘われた時応じた。勿論妻子持ち。

番号を教えた携帯に電話が入り、最初のデートはホテルの最上階にある高級日本料理店でのディナーだった。ディナーが終わりに近付いた時、「もしこのホテルで一部屋を取れば、明美ちゃんは来てくれるかな」と渡辺が照れ笑いをしながら聞いたとき、明美は簡単に「いいですよ」と答えていた。

「何を飲む？」

「じゃ、グリーン・カクテルを頂きます」

渡辺が照れくさそうな笑みを浮かべる。明美がグリーン・カクテルをオーダーした場合、クラブが跳ねた後ホテル行くのはOKという意味で、二人だけに通じる暗号だった。

明美の初体験は高校2年の時だから普通だ。相手は好きだった同級生。

初めてエッチをしてみたことは、好意を持っている男と裸で抱き合うことは、何と気持ちのいいことなんだろうという充足だった。そして、セックスが好きになるだろうなという予感がじわっと体中を浸した。

最初のセックスの後、明美は感じのいい男を見ると、この男とエッチをすればどんな感じになるのだろうと想像するのが癖になってしまった。それは陰湿で淫らな妄想ではなく、カラッと明るい快楽の妄想と言える。ただ、エッチを想像の域に留めておくだけの常識は持ち合わせていた。思うままに行動していれば、母親の耳に親としては聞きたくないような噂が入るに違いない。京都の西陣で小さな料理店を営みながら、女手一つで育てて貰った母が悲しむようなことはしたくなかった。

明美には父親の記憶がまったくない。小学生の頃、母から「明美のお父ちゃんとは、明美が生まれてすぐ離婚し、それからは全然行き来がないのや」と、一言聞かされただけが、さらに詮索しようと気持は起きなかった。

東京の大学に行くことが、初めて母親の反対を押し切って取った行動だった。そこで青春を、もっとハッキリ言えばセックスを謳歌した。明美の中でおとなしく飼いの慣らししていた好奇心が、大きく炸裂した。

明美がセックスをしてもいいと思う男の条件は難しくない。160cmの明美より背が高く感じのいい男ならOK。そして、この世にはそういう男がゴマンと居た。

東京での学生生活では、セックスの機会はそこらじゅうに転がっていた。学内でコナをかけられることもある。合コンに行けば、明美から見て感じがいいと思う男から声がかかる。彼らとデートすれば、行く着くところへ行き着く。

セックスのプロセスで明美が一番好きなのは、口を強く吸われ、衣服を脱がされ、ベッドに押し倒され、相手も全てを脱ぎ捨て覆いかぶさった来た時、明美の右手は静かに男のモノを握り締める、その瞬間だ。硬く熱いものを握り締めると、正体見たりという感覚が身体中を走り、身体が浮上する。

全ての男の顔が違うように、男のモノを握った感触も千差万別だった。長さとか太さとかは問題ではない。男に対して好感さえ抱けば、セックスというゲームを最後まで楽しめる。けれど終わった後、残るものは何もなかった。だから、4年間の学生生活で数え切れないほどのセックスを体験したが、ステディになりたいと思う男は一人も居なかった。

気が付くと、明美は「少女のような可愛い顔をして、男出入りの激しい女」というレックテルが付いていた。これは決して侮蔑の言葉ではなく、賞賛の言葉だった。明美の場合は、誰にでもやらせる公衆トイレという意味ではなく、性の垣根を越えた飛んでる女という意味を含んでいたから。

大学を卒業後、あるテレビ局の受付という職を得て、社会生活がスタートした。ライフ・スタイルは変わらなかったが、男たちの反応が変わった。明美を結婚の対象として付き合いたいという男性が出てきたのだ。

結婚、それは明美に一对一の男女関係を突きつける。明美にとって、結婚はどこか他人事のような出来事だ。しかし、24、25になり、周囲を見回し、明美は生き方を軌道修正しなければならぬかなと時々考えるようになった。このまま、感じのいい男に出会えば手軽にセックスに走るといふ生活を続けて行く事は、不可能に違いない。一人の男を選び、結婚し、子供を産み、家庭を築いて行かなければならない。そのことを想像してみたが、まるつきり実感が湧かなかった。

自身が淫乱というのでもなければ色情狂でもないことを知っている。何故なら、誰とでもセックスは出来なかったし、セックスがしたくて欲求不満になるといふこともまったくなかったから。ただ、性に関して世の中の常識（高校時代に初体験をすまし、だいたい4、5人の男性と関係を持ち、そして結婚をして家庭に入るといふ平均的な日本女性の性体験のストーリー）から、大きくかけ離れていることも分かっていた。明美には5人の男と寝るのと50人の男と寝るのがどう違うのか、理解できなかった。そこには、多分モラルというものが存在するのだろう。

結局実行できなかったのだが、精神病理学者のようなスペシャリストにカウンセリングをして貰おうかと考えたことがあった。明美のこういう性癖は、もしかしたら男親なしで育ったというトラウマから来ているのかも知れないと思ったからだ。

明美はカウンセリングの代わりに、外国へ行くことにした。誰も知った人の居ない異国で自身を見直せば、何か新しい展開が起きるのではないだろうかと思えた。選んだ国はオーストラリア。

場所を変えただけでは、新しい展開は起きなかった。セックスというゲームのパートナーが、オージーに代わっただけだ。それから、親子程年齢の離れた日本人男性と関係が突発事故のように起きた。

日本でよく外人のモノは大きいけれどフニャフニャという記事やレポートを目にしたが、明美の経験から言えば、まったくのたらめということがよく分かった。大きいのは事実だが、フニャフニャではない。あれは外人コンプレックスがある日本人男性による、根も葉もないでっち上げではないかと疑っている。

渡辺とそういうことになったのは、勿論渡辺に好感を持ったのは事実だが、異郷でのホ

ームシックが変形したようなものだ」と明美は思っている。

明美は日本では、いわゆるオジサンにはまったく興味がなかった。同年代の友達で本命のボーイフレンドを持ちながら、オジサンと付き合い、ブランド物のハンドバッグを買って貰ったり、高級レストランに連れて行って貰ったりする女の子はザラに居たが、明美は生理的にオヤジとエッチすることは考えられなかった。だから事の成り行きで渡辺とそういう事になった時、明美自身が驚いたが、あれは、異国でのホームシックを背景にしたハプニングと分析した。ホームシックを慰めて貰うには、同年代の日本の男より年配の日本の男の方が好ましい。

多民族国家であるオーストラリアには、それを反映してSBSという公営のテレビ局がある。ここでは各国のニュースや映画が、その国の言葉で放映されている。日本の7時のNHKニュースも1日遅れで流れる。

ある夜、明美はSBSで、フランス映画を興味深々で観た。この場合、英語のサブタイトルが入るが、英語でしゃべる映画よりも、もつと理解できる。

それは17才の美少女が、パリの街で高級コルガールのウェブに登録すること誘われ、好奇心から売春を始めるのだが、次第にそれにのめり込んでいく姿を描いたもの。お客は30代、40代、あるいは70代の男性でかなり年上ばかり。70代の男性が腹上死したため、全てが明るみになるのだが、そこから彼女のカウンセリングが始まる。

スレンダーな美しい少女で、住んでいるパリの中心街のアパルトマンも中産階級を象徴している。通っている高校では友達も多く、普通の生活をエンジョイしている。いわゆる健全な少女が、何故売春に走るのか。客の中には、彼女に屈辱的なことを強いる者も居る。それでも売春を止めない。ただ、両親は離婚し義父が居る。

カウンセラーはそこに目を付ける。父親の不在が、彼女をして年上の男性との売春に走らせたのではないかと。だが、彼女は「父とは毎週電話で話してるし、母の再婚相手の義父とも何のトラブルもない」と、言い放つ。

ある夜、無邪気に義父といちゃつく少女を見つけた母親は、「この子は生まれつき、こういう性癖を持っているのよ」と顔をしかめる。映画は、また売春に戻ることを示唆して終わる。

この少女が多くの男性とセックスをするところは、明美と同じだ。でも明美は年上の男には興味がなく、それにセックスに換金性を持たせない。売春なんてできる訳がない。父親不在という環境は同じだが、少女と同様に、それがネガティブな影響を与えているとは思えない。ただ深層心理では、専門家ではないのでわからないというのが本音だ。母親の、「持って生まれた性癖」が、一番素直に納得できる。私もこういう性癖を持って生まれてきたのかも知れない。

「明美ちゃん、ジーンズで来たのね！」待ち合わせの場所タウンホールに姿を見せたチエは、明美を見ると開口一番そう言った。「ジーンズじゃダメ？」「ううん、構わないけど、でも乱パの時はスカートの方が都合がいいよ。ジーンズだと脱いだり穿いたりするの面倒じゃん」「あ、そうか。思いつかなかった」

チエと一緒にタウンホールから歩いて15分程のマンションへ向かう。そこで今夜8時

から乱交パーティーが開かれるのだ。明美は確かに多くの男たちとセックスをしてきたが、乱パなどにはまったく興味がない。

それでは何故それに顔を出すことにしたのかというと、ワーホリ社会の伝説の男マサに会うためである。「ラブ・マシーン」という異名を持つマサのことは、シドニーに住むワーホリならどこかで必ず耳にする。シドニーですでに3ケタ以上の女性とセックスの経験があるというつわものだ。

明美はチエからこの乱パに誘われた時、マサが参加するというのを聞いて承知した。会いたい理由は、同病相憐れむからではなく、同病相理解しえるかもしれないという希望からだ。

タウンホールから10分ぐらい歩くと、チャイナタウンに入る。世界の大きな街に必ずあるチャイニーズが密集する区域。チャイニーズ・レストランや食品店が軒を連ねアジア人でごった返す場所だが、シドニーのチャイナタウンは高層マンションも林立する。高級マンションではなく、大急ぎで造ったような安普請のマンションが多い。

目的のマンションもそういうマンションの一つだった。12階にある部屋のドアを開けるとビートの利いた音楽がワツと身体を包む。玄関に入るとすぐラウンジとオープンキッチンがあり、その奥には多分2、3ベッドルームがある筈だ。今夜ここに居る男の子たちがシェアしているのに違いない。

サイドランプや卓上ランプだけが点けられていて、照明がグツと落ちていている。テレビは点けっぱなしだが音声は消されている。ラウンジのおおきなソファで話したり軽くキスをするカップルが居る。

「彼女たち、ビール、ワイン、それともウイスキーとかジントニックとか」と声がかかった。チエはワインを、明美はビールを貰い、ソファの片隅に陣取る。

「彼女、いいっすか」。早速チエがナンパされ、明美はその茶髪の男の子に、座っていたスペースを譲る。

乱交パーティーだからと言って、そこらじゅうで裸になって絡み合っている訳ではない。普通のパーティーを少し親密にした感じだ。声を掛けてきた相手が気に入らなければ、「ノー・サンキュー」断つてもいいと、チエからアドバイスを受けている。男女合わせて10数人のワーホリが集まっている。チエによると、この種のパーティーで大切なのは、男女の数を男をひとり多くしておく事だそう。女の子があぶれないようにするためらしい。

「じゃ、ちよつとハッピー・タイムに行ってくださいませ。それから、マサに明美がすごく興味シンシンと伝えておいたからねー」ダイニング・テーブルの椅子に座ってビールを啜っていた明美に、チエがそう言葉を投げると茶髪の男の子に肩を抱かれベッド・ルームへ向かった。

一体どの人がマサなんだろうと見回していると、一人の男性が明美に近付いてきた。「明美さん？僕マサです」「コンバンワ。どうも」中肉中背の普通っぽい男性が笑顔を見せている。「どうしたの。なんだかすごくチェックが入ってるみたいだけど」「ごめんさい。そういうつもりじゃ」明美がマジマジとマサを見ていたに違いない。「よければ、ベッドの方へ行く」明美は肯きマサの後に従った。

最初の部屋をノックすると、「入ってる」と声が上がった。明美は何だかトイレみたいとおかしくなる。次にノックした部屋が空いていた。ベッドのサイドテーブルの上の小さな

オレンジ色のランプが、部屋の中を秘密っぽい雰囲気仕立てている。使われたコンドームのパッケージがテーブルの上に捨てられている。明美はマサの正面に立つと、切り出した。

「ごめんなさい。私こういう乱パには全然興味がないの。実はマサさんと話がしたくて」

「話をするだけで乱パに来るかよ」

「ごめん。私、マサさんと同人類かなと思ったので」

「どういう意味」

「マサさんは、オーストラリアでセックスの相手が、既に3ケタに達すると聞いたけど。そうなの」

「それがどうしたって言うんだい」

「マサさんほどじゃないけど、私もこれまでエッチをした数を数えると、3ケタ近くになると思う」

何だよ、この女。という感じだった顔つきが、少し関心を持つような表情に変わった。

「それで」

「うん。だんだんこれはやばいんじゃないかと思うようになってきた」

「どうしてだよ」

「だって、これから結婚したり家庭を持ったりしなきゃなんないじゃん。それが平気で多くの男とエッチできる女は問題ありだよ」

「そんな心配しなくていいって。好きな男と結婚したら丸く収まるって」

「これまで感じのいい男にはいっぱい会ったけど、この人とずっと一緒に居たい思ったことはゼロ」

「明美ちゃんだっけ。心配しなくても必ずそういう男が出て来るって。世の中そういう風になっていくんだよ」

明美の持つ問題は、そんな世の中の自然の摂理で解決するものではない。言葉でピタリと当てることができないが、心のどこかに欠損があり一人の男にコミットできないような気がする。

「マサさんは、どうしてたくさん女の子とエッチをするの」

「どうして山に登るのかと聞かれて、そこに山があるからという答えとほぼ似てるかな。

世の中に可愛い子がいっぱい居るからさ。でもセックスが好きというより、そこまでのプロセスが好きなかな。駆け引きとかコミュニケーションとか。単に気持ちいいのが好きだったら、風俗へ行くのが一番いいよ。明美ちゃんの場合は」

「私は感じのいい男だなと思ったら、裸で抱き合いたいと思っちゃうタイプ。それとこれは誰にも言ったことがないんだけど、男の人の立ってるのを握り締めるのが好き。本番よりもその方が好きかもしれない」

マサは明美を凝視した。何だこの女。乱パに来て俺に身の上相談を持ちかけるなんて、なに考えてんだよという目付き。

「明美ちゃん。何だか男というオモチャで遊んでる子供みたいだな。うーん。もしかして性の悦びというやつをまだ経験してなかったりして」

「でもいい気持っていう感覚はあるよ」

「うん。ちょっと違うと言うか、かなり違うものだと思うけど。でも悩むことはないよ。」

明美ちゃんもそれを経験して大人になって行くって」

「そうかな。マサさんは結婚すれば、だれとでもやるようなことはストップするの」

「勿論。オレ、本命の彼女が出来た時は、いつも彼女一筋だったもの」

「へー、正常なんだマサは。」

「とにかく、そんなことで悩むなんて時間の無駄じゃん。エッチすることは健康な証なんだよ。やれる時にどんどんやってた方が身体のためにもいいって。それに、明美ちゃんは可愛いから男にモテモテだと思うけど、30・40のオバサンになったら、誰も声をかけてくれない、声をかけても誰も相手にしてくれないってことになるんだから。本当だよ。だから何も悩まず、やれる時はどんどんやる。それしかないって」

マサはそう言って朗らかに笑った。

明美は、タクシーを拾うため大通りへ向かう。

ラブ・マシーンなんていう大げさなニックネームが付いているが、マサは普通の感じで、明美は好感を持った。もし誘われていたら応じていただろう。が、「やらないで、ベッドルームでこんな風に議論してるのを皆が知ったら怒るよ」というマサの言葉に押されて、二人はベッドルームを後にした。ラウンジにチエの姿はなく、明美はそのままマンションを出てきた。

だてに多くの女とやった男ではないかと、マサに感心する気持ちが湧いてきた。「男というオモチャで遊んでる子供」。何と含蓄のある表現だろうと、明美は素直に肯く。

マサと話して問題が解決するとは、勿論最初から思っていなかった。だが、心が少しだけ軽くなったような気がする。人と話すということがこういう利点を生む。

これは発見だった。明美は突然ひらめいた。そうだ。来年日本へ帰った時、カウセンリングを受けよう。プロの人間と話せば問題が何なのかハッキリし、もっと気持ちが落ち着くかもしれない。

明美のオフは水曜日と日曜日。クラブ「藍」の勤務時間は夜7時から12時までなのでいつも昼間はフリーだが、オフの日の昼間の開放感はやはり違う。明美は、オフの日はシドニーを歩き回る。

その水曜日、明美はお気に入りの王立植物公園へ行くことにした。12時過ぎにフラットから出てバスに乗り、ハイドパークで下車しエリザベス・ストリートをおペラハウスに向かって歩く。10分も歩けばインターコンチネンタル・ホテルに到着する。昔の建物の外観を残して近代化された五つ星ホテルだが、明美はそのクラシクな佇まいが好きだ。

ホテルの目の前が公園の入り口になっている。街中にあるとは思えない程広大な公園には、池や整備された花壇や藤棚があり、歩くと清しい気分になる。奥に進めば小さな丘や鬱蒼とした森まである。シドニー湾が隣接しているので、キラキラと輝く青い海が目に入ってくる。そして白いオペラハウスとハーバーブリッジの勇姿がすぐそこに。

売店でアイスクリームを買い、それを舐めながら明美は大きな池の周りに配置されたベンチに腰掛けた。12月に入ったシドニーは、夏本番という感じだ。明美はミニ・スカ―

トにタンク・トップという格好。それにシャネルのサングラスをかけている。これらはシドニーの夏には不可欠な3つのアイテムだと明美は思う。

日本では美容のため、紫外線防止のためいろいろと気を使ったが、明美はこちらの女性に習って、そのまま輝く夏の太陽を浴びる。後でツケが回ってくるだろうなと予感しながらも。

この街は夏、ミニ・スカートがぴたりと馴染む。男に媚びるためでもなく、気取ったファッションからでもなく、長く暑い夏にそれが一番ふさわしい格好という態度で女たちが穿いているからだと思美は思う。

「ハロー！」という声に振り返ると、大きなバックパックを背負った背の高い赤毛の少年が、極上のスマイルを見せて立っていた。明美はサングラスを外すと、「ハロー」と答える。シドニーの街を歩いていると、かなりの確率でナンパされる。が、こんな若い少年は初めてだ。無邪気といえる大きなブルーの瞳が好奇心いっぱい明美を見つめている。そしてなかなかの美形だ。

「ジャパニーズ？」「イエス」少年は明美の傍に座り、「僕はラッセル。よろしく」と、手を差し出した。「私はアケミ。よろしく」と、明美は握手に応じる。「何してるの」「散歩をエンジョイしてるの」それからラッセルは何か訊くのだが、途端に意味が分からなくなる。それでいつものように、身振り手振りでコミュニケーションがスタートする。それで十分に楽しい。一緒に公園を散策しないと誘われたと解釈した明美は、ラッセルに付いて行くことにした。

気が付くと明美はラッセルと手をつないで歩いていた。人が見たらカップルだと思うだろう。実際は1時間前に会ったばかりの赤の他人なのだ。

二人はゆっくり公園の奥に向かって歩いた。この公園には何度も来ているが奥の方へはまだ行ったことがない。鬱蒼とした森や丘があり、その隔離された感じを敬遠していたのだ。だが二人連れなら何ら問題はない。

手をつないで奥の方へ進むに連れて、人影がまばらになってくる。ラッセルは時々立ち止まり、ふざけた感じで明美を抱き締める。成るほど、このエリアは恋人同士がいちゃつくのにもってこいの場所だと明美は思う。

周囲から遮断された茂みの中に入ると、ラッセルは明美を抱き締めキスを求めた。指先にこもった力、熱い身体と若い汗の匂いに明美は目が眩む。それは背丈はあるが、まだ可愛いとか形容できない表情を持つ少年から発散するものとは思えなかった。ラッセルの手が明美のミニにかかった。だめだめ、こんな所で本番はだめよ。明美はラッセルの手を解こうとする。が、ラッセルも簡単にギブアップはしない。「ノー!」。不必要に大きな声が出てしまった。ここではだめ。それだったら、私のフラットへ行こうと言いたいのだが、咄嗟のことでそう英語が出てこない。その時だった。明美の頭に衝撃が走り、一瞬目の前が真っ暗になった。再び身体に一撃が走り、一呼吸置くと、体が一つの大きな痛みに変わっていた。うっそ。何でこんなことになるの。信じられない。明美の中でだんだん意識が遠のいて行った。

「日本人女性の死体が王立植物公園で発見される。犯人は15才の住所不定の少年」という大見出しの新聞のトップ記事を、千賀子は息を呑んで読み始めた。

「王立植物公園で死体となって発見された若いアジア人の女性は、その後警察の調べにより、ワーキングホリデーで来豪しボンダイ・ジャンクションに住んでいた中山明美さんと判明した。公園内で、中山さんと思われる若いアジア人の女性が、白人の若い男性と手を組んで歩いていたのを目撃されており、それに従い犯人の似顔絵が各所に緊急配布されていたが、昨夜A少年は警察に自首した。自供によると、公園で明美さんと知り合い仲良くなったAは、手をつないだり軽いキスを交わしたりしてすっかり打ち解けたムードになった後、公園の人気のない所でセックスをしようとしたところ拒絶されカッとなり殴ったが、それが致命傷となり明美さんを死亡させたもの」

だからダメなんだ。日本人は外人に弱くて。千賀子の中で憤懣なる思いが湧き上がる。多分パスポートの写真なんだろう。作ったような微笑を見せた中山明美という女性の顔写真が記事と共に掲載されていた。少女のような可愛い感じの子だ。

いくら15才の少年だからといって、初めて会ってすぐいちゃいちゃして、人気のない所に付いて行くかよ。千賀子は写真の中山明美に向かって、内心そう毒づいた。多分この少年はルックスが悪くないに違いない。それなりのガイジンに声をかけられると、殆どのジャパニーズ・ガールは無防備になってしまうのだから。

千賀子は中山明美の少女のような顔を見ながら、もしかして彼女はバージンだったのかも知れないと想像した。

カッコウいい少年に声をかけられて、無邪気に恋人気分腕を組んで歩いていたら、突然少年が豹変し、それに必死で拒絶したら殴られ打ち所が悪く死亡した。多分それが一番可能性の高い状況に違いない。それなら何という悲劇だろうと、千賀子は暗澹たる気持ちになった。

新聞を投げ出し、コーヒーでも淹れようと立ち上がった時、ドアのカギがはずれる音かしてドアが開き、和子が帰宅した。時刻はすでに昼に近い。堂々の朝帰りだ。

「チーちゃん、ごめん。連絡もせずに」

「カズちゃん、電話ぐらいしてよね。心配するじゃない。一体どうしたんだろうって」  
勿論、和子が昨晚どこに居たかは、千賀子は百も承知だ。

「ほら、その新聞を見てごらん。ワーホリの女の子が殺されているのよ」

和子はキッチンテーブルの上の新聞を一瞥するが、まったく興味を示さない。

「電話をしなればと思った時、もう1時を過ぎていたの。それでトーマスとも相談して、起こしちゃ悪いからと思って」

トーマスと相談してという言葉に、千賀子は鼻白む。

丸い団子のような顔に、眠たそうな細い目とどうでもいいような鼻と唇が張り付いた和子の容貌に、最近輝きが生じている。和子は全生涯27年目にして、初めて信じられない程の幸せの中に居る。それは、男に愛されているという幸せだ。

「カズちゃん。あたしたち、もう一ヶ月もすれば日本へ帰るのよ。帰る間際になって、カズちゃん何か起きてごらん。何と言ってカズちゃんのお父さんやお母さんに申し訳すれば

いいの。新聞の女の子のように、どこで何が起きるか分からないのよ」  
声が1オクターブ高くなっている。千賀子はちよつとヒステリックかなと気付き、冷静になろうと努める。

和子がキョトンとした目を千賀子に投げる。千賀子の口から、これまで聞いたことがない優等生的な言葉が発せられたことに、驚きの表情を隠せない。が、すぐに余裕の笑みを浮かべると、「実は、トーマスにプロポーズされちゃった」と、愛されている幸せと自信に満ちた顔で、千賀子にそう告げた。

千賀子の中で、怒りという感情が生まれる。

「何馬鹿なことを言ってるの。もうすぐあたしたちは日本へ帰るのよ。トーマスとのことは、シドニーでの思い出として取って置くものよ」

「チーちゃん。あたしイエスと返事しちゃった」

「馬鹿。カズちゃん、一体それがどういうことかよく分かっているの。第一英語がまったく話せない人間が、どうやってここで生活して行くのよ」

「トーマスが、愛していれば言葉は障害ではないと言ってくれたわ。あたし、トーマスと結婚する」

千賀子の怒りが頂点に達した。

「何よ。これまで男から一度も声がかからなかったから、ガイジンが物珍しさだけで近寄ってきたことに有頂天になり、おまけに結婚するだなんて」

驚きで見張った和子の目が潤み、そして涙がこぼれ頬を伝わった。

「ひどい…。これまでずっと、あたしはチーちゃんのお付きでしかなかったわ。正直言うと、悔しいと思ったことだってあった。でもチーちゃんは綺麗だし、男の人が騒ぐのは当たり前だと思った。チーちゃんとは小さい頃からずっと一緒だったから、親友というより姉妹のような気持ちでいたわ。だからチーちゃんのことには美人のお姉さんを持っている感じで、自慢だった。あたしだって、何故トーマスがあたしを好きになってくれたのか、正直言って分からない。でも、とにかく初めて男の人から愛しているって言われたの。ああ、あたしだって男の人から愛されるんだと、初めてそういう幸せを感じたの。チーちゃんだったら、それを喜んでくれると信じてた。なのにそういう言い方はひどい」

和子はそう叫ぶと、ベッドルームに走り込んだ。

急所を突いた思いがけない反撃に、千賀子はあ然としてそこに突っ立っていた。これまで20数年の付き合いで、和子がこんな風に食ってかかってきたのは初めてだ。

気持ちが悪く落ちてくると、千賀子に見えてきたものは、千賀子の心でくすぶっている和子への嫉妬だった。ここ最近和子に対するいらつきは、すべて嫉妬から来ている。この私が、和子を嫉妬する羽目になるとは！

何故、和子に嫉妬するのか。それは、トーマスが選んだ女は和子ではなく、私であるべきだと千賀子はずっと思っていたからである。

千賀子と和子は、幼馴染。香川県の高松で育った。気候温暖な地方都市。高校まで地元と同じ高校に通った後、京都でそれぞれの短期女子大へ。千賀子の短大の方が偏差値が高かったが、それよりも容姿の点で雲泥の差があった。気の強い千賀子がリーダー・シツプ

を取り、和子は千賀子に従うように生きてきた。

京都では、親の同意の下、二人で1DKのマンションを借り、学生生活を送ったため、幼なじみでベストフレンドという関係が、いっそう濃厚なものとなった。

千賀子は、本命のボーイフレンドとのデート以外は、いつも和子を同伴した。すると決まって、相手は露骨に嫌な顔をした。そして、「俺は千賀子さんをデイトに誘ったんだけど……」とか、「二人分持つつもりはなかったんだけどな」と皮肉を言うのが常だったが、千賀子はそういう時、「私は、最初はグループ交際からスタートするのが好きなの。嫌なら結構よ。帰るわ」と高飛車に出ると、全ての男がしぶしぶながら納得した。和子もそんな状況を察し、千賀子が誘うと、「私は遠慮するからチーちゃん楽しんでおいで」と気を使ったが、「何言ってるの。あんな男よりカズちゃんの方がずっと大切なんだから、全然気にしない。ほら学生時代はいろいろな人に会って楽しまなきゃ損だよ。部屋でくすぶってないで、外に出て青春をエンジョイ、エンジョイ」と、和子を引き連れて行くのが常だった。

短期大学を卒業後、共に高松に帰り、千賀子は建設会社で、和子は父親が駅前で経営するかなり大きなレストランを手伝うことで、社会人としてスタートを切った。

二人の関係は変わらなかったが、これまでの学生時代にはなかった結婚という命題が、いつも鼻先にぶらさがっていた。

千賀子は、斉藤正明という会社が契約している建築家とすぐ付き合うようになった。公に約束を交わした訳ではないが、千賀子の手綱次第で結婚に持っていける相手と言って構わないだろう。が、千賀子は時々正明のことをご破算にして、見合いというプロセスで将来の夫というものを選んでもいいかなと思うことがあった。つまり正明は決め手の駒ではなかった。

一方、和子には男の気配がまったくなかった。

千賀子はよく和子にハッパをかけた。「カズちゃん。積極的に外へ出て行って男を捜さなければ、売れ残っちゃうよ」と言いながら、でもこの容姿じゃなかなか難しいだろうなという残酷な感想も、心のどこかにあった。和子の親は何度も見合いの席をセッティングしているらしいが、朗報はまだ届いていない。

27歳の誕生日を迎えた時、千賀子はこれからの人生にもうワクワクするような輝かしい季節は用意されていないことを自覚した。

これまで千賀子は、全てにおいて平均点を大幅に上回る女だと自負していたが、結局普通の女でしかなかったことを痛感した。男にはまったく不自由をせずもてたとと言っても、結局は普通の男と結婚し、普通の人生を歩み一生を終えるのだ。美人のカテゴリに居る超ラッキーな一握りの女たちだけが、芸能人になったり大金持ちの息子に見初められたりして、普通でない人生を謳歌する。

千賀子は年貢の納め時が近づいたことを知り、独身最後の思い出として、何が出来るのだろうと考えるようになっていた。そして思い付いたことが、ワーキング・ホリデーの制度を利用して1年間海外で生活するという計画だった。

ワーキング・ホリデーの制度がある国で最後の選択に残った国は、カナダとオーストラリア。千賀子は南半球に位置するため、季節が反対だというオーストラリアに興味を持つ

た。真夏のクリスマスや正月とは、一体どんなものなのだろう。千賀子はオーストラリアへ行くことを決めた。

和子にそのプランを打ち明け一緒に行くことを誘うと、二つ返事で承諾した。

ヨーロッパやアメリカ西海岸のパッケージ・ツアーに加わったこともある。だが、1年間外国で生活するとなると話は別だ。それを思うと久しぶりに、ワクワクした気持になる。そして1年間の海外生活の後、普通の生活に戻る。普通の夫が正彦になるのかあるいはまったく別の人になるのか、その時に考えればいい。

千賀子は年末をもって会社を辞め、新年の初めに成田からシドニーへ向かって飛び立った。「オーストラリアから帰ってきたら身を固めます」という言葉を添えると、両親はしぶしぶ承知した。

シドニーに着き1週間はBクラスのホテルに逗留し、その間に小奇麗なワン・ベッドルームのマンションを見つけた。それからシドニーの街に慣れるため、英語学校の短期間コースに通い、東の間の学生気分を味わう。そして、ジャパレスと呼ばれる日本レストランでウエイトレスをしたり、免税店で売り子をしたりして働いた。空いた時間を利用して、二人でスキューバー・ダイビングの資格を取る。次第に他のワーホリの友達も増え、情報を交換し合い合コンにも顔を出した。まとまった時間ができれば、ワーホリ用語でラウンドと呼ばれるが、オーストラリア各地に足を伸ばした。

千賀子は二人のオージーとエッチをしたが、どちらも付き合ってみようとは思わなかった。彼らはレディ・ファーストの習慣の中で育っている、女の扱いは上手。が、一言で言えば肌が合わないということなのだろう。オージーの屈託のない自信に満ちた明るさより、少しシャイな日本の男の方が、千賀子に合う。

シドニーの街も好きになったが、ここでずっと住みたいとは思わない。何が何でも永住権をゲットしてここに永住したいというワーホリは数多く居たが。確かにシドニーは住みやすい所だと思う。コスモポリタンの雰囲気があふれ、どこからでも見える青いビーチがアクセントになり、開放的だ。だが、千賀子は、日本人はやはり日本に住んで一番幸せだというタイプであることが分かった。

興味深深だった、夏のクリスマスや正月を体験すると、1年という期限のあるワーキングホリデーは終盤を迎えていた。

「カズちゃん、お願いだから携帯には出てよね」

千賀子は、いけないいけない、いつもの癖で命令調になっている、もっとやさしい言い方をしなければと自戒する。ようやく和子が携帯を取ったのだから。

「あんな言い方をしてごめんね。でもそれもカズちゃんのことを心配したからよ。カズちゃん、あたしのベストフレンドだけど、ううんそれ以上、妹も同然で身内みたいなものでしょう。そらやびつくりするわよ。ましてやトーマスはいい人だと思っけど、まだ知り合って1ヶ月も経っていないのよ。カズちゃんを一人残して日本へ何もなかったように帰れると思う？」

和子は沈黙を守る。

「でも、あたしもよく考えてみたわ。で、結論はカズちゃんが幸せならそれでいいじゃないと今は思う。カズちゃんがトーマスと結婚したいのなら、それを心から祝福するわ」

「ありがとう。チーちゃん」

やっと、和子が口を開いた。

あの大喧嘩の後、和子は見の回りのものを持ってトーマスのアパートに向かい、帰らなくなつた。千賀子は何度も電話を入れたが、和子は一切取らなかつた。メールもそれこそ数え切れないほど送つたが、返信はなかつた。和子は余程傷付いたのだろう。こんな依怙地な和子を見るのは、千賀子にとって初めてのことだ。

千賀子は辛抱強く携帯を掛け続けたが、帰国を2週間後に控えたある日、突然和子が電話に出た。

「カズちゃん、あたしはもうすぐ日本へ帰っちゃうけど、こんなおかしな状態のままではダメ。カズちゃんのお父さんやお母さんにもちゃんと報告しなければならぬし。それに、このアパートに残っているカズちゃんのをどうするの。とにかく、あたしがおごるから来週食事を一緒にしよう。そうだフォーティ・ワンへ行こう。日本へ帰る前に、ここで食事をしようねって話したじゃない。そこでおいしいものでも食べながら、きちんと話をしよう」

「分かった」

千賀子は胸をなでおろした。まったく世話の焼ける女だ。とこみ上げてくるものを千賀子は押さえつける。千賀子の言いなりになってこれまでの和子ではない。男をゲットして変貌した和子なのだ。それに合わせて対応しなければ話は前へ進まない。

携帯を切つて、千賀子は改めて思った。そうトーマスが千賀子たちの前へ現れて、まだ1ヶ月も経っていないのだ。それが、こんなドラマに巻き込まれることになるとは夢にも思わなかつた。

「ハイ」

振り返ると、D級のデービッド・ベツカムといった感じのイケメンが、満面の笑みを浮かべている。

「ハイ」

千賀子もスマイルで応える。

「ムービーをエンジョイした？」

「ええ、あなたは？」

「とても感動した」

千賀子たちが日豪情報センターを出てきたところを、後ろから声をかけたのがトーマスだった。

センターでは、日本文化の紹介の一環として、定期的に無料で日本映画が上映されている。ショーケンと岸恵子の「約束」や、山口百恵の「伊豆の踊り子」や「霧の旗」、「砂の器」など古い作品が主だったが、英語のサブタイトルが付いているので、シアターは日本に興味を持つ現地の人間たちで、半分ほどを占める。

千賀子は、その夜、「幸福の黄色いハンカチ」を和子と一緒に見に來たのだった。日本映画の名作だとはよく聞いていたが、これまで見る機会がなかった。確か、千賀子が小学生の頃作られた映画だ。

ストーリーは知っていたが、やはりラストで黄色いハンカチを目にした時は、涙が止まらなかった。いい映画を見て涙を流すと、心の浄化作用になる。すっかりいい気分になってセンターを出たところを、トーマスに呼び止められたのだ。自己紹介をした後、「時間があればお茶でも飲みませんか」「いいわよ」と話がまとまり、近くのスタバへ向かった。

「あの若い女性を演じた女優は素敵ですね」

「カオリ・モモイという女優よ。でももう50を過ぎたオバサンよ」と告げると、目を丸くして驚く。

「トーマスはどんな仕事をしているのかしら。それとも学生？」

「車の整備工。君たちは」

「ワーホリで来豪したの。でもあつという間に1年が過ぎて、もうすぐ日本へ帰るの」

「へえー。それは残念」

「カズコは余りしゃべらないけど、シャイなの」と、トーマスは和子を見る。

千賀子はトーマスをそれとなく観察していたが、いい性格なんだと確信する。何故なら、これまでこういうシチュエーションの時、男は決まって和子を見無視し、あからさまに千賀子だけを注目したが、トーマスは千賀子と和子の二人を交互に見ながら、会話をしている。無口な和子が会話の中に入ってくるよう、気を使っている。

他愛のない話をし、携帯の番号を交換し、スタバの前で右と左に別れた。

帰路、バスの中で和子が千賀子に予言する。

「チーちゃん、彼きつと電話をかけてくると思うよ」

「でも、あたしはガイジンにはもう興味ないよ。それに28歳だっけ。それで車も持っていないじゃね。どっちにしる、整備工の兄ちゃんには興味ないよ」

「そんな。それ差別だと思う。でもトーマスすごいイケメンじゃん。それに性格も良さそう」

「うん。性格はいいと思う」

千賀子は深く肯いた。

数日後、確かにトーマスから電話が掛かってきた。千賀子はデートの誘いだなど直感した。その直感は当たっていたが、相手は千賀子ではなく和子だった。拍子抜けして、携帯を和子に渡すと、千賀子は訳の分からない敗北感に打ちのめされたみたいで、その場を離れた。キッチンでコーヒーを淹れながら、耳を立てて、和子の言葉を聞く。何とか会話が通じているみたい。時折、身体をよじって笑う和子の媚態に、小さな怒りが生まれる。何の脈絡もなく、何故トーマスは和子とのデートをとりつけるため、私の携帯に電話するんだよと頭に来たが、そうか、私の携帯の番号しか教えてなかったんだと納得する。

「チーちゃん、この日曜日、トーマスと映画へ行くことになっちゃった」

携帯を千賀子に返しながら、感きわまった和子の声は喜びで震えていた。こんなことが

起きるなんて信じられないとも言いたそうに。

そらやそうだろう。これまでの27年間の人生で男から誘われたことのなかった女が、男からデートに誘われたのだから。それも、ベツカムを彷彿とさせるイケメンの男から。「良かったね」

千賀子は、複雑な胸の内を悟られないように、努めて明るい声でそう応えた。

「でも何で、チーちゃんじゃなくてあたしなんだろう」

千賀子もそれが不可解だ。

「うん、カズちゃんの方がタイプだったってことよ」

気持ちとは裏腹に、千賀子はサバサバと結論付けた。

初めてのデートの後、和子は毎日トーマスに会いに出かけた。

突然これまでの生活が180度転換する。すなわち、毎晩千賀子が一人アパートに取り残され、和子が毎夜男に会いに嬉々として出かけるという大転換。和子が出かけて後、ぼつねんとアパートで一人で居ると、疎外感で孤独な気持ちに襲われた。そうか、和子はこういう気持ちで生きてきたのかと実感できたのだが……。

和子の説明から、トーマスに関して次のようなことが分かる。

出身は、シドニーから車で約5時間かかるダボという田舎。27歳。3年前にシドニーに出て来て、ウエイターを1年した後、手に技術をつけるべきだと思い、夜、職業訓練所へ通い整備工の資格を取り、ここ2年間は自動車工場で整備工として働いている。レッドファーンという場所で、2人の男友達とアパートをシェアしていた。将来は、ダボへ帰り、自動車修理工場のビジネスをやりたいのだという。小さいときから、テレビで見た日本という国に多大な興味を持っていたのだと言う。一番興味を持っているのが、富士山と桜というのは、一般的過ぎてふーんという感じだが、こんなに日本が好きなのは、僕の前世は日本人だったと思うとトーマスが言っていたというのを和子から聞いた時は、へーと感じ入った。そういう風を感じるガイジンも居るんだ。それから、和子は、トーマスはセンターで和子を見たとき、絶対に声をかけようと思ったんだってと、付け加えた。

和子の話を聞きながら、イケメンながら、非常に素朴なオージの像が浮かんできた。分らないのは、やはり、何故和子を選んだのかということだ。

美人の概念は、基本的には万国共通。太った女性が美人としてもはやされるアフリカのような国は別にして、日本で美人として通れば、他の国でも美人として通る。

ところがオリエンタル嗜好の強いハンサムな西洋の男が、ときたま驚くようなミスマツチのオリエンタル・ガールとくっつくことがある。

ガイジンの男の方は背も高く、美形だが、オリエンタルの女の方は、同国の男なら鼻もひっかけないような不器量なタイプ。同国人にとって不細工なものが、ガイジンにとって神秘的なものに映るのだ。

和子とトーマスがまさに、その典型的なカップル、と千賀子は思う。和子の埴輪のような一直線に切り取った細い目は、日本人ならブスの象徴でしかないが、トーマスにとって、まるで仏像のように、東洋を象徴する神秘的なものに見えるに違いない。

「フォーティ・ワン」は文字通り、チーフリー・スクエアというビルの41階にある高

級レストラン。

レストランの前で待ち合わせたが、千賀子が行くと、和子はすでに到着していた。数週間ぶりの再会だ。

「カズちゃん、元気だった」

「うん。チーちゃんは」

恋をしたからといって、ブスが美人に変貌する訳ではないが、それでも和子はこれまでの和子とは違って見えた。内側から出てくる照りのようなものが和子に一種の輝きを与えている。

「元氣そうじゃない。安心した」

「ありがとう」

「あたしはもう来週日本へ帰るから、今夜はゆっくりカズちゃんのこれからのことを話そう」

「うん。ありがとう」

千賀子は、安堵する。前のようにつっかかってこられたらどうしようと思っていたのだ。これなら今夜は、いつものように私のペースで話ができる。

レストランに入ると中年のマネージャーが笑顔で迎えてくれた。このレストランはテーブルの指定ができない。皆眺めのいい窓際のテーブルを希望したが、それはこのマネージャーの胸先三寸による。

千賀子たちは、シドニーのビルの夜景と、遠くにシドニー湾とオペラハウスが見える最高のテーブルを与えられた。ウイंकするマネージャーを見ながら、千賀子は、誇らしい気持ちになる。内心、カズちゃん一人じゃ、こんないいテーブルはくれなかったわよと意地悪な気持ちが起きる。

オーダーを決め、高級白ワインを注文する。オーストラリアの白ワインの味は、二人共、ここで覚えたもの。ドライでシンプルな味はたまらない。値段の張るワインに決めると、「チーちゃん、それ高過ぎるよ」と和子が躊躇したが、「何言ってるの。ここはあたしのおごり。カズちゃんとのシドニーでの最後のディナーにこれ位はりこまなくってどうするの」と、一蹴する。

グラスを合わせて乾杯した後、千賀子は切り出した。

「カズちゃん、まず日本へ帰ったら、カズちゃんのお父さんやお母さんに何て説明すればいいの。カズちゃんを一人残してきたと言って、あたし責められるのに決まってるよ」

「チーちゃん、大丈夫。もう連絡済みなんだ。ただトーマスの写真を送ったら、ハンサム過ぎるのか信用してないみたい」

あっけらかんとした顔で続ける。

「だから、チーちゃん彼が本当に結婚相手のトーマスなんだって説明してよ。結婚も、あたしがそうしたいなら構わないって言ってくれてる」

和子の親にしてみれば、結婚できるならガイジンだろうと何だろうと、構わないということか。

「その結婚だけど、慌てることはないんじゃない。しばらく一緒に住んで、それから考えればいいんじゃない」

「うん。あたしはどうでもいいんだけど、トーマスがこういうことは早くきちんとした方

がいいって言うから」

「おいおい、それは美人が言うセリフだよ。」

「それはそうと、ビザの方もきちんことを、トーマスは言ってくれてるの」「ビザ？」

和子は首をかしげる。

「ほら、まるで分かってないんだから」

「あたしたちが持つてるビザはワーホリのビザで、1年間しか有効じゃないのよ。だから今月末で切れちゃうよ。カズちゃんは、ディファクト・ビザといって、要するに男女関係があるからオーストラリアにステイさせてくださいというものに、切り替えなきゃならないの。そうでないと国外追放になっちゃうよ」

国外追放という言葉が効いたのか、和子の顔が曇る。

「ほら、そういう大切なことまるで分かってないんだから」

まったく、和子もトーマスも何も分かってないんだからと千賀子はうんざりする。犬や猫がくっ付くんじゃなく、人間同士がくっ付く時は、いろいろなルールがあるんだよ。ましてや異国ではね、と怒鳴ってやりたい気持ち。それを抑え、ここからはこれまでのように、あたしがリードして物事を進めるからねと胸の中で宣言する。

「それに、切り替えるのはもう時間がないと思うよ。その時は、一応学生ビザに替えて、それからディファクトへ切り替える手があるらしい。カズちゃんのためにいろいろと調べておいたんだから」

「ありがとう、チーちゃん」

すっかり従順な和子に戻っていることに、千賀子は満足する。これなら、この高級レストランでおごった甲斐があった。

ここからが大切なところで、千賀子は手綱を取る。

「カズちゃん、あたし来週トーマスと会っているいろと話してみよ。ビザのこともそうだし、ディファクトに替えても、すぐ働けないんだよ。社会保険だつてすぐ適用されないらしい。それに、カズちゃんの親に、トーマスのことをきちんと報告しなきゃあなんない。妹分のカズちゃんがオージーと結婚して、シドニーに永住することを決めたのなら、あたしの立場としてそれは義務だと思うから。カズちゃんの未来のダンナに、大丈夫なのかいろいろ聞いてみるのは当たり前でしょ」

和子は深く肯く。

千賀子は、この夕食の大きな目的だったことがクリアになり、リラックスする。日本へ帰る前に、トーマスと「一対一」で会うという計画。ただ、和子が同席すると言った場合、どうやってそれをストップさせるか、それを思案していたが、取り越し苦労に終わった。

「チーちゃん一人で会ってね。あたしのことについてチーちゃんとトーマスが話す場に居るのは恥ずかしいよ」

と、和子が告げたから。

ミディアムのファイルの肉は和子、ジョンドリーという白身の魚は千賀子、それぞれのメインディッシュがテーブルに置かれた時に、すでにワインのボトルを飲み干している事に気づき、同じものをもう1本オーダーする。

「今夜はすすむね」

と、和子は笑う。

「いいじゃん。今夜は徹底的に飲もう。もう二人でこんな風に食べて飲んで話すことが出来る機会はないかもしれないよ」

千賀子の舌が滑る。

「カズちゃん、もうエッチしてるよね」

「やだ。そういう話」

と、和子は身体をよじる。

「違うよ。ちゃんと避妊してるかってこと」

「トーマスの方が、それをしてってくれる」

彼がコンドームを使用しているということか。千賀子は想像してみるが、和子とトーマスがエッチをしているイメージがまるで湧かない。

「すぐ赤ちゃんなんか作っちゃダメ」

「チーちゃんも知ってる通り、あたしは子供が大好きっていうタイプじゃないじゃん。だからどうでもいいんだけど、トーマスは正式に結婚した後はすぐ子供を作りたいって言うてる」

「そんなこと言ったって、食べていけるの。今でも経済的な理由で、アパートを3人でシェアしてるんじゃない」

「うん」

「そういうことを含めて、トーマスがカズちゃんとかどういふ将来の設計をしているのか聞いてみるよ」

千賀子は急に自身の結婚のことを、和子に話してみたくなった。

「カズちゃん、あたし日本へ帰ったら、正彦と結婚するつもり」

「本当。よかった」

何故だか分からないが、今回の騒動の中で、千賀子はそう決心した。

「正彦さんとチーちゃん、お似合いだよ。でもあたしたち、これまでなんでも一緒にしてきたけど、結婚も一緒なんだ。日本とオーストラリアって場所は違っても。嬉しいな」

千賀子は首を立てに振る。

「トーマスが、多分来年の後半までには、結婚資金が貯まると言ってたけど。結婚式には、チーちゃん来てくれるよね」

「当たり前でしょ」

その時の事情によりけりというのが本音だが、素直にそういう言葉が口を吐く。

「そうだ。新婚旅行に正彦さんとシドニーにおいてよ。4人で一緒に食事でもできれば最高だな」

千賀子は微笑む。

この辺で結婚に関する質問の常套句を出してみようと、千賀子は思う。

「カズちゃん、トーマスとの結婚を決めた本当の理由は何。愛してるの？」

和子が首をかしげる。

「チーちゃんも知ってるように、日本じゃ男は誰も寄ってこなかったわ。見合いもしたけど、誰もあたしに興味を持つ男なんて居なかった。あたしってそんなにブスなのって悲しくなったけど、いつかあたしだけを見つけてくれる男が現れると信じていた。で、トーマ

スに出会ったんだけど、最初正直言って、からかわれてるんじゃないかと思ってた。けど、とても優しく誠実に扱われて、『アイ・ラブ・ユー』という言葉聞いたとき、舞い上がっちゃった。こういうことが、あたしの人生にも起きるんだって。その時決めたの。どんなことがあっても、トーマスに付いて行こうって。トーマスはあんなイケメンだから、これが本当の逆転大勝利っていうやつよ」

和子は口を開けて笑う。

幼なじみだからといって、ベストフレンドになれる訳ではない。和子がどういう理由でずっと友達でいてくれるのか千賀子には分からない。自分はどんなのだろうと考えてみた。和子の卑屈などころのない率直で大まかなキャラを千賀子は好む。時折見せるユーモアもだが、それだけでは十分ではない。和子が、従順で便利な「家来」だったからだろうか……。

もうすぐ、日本とオーストラリアでのそれぞれの生活が始まり、距離的にも、ベストフレンドで居ることは難しくなるだろう。その時、より大きな寂しさを感じるのはどちらだろう。そう思案しながら、千賀子はグラスのワインを飲み干した。

ニュータウンの駅を降り立った時、千賀子はこのサブurbがどういう場所か、一目で分かった。

駅はその町を表す顔。この駅は、殺風景で寒々としている。労働者階級が住むサブurbだというニュータウンを象徴している。

オーストラリアは意外にも、階級社会だった。どこに住むかでその人のステータスが決まる。

駅から、紙に書かれた道順とアドレスを頼りにトーマスのアパートを目指して歩く。何の変哲もないアパートが雑居する。角にみすぼらしい雑貨屋がある。和子のシドニーでの生活はこんなところで営まれるのか。

小さな通りにある、粗末なビルの3階にトーマスのアパートがあった。ビルは極彩色のグラフィティが描きながらられている。

ドアを開けたトーマスは、フレンドリーなスマイルで千賀子を迎え入れた。トーマスと会うのは久しぶり。

「ナイス・トゥ・シー・ユー・アゲイン」「セიმ・トゥ・ユー、チカコ」と、トーマスは握手を求めた。

千賀子をラウンジのソファに座らせ、オープンキッチンでトーマスはコーヒーの用意を始めた。

千賀子は素早く、アパートの中を見回す。どこかで別々に貰ってきたような不揃いのソファ。壁にはチャイナドレスを着た女の極彩色なイラストのカレンダーが掛けられている。ソファから見渡せるキッチンには、これといった台所道具が見当たらない。

寒々としたサブurbに似合った寒々としたアパート。千賀子は、和子とトーマスの結婚生活の全てが、手に取るように分かるような気がした。

端正な横顔を見せてキッチンでコーヒーを淹れるトーマスを見ながら、ふと掃き溜めに鶴という古めかしい言葉を思い出した。世の中には、勘違いしたイケメンや美人がゴマンと居るのが、このトーマスという男は、鏡に自身を映し何も感じないのだろうか。

コーヒーを千賀子の前に置くと、トーマスは向かい側のソファに座った。千賀子に差し出されたコーヒーマグは、可愛いイチゴのイラストが描かれていた。和子がここで使っているマグに違いない。

「多分和子から聞いていると思うけど、私はあさって日本へ帰ります。私と和子は幼なじみで姉妹みたいなものなの。だから、私も和子とあなたのことをキチンと知りたいし、日本で彼女の両親にも、あなたのことを出来るだけ詳しく報告しなければならぬわ。それでいろいろなことを質問するけれど、気を悪くしないで。非常にプライベートな質問もあるから」

トーマスは、「ノー・プロブレム」と鷹揚にスマイルを見せる。

「まず、和子と結婚するのね」

「イエス」

と、トーマスは何のよどももなく反応した。

「結婚すれば、いわゆる責任ある社会生活というものがスタートする訳だけれど、一番大切な経済的なことはどうなってるのかしら」

「どういう意味」

「和子を養っていけるかっていうこと」

「今はきついけど、和子も働くって言ってくれてるので、共稼ぎをすれば大丈夫だと思う」英語もろくに喋れない和子に、一体どういう仕事あるというのだろうと、千賀子は思う。

「ここは、3人の友達とシェアしてるアパートよね。和子と結婚後もここで住むの」

「勿論、できれば二人だけのアパートを借りたいけど、今は無理。和子もしばらくはここで住んで良いつて言ってくれてる」

千賀子は、つくづく確信する。どんなに愛していても、こんなところじゃ私は住めないよ。

「結婚はいつ頃になると彼女の両親に報告すればいいのかしら」

「うん、結婚費用が足りないのの後1年ぐらい時間が必要なんだ、だから多分来年の初めぐらいに思っている。セレモニーに彼女の両親は来てくれるのかな」

「勿論よ。あなたがとてもハンサムなので驚いているって、和子が言ってたわ」

トーマスは、照れる。

「チカコも来てくれるの」

「勿論。私の大切なベストフレンドなんだから」

トーマスは、一生懸命働きお金を貯めて、家を買ひ、和子と生まれてくるであろう子供たちとハッピー・ファミリーを作りたいと、実直に話した。

千賀子はトーマスの話を相槌を打ち聞きながら、まったく別のことを考えていた。この男は自分が美男子であることを自覚しないのだろうか。田舎育ちのための、そういう自覚がまったく欠如しているのだろうか。

2時間が経過している。これ位話せばもういいだろう。

最後はやはり常套句の質問で終わった方がいいと千賀子は思う。

「最後に、一番大切な質問をするわ。和子を愛しているのね」

「イエス」

トーマスは、力強く答えた。

千賀子は帰る前に洗面所を借りる。鏡の中の自分を整え、小さく深呼吸をする。今から、トーマスを訪ねた本当の目的を果たさなければならぬ。

千賀子はラウンジへ戻り、ソファの上のバッグを取り上げる。

「和子の両親に、和子はいいいパートナーを見つけたと、そう報告するわ」

トーマスを真正面にしながら、本題に入ることに決めた。

「トーマス。とても残念だった。私もあなたのことをナイスガイだと思っていたのに、声がかからなかった」

トーマスが驚いたように目を見開く。照れたように顔がポツと赤みを射した。しばらくもどかしそうに身体をよじっていたトーマスは、思い切るようにして声を出した。

「チカコは、僕にとってはツー・ビューティフルだと思ったから、とてもじゃないがデートに誘う勇気がなかった」

その言葉を聞いたとき、千賀子の中で全てが氷解した。千賀子の心に居座っていた、多分どす黒い色をしていた筈の、嫉妬という怪物が、一瞬のうちに姿を消した。

素朴な田舎の男であるところのトーマスは、華やかな都会の美人であるところの千賀子を、自分には手の届かない高嶺の花とあきらめたのだ。

千賀子を見るトーマスの目に、力強さが加わる。ここでトーマスの肩に千賀子が手をかければ、二人は行き着くところまで行くだろう。

千賀子は自身に言い聞かせる。私は、ガイジンが好きだという訳ではない。そして、ベストフレンドの和子を裏切りことはできない。

千賀子は最上級の笑顔を作り、トーマスに握手を求めた。

「私たち、タイミングが悪かったのね」

トーマスの目に失望が浮かんたのを千賀子は見逃さなかった。

千賀子は晴れ晴れとした顔で、アパートを後にした。

JAL771便22時30分発成田行の搭乗を促すラストコールが、アナウンスされた。千賀子は、もう一度密かに空港ロビーを見回した。どこかで、トーマスがじっと見つめているかもしれないと、期待していたのだ。

和子から、「トーマスは都合が悪くて見送れないけど、よろしくって」という伝言を告げられた時から、千賀子が心の中で描いたロマンチックなシナリオ。

映画や小説で、叶わぬ恋のラブストーリーのエンディングは、だいたいそんな感じだ。愛する人を影からそっと見送るシーン。

が、それらしき姿は見当たらない。現実には、そんなにドラマチックじゃないかと千賀子は観念する。

千賀子は、和子や、シドニーで仲良くなったワーホリ仲間の万理子や早苗に囲まれ税関へ向かう。

税関のエントランスの前で、万理子たちと別れの言葉を交わし、「シドニーに居る間、どうかカズちゃんのいい友達になってね。お願いよ」と頼む。

空港に着いた時から、目が潤み口数が少なかった和子の肩をつかみ、「カズちゃん、じゃ元気であるのよ」と言いながら、これから和子は誰も知った人が居ない異国で、トーマス

だけを頼りに生きて行くのかと思うと。胸にこみ上げるものがあった。「幸せになるのよ」という心の底から出た言葉と共に、涙がこぼれ落ちた。それが引き金になったのか、和子は千賀子の胸で号泣した。「馬鹿、そんなに泣いちゃだめ。しっかり生きて行くのよ」と、和子の肩を揺さぶり、万里子たちに目で会釈をすると、千賀子は踵を返してエントランスに向かい、もう振り返らなかつた。

#### 1万ドルを騙し取られて

「カズちゃん。大丈夫？」。千賀子を見送った後すっかりふさぎ込んでしまった和子に、早苗が心配そうに気遣った。「うん」と、まったく力のこもらない声を出す和子。

「この子って、いつでもどこでも煮え切らない態度でイライラしてくるな」と、万里子は視線を投げる。おまけに、こんなブスですごいイケメンのボーイフレンドをゲットしていることが、余計にイライラさせる。

「でも遅いな、空港バス。うん、私が出すからタクシーを拾おう」「でも悪いわ。さつき空港のレストランだって早苗さんのおごりだし」「気にしない。気にしない」「もう少し待てばバスが来るかも」「いいから」。

早苗は和子の腕を取ると、さつきとタクシー乗り場に向かった。万里子はそれに従う。千賀子を送った後、シドニー市内へ戻るため3人で空港バスをさつきから待っていたのだが、バスが来ず、他の利用者たちも堪忍袋の緒が切れてぶうぶう文句が出始めた矢先だ。

タクシーの後ろの座席に早苗と和子が座り、万里子は助手席に乗り込んだ。

早苗が和子の気を引き立てようと、一生懸命励ましている。「カズちゃんはラッキーよ。多分私たちの中で一番ラッキーだと思う。あんなハンサムな彼と、千賀子さんのようにカズちゃんを本当に心配するベストフレンドを持つてるんだもの。そうよね、万里子さん」。「本当にそうよ」「応相槌だけは打っておく。いい人との出会いなんてそうあるもんじゃない。カズちゃんぐらいよ。生涯のパートナーと生涯の友達をゲットしているのは」それから早苗が声のトーンを落とし、「今から、親友が日本へ帰って寂しいってトーマスに慰めて貰うんでしょ」とからかうと、和子は笑っているのか泣いているのか訳の分からない、ぐしゅぐしゅという音を立てた。

早苗の言うことは本当だ。親友のことは分からないが、いい男との出会いが何と難しいことなのかは実感できる。万里子は、付き合い始めて4ヶ月になるサムの事を思う。そしてその4ヶ月の間に、さまざまな理由でサムに貸したお金が1万ドル近くになっていた。

万里子はシドニーに着いて最初の3ヶ月は、ホームステイするよう日本を出る前にアレンジしていた。

万里子が落ち着いた先は、カリングフィールドという郊外。中産階級が住むエリアと聞いている。共稼ぎの40代のカップルとハイスクールに通う息子の一家に、ステイすることになった。

ホームステイの趣旨は、現地でファミリーと短期間ステイし、現地の生活様式と言葉に慣れること。万里子は週150ドルを払う代わりに、一室と食事が与えられた。勿論簡単な家事の手伝いをする。

ここで2週間目を迎える頃、万里子はホームシックにかかってしまった。

ホームステイした家族が冷たかった訳ではない。家族全員が万里子に対して親切だったし、万里子の拙い英語をよく聞いて、その間違いを指摘し根気よく正しい言い方や発音を教えてくれた。万里子のホームシックの大きな原因はその英語だった。

ウィークデーの昼間は、ガランとした大きな家に、万里子一人が残される。

テレビでも見ようとスイッチをひねるが、何を言っているのかさっぱり分からない。家族のメンバーが帰ってきてても、「ハウ・アー・ユー」と言った程度のやりとりは出来るが、それ以上はまったく理解できない。万里子は周囲で一体何が起きているのかまったく分からない世界に、自ら望んだとはいえ、放り込まれたことに気付く。そして、それが今から少なくとも数ヶ月続くことに啞然とした。

万里子は大きな疎外感に打ちのめされた。着いて間もないのに、日本へ帰りたいと願った。日本の家族や友人の存在がとても貴重なものに思えた。しかし、日本へ帰ることは出来ない。「1年間、誰も知っている人の居ない外国に住み、自身を鍛えてきます」と豪語して出てきたのだ。負け犬として日本へ帰ることは出来ない。

万里子がサムという中年の男性に出会ったのは、紀伊国屋。シドニーの紀伊国屋は海外の日本支店という域を超えて、堂々たる構えでシドニーでも有数のブックセンター。日本の書籍だけではなく英語物も豊富。さらに多くのグッズも売られており、また洒落たコーヒーストップも店内にオープンされた大型のブックセンター。

万里子はこの紀伊国屋の存在を知り、ある日気分転換に出掛けたが、予想以上にホームシックが癒された。

海外の日本書店としては信じられないほど多くの日本語の雑誌や本などが豊富で充実しており、その空間に居るとまるで日本に居るような錯覚が起き、万里子の孤独は大いに慰められた。

値段はだいたい日本の3倍で新刊書には手が出なかったが、万里子は文庫本で林真理子のエッセイ集を2冊求めた。漢字は違うが同名のこの作家は万里子のお気に入り。それをベッドで寝る前に読むと、とても暖かい気持ちになり安眠できるのだった。

万里子は紀伊国屋へ頻繁に出掛けるようになった。そこで、千賀子たちとも知り合い友達になった。

ある日、いつものように店内をぶらついていると、中年の男とぶつかりそうになった。「ソーリー」と言って身体をかわしたが、同じ男と書店の出口でまた出会った。あれっという表情の後、男はすかさず「オゲンキデスカ」と日本語を喋った。「キャン・ユー・スピーク・ジャパニーズ？」と万里子が聞くと、「スコシダケ」とまた日本語で返事をした。それがサムとの出会いだった。

万里子はサムに誘われ、近くのスターバックスでコーヒーを飲みながら雑談した。どれだけのコミュニケーションが成立したのかまったく自信がなかった。万里子が分かったこ

とは、サムと言う名前と37才という年齢、数年前にイタリアから移民してきたことと、職業がコンサルタントという4点だけ。

オヤジだとは思ったが人なつっこい笑顔に万里子は警戒心を解き、求められるまま携帯の電話番号を交換した。

サムは、出会った記念に何か万里子の好きなものを買ってプレゼントしたいと申し出て、万里子を驚かせたが、初対面の男性から何か貰う訳にはいかない。丁重に辞退した。

駅まで付いてきたサムは、構内の花屋で素早くバラの花束を買おうと万里子に手渡し、電車に乗り込んだ万里子に手を振った。

電車の中でバラの花の香りをかぎながら、うきうきとした感情が、次第に身体中に満ちてくるのに万里子は気付く。

翌日携帯をオンにすると、メッセージ受領のサインが現れた。開けるとサムからのメッセージが届いていた。「昨日は楽しい時間をありがとう。マリコと出会えて非常にラッキーだった。この週末ランチをご馳走したいのだけれど、マリコの都合はどうだろう。連絡を待っています。サム」万里子は暖かい気持ちになる。

10才以上も年が違うサムに恋愛感情は芽生えないが、人間的な暖かみに好感を持っていく。それに、異国で自分に関心を持ってくれる人が居るということに、万里子はあるがたいという気持ちが湧いてくる。2日置いて、「日曜日なら大丈夫です」と返信すると、直ぐにサムから「ファンタスティック！」というメッセージが届いた。

万里子の中から、ホームシックという言葉が消えていた。日曜日には何を着ていこうかなど浮き立つ気持ちに気付き、(バカ、別に恋人でも何でもないのに・・・)と苦笑した。

日曜日、サムに連れられた行つた所は、一流ホテルの最上階にあるレストラン。ビュッフェ式のランチだが、人目で高級ビュッフェだと分かる。ロブスターやオイスターなどのシーフードが山のように盛られていた。

前菜として生のオイスターとサラダを取り、サムとテーブルに着いた。眺望のいいレストランで、シドニーの街並みときらきらと光る青いシドニー湾の美しい対比が見下ろせる。サム推薦のオーストラリア産の白ワインを口に含むと、ドライな味が広がる。満足しながら、万里子はサムを眺める。

ハンサムには程遠いが、不細工という訳でもない。頭が少し薄くなっているのも、愛嬌と取れないこともない。時折見せる落ち着きのない目付きが気になったが、笑うとくだけた親しみやすい顔になる。

万里子の中で、サムの好感度がじりじりと上昇する。

ランチがデザートとコーヒーの最後のところに来た時、サムは真面目な顔をして、「マリコさえないのなら、このホテルでスイートを取り休憩してもいいんだよ」と万里子に告げた。

万里子はその真意を理解するのに、数秒必要とした。そして、「足長おじさん」にしかなかったサムが、突然「男性」として変貌したことにショックを受けた。

万里子は無邪気を装うことにした。

「エー」と、1オクターブ高い声を出す。「そんなこと、考えてもみなかった」。するとサムは直ぐに、「ソーリー。ソーリー。まだ会って2度目なのに、こんなことを言うのは軽率だよ。ね。ソーリー。マリコがとってもキュートでセクシーだから」と弁解し、元のサムに戻った。

口説き文句よりも、褒め言葉の方が万里子は数倍も嬉しい。自分がとびきりの美人ではないことは百も承知だ。容貌もスタイルも平均点レベルの女だという自覚がある。だから、ビューティフルではなくキュートとかセクシーとかの褒め言葉は、リアリティがあっただけいい。

ランチの後、シティの中央にあるハイドパークを二人で散策し、日曜日でも開いていたショップを見つけると、サムは可愛いオパールブローチを選び、その場で万里子の胸に飾った。

サムに見送られて乗った電車の中で今日一日のことを反芻すると、気持ちが高揚した。万里子に一番強いインパクトを残したものは、口説き文句ではない。たった数時間のためにスイートを取ろうとしたサムの太っ腹だ。すごいリッチなんだ、サムは。プレゼントされたブローチを手で撫でながらそう思うと、体温が少し上昇した。

サムとベッドインしたのはそれから数週間後。場所はホテルのスイートではなく、彼のフラット。高級マンションではなく、普通のフラット。普通の家具が並んだ部屋で、万里子は意外な気がした。

思ってたほどリッチでもないんだと失望したが、だからといって回れ右をすることもないよなど、自身に言い聞かせた。

その日曜日の午後、ブラインドが下ろされたサムのベッドルームで、サムは壊れ物でも扱うように優しく時間をかけて万里子を抱いた。

万里子はバージンではなかったが、こんな風に男が心をこめてセックスは初めての経験だった。だからと言って、サムが万里子の中で恋人として昇格した訳ではない。ちょっと年を食ってはいるが人の良さそうな外人とのエッチは、ワーホリのいい思い出になるだろう。その程度の気持だった。ただ、その日曜日を境に、サムと過ごす時間が急増した。

「マリコ。本当に悪いんだけど。3000ドル貸してくれないか」

サムが申し訳なさそうな顔をして万里子に頼む。口がへの字に曲がっている。

「何故」

「うーん。実は投資用に買った物件があるんだ。これがうまく行くと、何倍にもなって返ってくるすごいものなんだ。コンサルタント料が入ってくるのが月末で、それまでのやりくりで困ってる。今ストップすると大損になってしまう。後もう少しで大金を掴めるというのに。まったく、こんなことマリコに頼める筋合いじゃないんだけど。ごめん。本当にごめん」

サムの声が、恥ずかしいからなのかそれとも緊張のためか、上ずっている。

「いいわ」

万里子は深刻に考えることなく承諾した。

万里子がサムフラットに住み始めて数週間が過ぎていた。サムは万里子から部屋代を取ろうとしない。二人で出掛ける時も、映画のチケット代やレストランの勘定も全てサム持ちだ。万里子は何度もお金をサムに渡そうとしたが、キツパリと拒絶された。だからここに住みついて以来、自身の財布を開くという機会が驚くほど少なくなっている。だからサムが3000ドル貸して欲しいと頼むなら貸せばいい、万里子はそう納得していた。

「サンキュー・ベライ・マツチ。マリコ。勿論出来るだけ早く借りたお金は返すよ、利子をつけて。それにこれで大儲けしたら、マリコの欲しいものは何でも買ってあげるよ。そうだ。二人で世界一周をしよう」

サムは、大きく音をたてて万里子の両頬にキスをした。

3ヶ月のホームステイが終わる頃、サムはホームステイの後、彼の所に来るよう強く言い張った。

すでに時々週末はサムの所でステイするという関係になっていたが、一緒に住むという選択はなかった。サムから与えられる好意と情熱的なエッチは大きなプラス点だが、サムのことを恋人と見ることができなかったからだ。理由はやっぱり年齢。

友達になった千賀子のフラットでパーティがありサム同伴で行ったことがあったが、20代の人間の会話と喧騒の中でサムは完全に浮いていた。その上、千賀子に、「へえー。万里子さんってオヤジが好きなんだ」と目を丸めて驚かれたことも、ブレーキをかけた。

それでも結局サムに押し切られたかたちで一緒に住み始めたのは、優柔不断とも言える万里子の性格からだ。

万里子は小さい時から、何をしたいのか分からない、イエスとノーがはっきりしない子どもだとよく言われた。ふたつ違いの姉美智子が、活発でおしゃべりだったため、余計消極的な子という印象を持たれて育った。

万里子は内心自分は、人が言う程内向的ではないと思っていた。イエスとノーもすぐ決心できる。ただそれが行動につながるのに少し時間がかかるだけなのだ。

ただ、万里子のすぐそばで、美智子がどんどん自身の人生を切り開いていくのを見て、こういう性格を直したいと思うようになり始めた。美智子は女子大を出て、積極的な就活で第一志望の会社に就職。合コンにもせっせつと顔をだし婚活にも励むと、いいパートナーもゲット。来年には結婚が決まっている。

万里子は、同じ女子大を出て銀行で働いていた。どうしてもここで働きたいという職場ではない。万里子は結婚し、家庭をいうものを作る前に、自分の性格を見直したいというポジティブな気持ちで芽生えた。このままでも別に不幸せな人生が待っているとは思わないが、流されていくだけの人生ではなく、流れを自分で作るような人間になれば、どんなにかいいだろう。

イエスとノーをハッキリと意思表示しなければ外国では生きていけないというような記事を、いろいろな雑誌で目にした。その外国で生活すれば、少しは現状打破できるかも知れない。そう考えた。1年間ワーホリとして、オーストラリアで生活する決心を告げた時。一番驚いたのは、姉の美智子だった。驚いた目にちよっぴり羨望を確かめて、万里子は満足した。美智子がやりたくてすることができなかったことを私が実現しようとしてい

るのだから。

サムに庇護されたような生活は、その目的に反するものかも知れない。だが、快適なのは間違いない。家賃はただ。日常の経費もサムは万理子に払わせない。おまけに、1週間に何度かの快樂が付いている。

「マリコ。本当に本当にごめん。5000ドル貸してくれないだろうか。月末に、これまで投資したものが3倍になって返ってくるんだ。ここでギブアップすることは出来ない」  
サムが口惜しそうな表情で懇願する。

「5000ドルも」

ついこの間、3000ドルを貸したばかりじゃない。一体どういう訳？万理子の頭の中で、大きな疑問が膨れ上がる。

「何故？」という万理子の疑問に、サムはゆっくりと丁寧に説明し始めた。

かなり難しい英語がサムの口に何度も上り全てを理解した訳ではないが、万理子が分かったのは以下の通り。

サムは投資用に40万ドルで3ベッドルームのフラットを購入している。全額を銀行から融資しているため、毎月利子の支払いが3000ドル。現在の不動産ブームのため、オークションで3倍以上の値が付き売却。ところがバイヤーが突然海外転勤となり直前で流れたという。

シドニーで不動産の売買は、普通新聞などで3、4週間宣伝された後、オークションにかけ落札される。手付けを打ち仮契約をし、1カ月後に本契約が実行されるが、その時点で全額が支払われる。

「日本ではどうなの」とサムは質問したが、経験のない万理子には分からない。

「大金を掴んで万理子と祝えたのに」と、サムは口惜しがる。

万理子は、素早く銀行に入っている残高の計算をした。日本から百五十万を持参し口座を作った。これまで自分用の大した出費はない。この前サムに3000ドルを貸したので、残金は1万3千ドルぐらい。1年間ステイするつもりだが、既に4ヶ月が過ぎている。ここでサムに5000ドル貸しても、1万ドル弱まだある。

いつも最悪の事態を想像して行動するのが万理子の癖。万理子はまだ安全圏に居ることを確認する。それに、そろそろ何か仕事を経験してもいいのではとも思っている。正直に言えば、サムとの生活にマンネリも感じ始めている。お金を返して貰ったら、それをきっかけに一人暮らしに挑戦するのも悪くない。それにもしサムの不動産投資がここで水の泡となれば、貸したお金を返して貰うのに時間がかかるに違いない。その方がずっと厄介だ。

万理子は一番疑問に思っていることを口にした。「もし売れなければどうするの」サムは大きな笑い声を立てると、「今シドニーは売る家がなくて困っているぐらいの売り手市場。まったく心配ないよ」と、手を広げて説明した。

「分かったわ」「サンキュー。サンキュー。ベリイ・マッチ。マリコ。一生恩にきるよ」大げさに万理子の両頬にキスの雨を降らすサム。

万理子は5000ドルを引き出すため、キャッシュカードの入ったハンドバッグを手にして表に出た。サムが当然のように万理子の肩を抱く。万理子は近くにあるATMに向か

った。

サムは職業はコンサルタントだが、万里子は彼が実際にどういう仕事をしているのかさっぱり分からない。毎朝会社に通うこともないので、フリーランスのコンサルタントなのだろう。週に2、3回アポイントがあると行って、午後、レザーのバックパックを背負い出掛ける。

フラットの1室をサムは仕事場として使っている。窓際に大きな机が置かれ、机上に電話、ファックス、ラップトップのコンピュータなどが無造作に並んでいる。

万里子は掃除をする時だけその部屋に入るのだが、ファイル・キャビネットにも机の引き出しにも鍵が掛かっていることを偶然に知った。その時は、サムは慎重派なんだという感想があつたぐらいで、不快感が芽生えることもなかった。

空港からのタクシーの相乗りで、最初に降りるのは万里子。タクシーから降りる際、早苗にお礼を、和子に励ましの言葉をそれぞれ手短かに伝える。

フラットのドアを開けると、サムが「マリコ!」と、大声を上げ抱きついてきた。「マリコ、家が売れたよ。そうだ、前祝いとしてどこかへ遊びに行こう。うん、ブルーマウンテンがいい。今だと涼しいしとてもロマンチックな所だから、マリコは絶対気に入るよ」。サムの興奮がマリコにも伝染した。良かった。これで貸していたお金を返してくれる。ブルーマウンテン行きにも心が躍るが、その方が万里子は数倍嬉しかった。

ブルーマウンテンは、スリー・シスターズという奇岩が有名な観光地。シテイから内陸に向かって1時間半走れば到着する。観光ルートの一つ程度の認識しかなかった万里子だったが、初めて行ってみて、素敵なキャラクターを持った小さな村々が散在するを知った。サムと万里子がステイしたビレッジは、ユーラという場所。少し気取った言い方をすれば、軽井沢のような瀟洒な所だ。ここは、昔リッチな紳士が愛人を連れてくる避暑地として有名だったそうだ。

シテイの暑い夏を逃れてやってきたユーラは、澄んだ空気に満ち涼しげな風が舞っていた。ブティックホテルのロマンチックは天蓋のついたベッドに大感激した万里子は、サムとの2泊3日の休暇をエンジョイした。

部屋には小さなキッチンが備わっているので、朝はサムが鼻歌まじりで作るブレックファーストの匂いで目を覚ます。ベランダのテーブルで、緑がグラジュエーションになった樹海を見下ろしながらコーヒーをすする。それからゆっくり支度をして出掛ける。行き当たりばつりに散策し、ランチは小さなコーヒーショップでホームメイドのスープを味わう。パンピングスーパは、万里子の大好物。ランチの後もブラブラと歩く。夕方ホテルに戻りシャワーを浴びてドレスアップすると、ホテルのレストランでデイナーを取る。万里子の好きなオーストラリア産の白ワインを一本、サムと空ける。デイナーの後部屋に帰ると、気分はすっかりラックスしている。サムは万里子の服を脱がし、万里子を快樂の世

界へ導こうと、ベッドの上で長い時間をかけて一心不乱に身体を動かす。

酔いと昂ぶりで朦朧とした中、何と楽しいのだろうかという感覚が浮かび上がる。そしてこんなにも楽しいのは、お金の問題がやっと解決したからだということに気付く。

「マリコ…。ちよつと話を聞いて貰えるかな」

ブルーマウンテンから帰って1週間が経ったある朝、朝食の後片付けをしようとキッチンに立った万里子の肩に、サムが手を置いた。

へビーな声のトーンにあれっという感じがしたが、サムの顔を見て、万里子は軽いショックを受ける。さっきまで一緒に朝食を食べていたサムが、まったく別人のような暗い表情で立っていた。

「マリコ…」

万里子は次の言葉を待った。

「ソーリー。ベリイ・ソーリー。2000ドル、何とかならないだろうか」

「何故？」

「不動産の最終的な書類作りで弁護士に払わなければならない費用が、どうしても工面できないんだ」

何ておかしな話だろう。これまで漠然と感じていた不信感が、怒りに変わって行く。サムは子供でもなければ社会人1年生でもない。40に手の届くおじさんが、不動産で何千万の利益が出たというのに、数十万円の都合がつかないとは。最後の最後まで私にお金の無心をする理由は、一体何故。ここに来て、万里子は、サムが最初からお金が目当てで、私につきまとったのではないかという疑問が確信に変わり始めていた。

「サムは、まったくノー・マネーなのね」

自分でも驚くほどの冷たいトーンの声が出た。

「だから手続きさえ完了すれば大金が…」

「サムに貸すお金はもう1ドルだってないわ。私の所持金だって、もう残り少なくなってるし。弁護士の費用は誰か他の友達に頼んで」

万里子はきつぱりとサムに告げた。何千万の利益というのが本当なら、サムはどんなことをしてでも2000ドルの工面をする筈。万里子はそう計算した。

それからだ。サムが取り付く島もなくなったのは。

金の切れ目が縁の切れ目を地で行くように、サムは態度を豹変した。会話がまったく無くなり、サムは仕事部屋で寝起きし、毎日どこかへ出掛けた。

万里子は荷物をまとめて出て行く訳にはいかない。貸したお金を全額返して貰うまでは、出るに出不れない。万里子は突然自分の中に、こんな強さがあったことに驚いた。まさか殺されることはないだろうが、暴力をふるわれる可能性はある。でもお金を返してくれるまではここを離れないという強さがあったことに、驚いた。

警察へ行こうかと考えたが、この時点では警察ができることは何もない。友達に話すことは恥ずかしくて出来ない。あんなオヤジに1万ドル近くも貸していることを知られたら

大笑いされるだろう。

ぎくしゃくとした日が数日続いたが、ある午後スーパーへ買出しに行こうとした万里子呼び止め、サムは、「今週不動産の件が完了するので、来週にはお金が入ると思う。入れば直ぐにこれまで借りているお金を返すので、そしたらこのフラットから直ぐ出て行って欲しい」と告げた。その不気味な目の光に、万里子は初めて恐怖感を感じた。

お金さえ返してくれば、こんな所に1秒だって居たくない。もう少しの辛抱だ。もう少しですべてが解決する。

「人にお金を貸す時は、返して貰えないのを覚悟で貸せつてよく父に言われたわ。5000ドルといえばまとまった額よね」

「私にとっては大金よ」

サムに貸した総額は1万ドル近いが、恥ずかしくて本当の数字は言えない。万里子は小さなため息を洩らす。やっぱり早苗はお金持ちのお嬢さんだな、表情を変えず淡々と5000ドルはまとまった額よねと相槌を打つあたりは。普通のワーホリなら、大きな声が上がっていたのに違う。

万里子は久しぶりに早苗と、ダブルベイの日本レストランでランチを食べた。サムとの陰鬱な生活から気晴らしが必要と、早苗をランチに誘ったのだ。この日本レストランは鳴り物入りでダブルベイにオープンしたものの客足が伸びず、おかげでゆっくりとランチを取るのに格好のレストランだった。場所柄しゃれたインテリアで味も悪くないのに、いつ行っても客はまばらで店内は閑散としていた。

早苗のこれまでのサムとのいきさつを、あたり障り無く簡単に説明すると、早苗は万里子に同情した。

「とにかく今週返してくれるんだから、受け取ったらフラットを出てさっさと忘れることね。まだ次の住まいが決まってるのだったら、しばらく私の所へ来ればいいわ」

「ありがとう。早苗さん」

早苗に礼を言いながら、万里子の胸に不安がよぎる。サムは本当に返してくれるのだろうか。

早苗が勘定書きを手にしようとするのを、万里子はさえぎった。

「駄目。今日は私が誘ったのだから、私に払わせて」

万里子は勘定書きを早苗から奪うと、レジに向かった。

ハンドバッグから財布を取り出しそれを開けた時、万里子はショックを受ける。いつも財布の中に入れてあるキャッシュカードが見当たらない。万里子の顔つきがよほど変わっていたのか、早苗が心配そうに顔を覗き込んでいた。

「どうしたの。大丈夫」

「うん。何でもない。ちょっと急に胃が差し込んだりして」

万里子は、辛うじてその場を取りつくろった。

ダブルベイのお店を見て回るといいう早苗と別れ、タクシーを捕まえ慌てて帰ってくると、

フラットはもぬけの殻であった。逃げた。サムは逃げた。万里子の頭の中で、その言葉ががらんりフレインする。あつという音声万里子の口から発せられた。

震える手でダイアルを回し、銀行に電話をする。心臓がドキドキと鳴っている。カードの紛失を告げ、引き出しのストップをして貰う。万里子は祈るような思いで残高を聞くと、35ドルという答えが返ってきた。

すべてのお金をサムに盗まれてしまった。身体から全ての力が抜け、万里子はその場にへなへなと座り込んでしまった。

### 風俗で働く

「ハッピー・マリッジ！」

ひげを生やした大男の音頭で、テーブルに着いていた全員がグラスを持ち、「ハッピー・マリッジ」と合唱し乾杯した。

早苗は内心おかしくてたまらない。

小さな田舎町スコーンのレストランで、結婚披露宴が進行していた。花嫁はジョスリン。花婿がジェフ。ジョスリンは50を超えた売春婦。10数人の女性を抱えたシドニーのエスコートを仕切るマダムでもある。ジェフは、35歳の消防士。顔も体格も平均的なオージーのジェフは、相手をしたジョスリンをいたく気に入って通いつめた挙句、プロポーズし、めでたくここに華燭の典と相成った次第。

ジェフの出身地がこのスコーンという田舎町だったため、ここで結婚式の披露宴することになった。披露宴といっても、親類や友達を呼んで、レストランで報告を兼ねた夕食会をするといった簡素なもの。シドニーから車で3時間ほどかかる。

ジョスリンは年は食っていても、まだまだ現役で商売を張っている。ミシェル・ファイアーとオバQを足して2で割ったような容姿で、ネアカ120%の陽気でおしゃべりな人だ。笑うと顔いっぱいに広がるしわは確かに年齢を感じさせるが、身体から発散するフェロモン度はかなり高く、15才以上年下のジェフがプロポーズしたことは、職業を除けば、それ程奇異なことでないと思われている。

今夜は売春婦と彼女の顧客だった二人がめでたくゴールインしたのを、皆が祝ってる図式で、こんなアメリカ映画のコメディで見られるような「純愛」を、そうひんぱんに目にするのではないだろうと思うとおかしく、こみ上げてくる笑いを我慢するのに苦労した。オーストラリアで売春は合法だ。そればかりではない。エスコート・エージェントと呼ばれる売春宿のオーナーが選挙に出馬し、当選し政治家に変貌する国だ。止めを刺すように、最近大手のエスコート・エージェントが、ピンク・ピンク・ピンクという人を食ったような企業名で上場し、大成功を収めたことが話題になった。このように社会的には大っぱいな風俗業だが、個人的な感覚は、まだまだ両手を広げて迎えられるようなものではない。それは多分世界共通ではないだろうか。

ジョスリン側の参列者は、メリーとサンドラとスージーと早苗。同じエスコート・エージェントで働く同僚たち。それにジョスリンの娘で18才になったばかりのジェシカ。

一方、ジェフ側は親族一同が連なっている。いちいち紹介はしてくれないので。どの人が彼の両親で、誰が兄弟なのか分からない。

彼らはジョスリンの職業を承知しているが、決して諸手を上げて結婚に賛成しているのではないことが、様子から読み取れる。

多分ジェフの弟とおぼしき男性が、売春婦予備軍のような濃いメイクをしているジェシカと親密に話しているのを見つけると、初老の男性が、彼に「ノー！ノー！」という目線を送っているのを、早苗は見逃さない。この人がジェフの父親にちがいない。もう一人の息子までこの種の女に持って行かれたのでは、たまったもんじゃないという心境なのだろう。

ジョスリンはそういう雰囲気をも承知だが、歯牙にもかけない。

早苗の席からジョスリンやメリーを見ると、一目で素人ではないことが読み取れる。化粧が濃いからだけではない。風俗で働いている内に身に付けてしまう独特の「垢」のようなものが、身体から発散している。

早苗は唐突に、今は亡き飯島愛のことを思い浮かべた。自叙伝である「プラトニック・セックス」を読んで以来、ハンパじゃない生き方に感動しファンになった。元AV女優というキワモノからテレビの正道を行く売れっ子タレントになったのは、彼女が最初で最後かもしれない。色メガネを掛けて見ているのかも知れないが、その飯島愛でさえ、他の女性タレントと混じるとかなり浮いて見えた。

早苗は我が身を振り返ってみる。このテーブルに座る人たちは、私のことをどう見てるのだろう。

ジョスリンらを見る彼らのまなざしには、好奇心と少しだけ侮蔑が混じっている。しかし、うぬぼれかもしれないが、早苗を見る目には、このオリエンタルの女が何故この場所にといい大きな疑問が含まれていると、早苗は思う。

そう。何と言っても、早苗はシドニーの日本人の友達の間では、金持ちのお嬢さんで通っているのだ。誰一人として、早苗が風俗で働いているなんて想像もつかないだろう。

この間、さえない中年の男に有り金を全部持って行かれ、泣き狂って収拾がつかなくなった万里子を自分のフラットに置き、警察にリポートし、入用のお金を立て替え、日本へ帰国のため空港まで送って行った。

彼女も別れ際涙を溜めながら、「早苗さん。本当にいろいろありがとう。早苗さんのようなお金持ちのお嬢さんと友達だったのが、すごくラッキーだったわ」と、早苗の手をきつく握り締めたっけ。

早苗が住んでいるフラットは家具付きの1DKだったが、セキュリティのしっかりした高級マンションで、家具も高価で趣味が良かった。早苗はよく友達に奢ったが、高い家賃も友達への散財も、実際は風俗による稼ぎから賄われていた。

そんなことを夢に思わない友達は、高級マンションに住み、一見仕事もしないで気ままに生活しているように見える早苗に、大金持ちのお嬢さんというレッテルを貼った。

シドニーで大いなる誤解の元、「金持ちのお嬢さん」というポジションを得た早苗は、それが大層居心地のいいものだと分かり、輪をかけてその役割を演じた。

「エクス・キューズ・ミー。シャル・ウイ・ダンス？」

ゴマ塩のひげを生やした中年の男が、満面に笑顔を浮かべて早苗を見下ろしている。

このレストランは、小さいスペースだが生バンドが演奏し踊ることが出来る。ジェフ側の招待客なのだろう。お互いに簡単な自己紹介をし、早苗はパトリックというその男性とダンスフロアに向かった。

フロアに人が溢れていた。

ジェフと嬌声を上げて踊っていたジョスリンが早苗を認めると、「ハーイ」と近寄ってきた。「サナエ、エンジョイしてる」と声をかけ、パトリックには、「この子はジャパニーズ・レディだから、誘惑しちゃだめよ」と大きなウインクをして釘を刺した。

早苗は苦笑する。レディと呼ばれたこともそうだが、それよりも、こんな年寄りのオヤジにいくら誘われてもなびく訳ないじゃないという気持から。

恐ろしく趣味の悪いミュージックに合わせて、ぎこちない動きをするパトリックと踊りながら、万里子の彼氏だったサムも丁度似たような年齢だったなど、思い出していた。

あんな冴えないオヤジにうまく遊ばれて、挙句の果て全てのお金を持って行かれるなんて、万里子は馬鹿の極地じゃないとつくづく呆れてしまう。愛してもいない男とセックスをする場合は、お金を支払ってもらうべきところを、お金を巻上げられてしまったという茶番劇。

早苗はお嬢さん然として万里子の後始末に根気よく付き合ったが、万里子の馬鹿さにイライラした。

日本領事館へも一緒に行き、相談した。年配の女性担当者が「外国で知り合った人にお金を貸す場合、返してくれなくても結構という気持がない限り、絶対に貸すものじゃありませんよ」と、噛んで含めるように万里子を説教したが、その瞳の奥に、（信じがたい馬鹿娘）という侮蔑の光があった。

そして、領事館で分かったことは、サムがこの種の犯罪の常習犯だったことだ。既にワ―ホリの数人の女性より、被害届が出ていた。担当者は、警察もサムに関して捜査中だが、告訴して裁判に持ち込むことが難しいのだと説明した。被害者が短期滞在という流動的な事情のためだそうだ。要するに取られ損という訳。

早苗は、万里子のようなアホな女が他にも居ることを知って、ヤレヤレとうんざりした。

早苗がシドニーで風俗をするきっかけになったジョスリンとは、パーティで出会った。有名なミュージシャンだという男の家でのパーティは、マリワナの匂いが充満し、多分コカインかスピードなのだろうスノートする人間がゴロゴロ居て、かなりワイルドなパーティだった。

何故早苗がそんなパーティに加わっていたのかというと、当時付き合っていたボーイフレンド、クリスが、そのミュージシャンが属する事務所電話番号として働いていたから。

そこで、やり過ぎじゃないと思うほど、フレンドリーな態度で近付いてきたのがジョスリンだった。「ジャパニーズ？」という第一声から大きく目は開かれ、大きな笑顔に（私はあなたの事にすごく関心がある）と大文字で書かれていた。

途中でボーイフレンドがやきもちを焼くほど、ジョスリンは早苗を構った。

これまで、早苗はその場その場でボーイフレンドが居りいつも数人の親しい友達を持っていたが、男女に限らずこんなに強烈に他人から関心を持たれたことは初めてだった。

別れ際、ジョスリンは「必ず連絡してね」と、自宅と携帯の電話番号をペーパーナプキンに書くと、早苗に手渡した。

そのパーティーからすぐ、早苗はクリスマスと決別した。いや決別という程のおおげさのものではない。お互いにシリアスなリレーションシップではなかったし、クリスマスが、ミュージシャンの全国ツアーにバンドボーイとして付いていくので、関係を終わりにしたいと告げた時、早苗は何の動揺もなかった。

出発の日、「気をつけて、元気でね」と、明るく見送ったぐらい。

ただ、その日から金銭的にきつくなかった。これまでシェアしていたアパートのお金。食料費、光熱費などもろの諸経費が。早苗一人の肩にかかった。

シェアメイト募集の告知板も出したが反応がない。日本レストラン、ジャパレスの仕事ならいつでもあったが、シドニーまで来てウエイトレスなんかやりたくない。

そんな時、思い出したのがパーティーで会ったジョスリンだった。彼女が何をしているのか知らないが、金欠に何かアドバイスをくれるかも知れない。そんな軽い気持ちからだった。単なる外交辞令だとは思えない好意と熱意をあのパーティーで示してくれたのだから。早苗はジョスリンに電話した。

教えて貰ったアドレスを訪ねて、早苗はショックを受ける。そこがエスコートだったから。

シドニーのエスコートは、いかにもという地区ではなく、普通の街中にあたり、あるいは住宅街の一角でビジネスが営まれていたりする。ジョスリンのエスコートはボツツポイントと呼ばれる住宅街の中にあつた。シドニー最大の歓楽街キングスクロスに隣接していたが、ここは、中産階級が住む整然とした住宅エリアだ。

アドレスを頼りに見つけた家は、オレンジ色の高い壁に囲まれた大きな軒家だった。普通に通り過ぎればどうってことのない家だが、よくよく見れば何だか周囲の家から浮いており、何だろうと一瞬考えた後ははーんあの手のビジネスをやっている家だと気付く。そんな雰囲気を持つ家だった。門の中に入ると、外からは何も見えない。それはそうだ。エスコートのドアのブザーを押し、押し問答しているところは誰にも見られない筈だ。門の内側に入る一瞬の勇氣さえあれば事足りる。

ブザーを押しインターホンで用件を伝えるとすぐ金属音がしドアが開き、ジョスリンが満面の笑顔で早苗を迎えた。

手入れの行き届いた庭に面したサンルームで、コーヒーと手作りだというチーズケーキを勧められた。どんな風にそういう話をするようになったのか覚えていないが、ジョスリンのセックスに関する熱弁に耳を傾けていた。

簡単に言えば、ジョスリンは社会意識目覚めた風俗嬢。ジョスリン曰く、エイズの蔓延する現代で、風俗の女こそセーフセックスを實行する救世主である。ジョスリン曰く、この世にごまんと居るセックスに満たされない男を満足させ、明日への希望を与える風俗の女は、社会福祉に係わるソーシャルワーカーと言っても過言ではないと、情熱的に説明した。

早苗がここで働くことになった会話は、つぎのように進んだ。

「サナエは、今からどれ位シドニーに居るの」

「ワーキング・ホリデーで来てるので、ビザ的にはまだ10ヶ月ステイできるわ」

「これまでシドニーで何をしてたの」

「着いて直ぐ1ヶ月は英語学校に行ってたわ。その後はブラブラしてるんだけど、日本からの持参金もそろそろ底をついてきたので、そろそろ仕事を探そうかなっていう感じかな」  
後で思い出すのだが、この時ジョスリンの目が光った。

「パーティの時の彼とはステディなの」

「全然。もう別れたわ」

「サナエ、ここで働く気はない」

「エッ」

「ここなら一晩で、普通の仕事の1週間分が稼げるわ」

「エッ。でも…」

「サナエは、気に入ったクライアントとだけ寝ればいいわ」  
「？」

ジョスリンは早苗の手を引くと、長いコリドーを右に曲がり左に曲がり着いたある部屋の中に早苗を押しした。

何の変哲もない小さな部屋だが、壁にマジック・ウインドーがはめ込まれており、隣の部屋の状態が一目瞭然だった。隣の部屋は、女と客が交渉する場だった。シャンデリアのあるその部屋のソファに座り、数人の女たちが客を待っている。突然ドアが開き初老の男が入って来ると、スローな足取りで女たちを物色し始めた。

「サナエはここで待機し、気に入った男の時だけあちらに出てくれればいいわ」

早苗の頭に、一瞬（気に入った男とやるだけだったら楽しいかも）という考えが走ったことは否定できない。

しかし、当たり前だが、早苗はその場でイエスとは言えなかった。が、結局数週間後に早苗はジョスリンに電話を入れ、シドニーで風俗をすることになった。

日本では、家が飲食店をやっていたため、かなり放任主義の末娘として育ち、自由奔放な青春をエンジョイしたと思っっている早苗だが、風俗をすることは想像すらできないものだった。

それを決めた最大の理由はやはりお金。ワーホリに職業の選択肢はあまりない。ジャパレスのウエイトレス、免税店の店員ぐらい。そんな仕事はやりたくない。ジョスリンが言ったように、一晩に3人の男の相手をすれば、確かにそれらの職業の週給を上回る。それと自分の気に入った客だけと寝ればいいという大特権。

早苗は腹を決めた。

最初のお客は中肉中背の40代のオージー。マジックミラーから覗き、こういう男ならま、いいかという気持ちでサロンに出て行くと、男はすぐ早苗を指名した。

こういう所へくるのは初めてなのかも知れないと思わせるほど、男はぎこちなかった。それは早苗に優越感を与え、緊張もなく売春婦の演技をすることができた。

早苗の上で、荒い息を吐く男の白髪の混じった髪を撫でながら、この男も家に帰れば、妻や子供が居る身の上なんだろうなと思う余裕さえあった。束縛される時間は1時間だったが、30分で終わった。

仕事が終わわり、個室を出る時、この男は「サンキュー」と礼を言い、料金以外に50ドルをチップとして、早苗に渡した。今度は、早苗が「サンキュー」と礼を言う番だ。

始めて客を取り、早苗は心に何か変化があるのだろうか、考えてみた。売春をやつて心や身体が墮落してしまった感じるのではないかと思つていたので。それはまったくなかった。むしろこんなことで、こんな大金が舞い込んでくることに、戸惑いがあつたぐらいだ。これなら日本で援助交際が蔓延するはずだと納得した。

オーストラリアであろうと日本であろうと、風俗でやっていることにたいした変わりはない。日本の事情に詳しい訳ではなく、たまにページをめくつたことのある男性週刊誌からの受け売りでしかないが、強いて違いを挙げればコンドーム使用の徹底度ではないかと早苗は思う。ジョスリンからも、生本番は絶対にノーと言ひ渡された。それだけエイズに関する認識が高いのだろう。

殆どの客は、コンドーム使用が好きではない。何故なら、殆どの男は着装中に萎えるから。萎えたまま機能しない男だつて居る。100ドル上乗せするから生本番させろという客も居るが、100ドルぼちちでリスクを負うような馬鹿は居ない。もっともドラッグに手を染めてる女は別だ。

エスコートで働くレディーズで、コカインやヘロインなどのドラッグ常用者が居る。彼女たちは、状況次第では生本番をやっているらしい。重症のドラッグ・アディクトは追放されるのだそうだ。クビになつた女は立ちんぼの女に転落し、ピンプに骨までしゃぶられて終わりという悲劇が待っている。

意外だったのは、このエスコートはジョスリンのものではなかつた。彼女が仕切つてはいるが、本当のボスは暗い闇の中に居て姿を現さない。陽気なジョスリンが采配する陽気なエスコートではあつたが、背後に狡猾で巧妙な悪の組織が控えている。だが、それは早苗の関知することではなかつた。

セックスに関して、オーストラリアと日本の男の違いはある。あれのサイズは、一般的にはオージーの方が大きい。硬さは五分五分。最後に、日本の男はもくもくと励む方だが、オージーは動物のように快楽に徹した声を上げる。

セックスで、早苗にとって一番重要なことは、タイプがどうかそれに尽きる。だからここで働くようになって、本番中感じることがかなりある。早苗は、気に入つた男だけの相手すればいいという大特権を貰つている風俗の女だつたから。

早苗のタイプ。それは30代後半のワイルドな感じの男だが、客としては決して稀ではなかつた。というよりも、あらゆるタイプの男たちがエスコートを訪れた。

女に不自由しそうにもないハンサムでセクシーな男から、足取りもおぼつかない老人まで千差万別だつた。これほど広い年齢層をカバーできるビジネスは他にはないと、実感できた。

早苗が風俗の仕事に慣れるのに、それほど時間はかからなかつた。

早苗は時々訝る。ジョスリンがパーティで早苗に目をつけた理由は、単に風俗に引き込まただけだったのかと。それなら少し失望する。早苗のことを純粹に気に入つてくれたのだと自惚れていたから。

ボーイフレンドにもガールフレンドにもこれまで不自由しなかつた早苗だが、あんな風

に他人から興味を持たれたことは一度もなかった。だが、ジョスリンにそれを確かめる必要はない。これで、早苗はとにかく金欠問題を解決することができたのだから。

風俗の仕事が軌道に乗ると、早苗の生活が一変した。ワーホリとしては、非常にリッチなライフ・スタイルが出来上がる。住まいは1LDKだが、広々としたリビングの高級マンションに移った。ブランドものを身に着ける。こちらで知り合い友達になった日本人と出掛ける際、嫌味にならないように奢った。

いつの間にか、日本人の友達サークルで、早苗は「大金持ちのお嬢さん」と呼ばれるようになっていた。大金持ちのお嬢さんがシドニーに来て、高級マンションに住み、仕事もしないで、毎日優雅に暮らしている。それは、大層気持ちのいい響きを持って早苗の耳に届いた。

「君みたいなナイス・エイシャン・ガールが、こんな所で何をしてるの？」

事が終わり、シャワーを浴びてきた男が、早苗にそう聞く。

エスコートに来る男たちは、二つに大別できる。事が終わるとそそくさと部屋を出て行く男と、会話をしたがる男に。時間制限は1時間なので、残り時間がない場合は、適当な言葉で丁重に部屋から押し出すが、まだ時間が残っている場合は会話に付き合う。

この点では、ジョスリンが常に主張するように、風俗嬢はソーシャルワーカーだということに同意する。何故なら、男たちのさまざまな悩みや質問に耳を傾けるのだから。

話をしたがる男がきっかけをつかもうと口にするのが、前述の言葉だ。そして早苗が聞き手にまわったことを察すると、機関銃のように言葉が放列する。

殆どが、ワイフやガールフレンドへの不平や不満。作る食事がまずい。掃除をしない。仕事をしない。セックスに応じない。フェラをしてくれないと愚痴る男も居た。まるでエスコートへ来たことを正当化でもするように。

「学資稼ぎのため、仕事をしているのと、早苗はお決まりの返事をする。」

年は30代後半。多分ギリシャ系かイタリア系なのだろう。ガツチリしたヨーロッパ系の風貌。

クライアントに質問するのはタブーだったが、男がちよっぴりタイプだったので早苗は同じ質問を試してみた。

「あなたのようなグッドルッキング・ガイが何故こういう所に来るの。女の子に関して何不自由しないタイプに見えるけど」

「褒められているのかな。それならサンキュー。普通の女の子とのセックスは、そこまで行くプロセスがあつてそれが面倒。デートして、ディナーを一緒にして、花なんかプレゼントしてようやくベッドイン。だからムラムラしたら、こういう所に来るのが手っ取り早くていい。それとジャパニーズ・ガールとメイククラブするのはずっと夢だったから、今夜それが実現してとてもハッピー」

「あなたが日本へ行けば、ジャパニーズ・ガールにモテモテよ」

男が相手を崩す。

「何故ジャパニーズ・ガールがいいの」

「ジャパニーズ・ガールは、おとなしくてやさしい。男に従順だし」  
「？」

60や70の年寄りではない。30代の男が、大昔のステレオ・タイプ、ゲイシャ・ガールのイメージを持っているのだ！早苗の中で、男への興味が急速に衰えた。

「それに比べるとオージー・ガールはダメ。気が強く要求が多い」

「ジャパニーズのガールフレンドが見つかるよう祈ってるわ」

「今後外で会うことは可能？」

「どうということかしら」

「ここではなく、外で普通のボーイフレンド、ガールフレンドとして会えないかなという意味」

「そうね。携帯の番号を覚えてくれれば、時間と都合がつけば連絡するわ」

「グレイト！」

男が部屋を出た後、番号の書かれた紙切れを丸めて、コンドームやティッシュが捨てられている屑箱へ投げる。ゲイシャ・ガールを求めるガイジンとのデートなんかまっぴら。それに外で会おうと誘う客の目的の一つ。エッチをただでやりたいだけ。

早苗はいつものように昼近くにグズグズとベッドから起き上がると、ジーンズを穿きシヤネルのサングラスをかけ、10ドル紙幣をつかみ外に出た。外に出ると、熱い太陽の光が射す。暦の上では11月から夏に変わるのだが、10月に入ると、もう真夏のような日が続く。

近くのコーヒーショップでビッグサイズのカプチーノとクロワッサンを、ニュース・エージェントで新聞を買いマンションに戻る。ショップのウェイターや、エージェントのおじさんが、「ハイ、サナエ。ハウワニュー」と笑顔で声をかけてくれる。早苗は、常連客なので。これが早苗の遅い朝の日課。

ベランダに出て、テーブルに買ってきたばかりの新聞を無造作に投げ出したが、表紙のトップ記事の大きな写真が目飛び込んできた。セミロングの黒髪に、アジア人特有の切れ長の目をした若い女性の写真。

日本人なんだろうか。そう思いながら早苗はサングラスをはずすと新聞を手にとって読み始めた。記事の見出しは、不法入国センターでの孤独な死と書かれている。小見出しとして *humann traffic* の犠牲者とある。ヒューマン Trafficking ってなんという意味なんだろう。早苗はPCを持ってきて、検索してみた。

人身売買という意味だ。この女性は人身売買の犠牲者なの。

信じられない。確か学校の歴史の時間で、大昔日本でも貧困のため親に売られ、遊郭というところで売春を強制された女性たちのことは学んだ。けれど、この21世紀の世界で、人身売買が行われているなんて、信じられない。

記事を読むに従って、身体が固まっていくような気がした。

写真の女性はタイ人で24才。14才の時に売られてオーストラリアへ連れてこられ、ずっと売春婦として働く過程で麻薬中毒患者となった。最近不法滞在で摘発され不法入国センターに拘置されたが、そこで死亡したという記事。死因は、センターで麻薬を断たれ

たために起きたショック死、あるいは麻薬のオーバードース、あるいは麻薬乱用で起きた心身の衰弱による心臓麻痺と推測され、現在調査中であると記事は結ばれていた。

早苗は写真の女性を凝視した。これといった特徴のない、どこにでも居そうなアジアの若い女性。

身体の奥深いところから何か熱いものが生まれ、それは体中を駆け巡り、瞳を通して外側に噴き出した。

ひどい！こんなことがオーストラリアで起きるなんて。死亡した時、わずか35kgの体重しかなかったという。このタイの女性は14才でこの国に連れてこられ、ずっと売春婦として働かされたのだ。

瞳から溢れ出る涙をぬぐうこともなく、茫然として写真を見続けていた。

熱い何かが頭の中を駆け巡る。早苗はそれを言葉にしようと焦ったが、言葉にはならぬ。ただ何かが、このタイの女性を殺した売春というもので、人生の享樂のようなものを味わってはいけない。そう訴えている。

日本へ帰ろう。今すぐに。

もう数ヶ月でワーホリも終わりだが、早苗は日本へは、ヨーロッパとアメリカを経由し、世界一周をして帰るつもりだった。それも飛行機はファーストクラスで。その大名旅行を樂しんでいたのだ。

でもそんなことが、一体何だというのだろうか。

日本へ帰り愛する男性を見つけ、結婚し家庭を持ち、子供を作ろう。そして幸せなファミリーを作る。そう決心した。

早苗は久しぶりに、希望というものを手にしたような気がした。

## レズビアンラブ

「だからグダグダ言っていないで、ミナミはどっちが好きなのか言いなよ」

ジェニファアの英語「Which one do you like?」を、頭の中で自動的に日本語に翻訳しようとして、南はハタと困った。男性なら「どっちが好きなのか言えよ」だろうし、女性なら「どっちが好きなのか言ってよ」となるだろう。

だがジェニファアの場合どう訳すればいいのか。修羅場で、こんなことを考えている自分を、おかしいと思いつながら、南はジェニファアを見つめていた。

頭を刈り上げジーンズに肥満体を押し込んだルックスは、人目見て直ぐレズビアン役と分かるそれだ。

一方、ジェニファアが覗みつけているゲイルは、手入れの行き届いた栗色の髪が波打ち、ノースリーブのワンピースがプロポーシヨンのいい身体を包んでいる。外見だけでは誰も彼女がレズとは想像できないだろう。

やさしく温和な感じのゲイルは、外見とはかけはなれて、度胸のすわった動じない女性なので、ジャニファアの剣幕に表情ひとつ変えず、動向を見ていた。

ジェニファアはゲイルから目を離すと、気が付いたように部屋の周囲を見回す。「へえー、

ワーホリのくせに、えらい豪勢な所に住んでんだ」「ノー」と、南の口から反射的に言葉が出た。

「これは私のフラットじゃないの。私の友達でお金持ちのお嬢さんが借りてたフラットよ。彼女急に日本へ帰ることになって。リースが切れるまでここに住むよう勧めてくれたの。家賃は向こう持ちよ。だからこんな高級な所に住めるのもあと1ヶ月足らず」

と付け加えながら、何故ジェニファーに説明しなきゃなんないと自問する。

突然早苗から電話が入り、「急用ができて日本へ帰るんだけど、良ければここに住まない。リースがまだ2ヶ月残ってるの。勿論レントはこちら払いよ」という申し出に南は驚いた。

早苗と親しいという訳でもなかった。誰の紹介だったか覚えていないが、数回会った程度だ。

一度早苗のフラットでパーティが開かれた時行ったが、評判通りリッチな部屋で、羨望したのは南だけではない。そこに期限付きだがタダで住めるようになるとは、南は自身の幸運が信じられなかった。

幸運と言えば、自分が今はまっている人間模様も信じられない。

二人の女から、どちらを取るのかと迫られているのだ。こんなドラマチックな状況に身を置くことになるとは！だからさつきからジェニファーに乱暴な言葉でなじられながら、南は殆ど恍惚状態に陥っていた。

無理もない。ほんの半年前まで、同性との愛情関係は想像の中だけのものでしかなかった。ましてや三角関係で悩むという「贅沢」は、想像すらしたことのない世界だった。

秋田県で生まれ育った南が、自分は他の女の子とちょっと違っているなと感じたのは、多分中学生の頃だったと思う。

高校生になって、その違いが何なのかをはつきりと理解した。何を理解したかというところ、南は、性的に男性ではなく女性を好む人種だということだ。つまり、南はレズビアンであることを理解した。

それは公には出来ないもの、自身の胸の中だけに収めておかなければならないものであることを本能的に理解した南は、厄介なものをしよいこんでしまったんだという感慨があった。

公には出来ないものであったが、思春期になればそれなりの性的な衝動を抑えることができる。

南は高校時代にバレー部に属していたが、そこが南にとって性的衝動を発散できる唯一の場所となった。と言って、大したことをする訳ではない。チームが得点したりあるいは勝った時など、部員全員が興奮や激励のため抱き合うが、南はそこである種の性的な満足を味わうといった他愛のないものであった。それでも気に入った女の子の場合は、少し長く少し情熱的に抱き合ったが、南は不自然にならないよう、抱き合う長さにしる抱き方にしろどこまでがリミットかというのを、いつも意識していた。

大学進学を迎えて、両親の猛反対があったが、それを押し切るかたちで東京に出た。

南は自分が辿らなければならない人生のコースを承服していた。父親は県の役人で、家は一応名家と周囲から見られている。

南は一人っ子。だから両親も周囲も、南が婿養子を取り家を継ぐのが当然のことだと考えていた。だから、南はその時が来るまでに、やりたいことをやってしまおうと決心した。それは、セックスを含めて女性と付き合うことがどういふものなのかを知ろうという決心だ。その可能性がゼロに等しい地方の街よりも、東京ならチャンスが多い筈と考え東京の大学を選び、父親の望んだ短期女子大よりも、時間を稼ぐといった意味で4年制の大学に入った。

しかし東京での生活で、決心を実現することは出来なかった。

同性愛に関するアクセスは、主にインターネットを通して大きく広がった。が、知識や情報が増えただけで、経験に繋がらない。

一度だけ出会い系サイトで、年齢の近いレズビアンとデートをしたが、相手の濃いメイクと病的な話し振りに度肝を抜かれほうほうの態でその場を逃げ出して以来、怖くて行動を起こせなかった。

南はつくづく男の同性愛者、つまりゲイを羨ましいと思った。

新宿の歌舞伎町2丁目をみても分かるように、あるいは出会い系サイトを見てもそうだが、レズに比べて何百倍も相手と出会うチャンスが与えられている。それはゲイの人口がレズのとほ比較にならない程大きいことを意味するのだろう。

それに気付いた時、南はレズが同性愛の中でも非常にマイナーな人種であることを悟り、疎外感が倍増した。

南はレズとしてはバージンだったが、皮肉にも男とのセックスは大学時代に経験済みだ。男に興味があった訳ではない。ただ「普通の女」がしていることを経験したかったのと、もしかして「矯正」されるのではという期待もあった。

男性からの誘いは常にあった。典型的な秋田美人を表現するのに、色白でうりざね形の美女というのがあるが、南はこれに近い容貌を持つ。髪形はベリーショート。そのアンバランスが独特のセクシーな感じを醸し出し、男の目を惹くのだと女友達からよく言われた。だから南さえその気になれば、男をゲットするのは難しいことではない。

南が白羽の矢を立てたのは、学部は違ったが英語研究会のサークルで一緒になる高木という学生。中肉中背のプロポーションの取れた身体も良かったが、笑顔が可愛いと南は思った。高木にガールフレンドが居るのかどうか確かではなかったが、意識してフレンドリーな態度を見せるとデートの誘いがかかった。

最初のデートは、二人で映画を見るだけで何も起こらない。2度目のデートでキスを交わす。3度目のデートでようやくホテルへ行くことになった。南はそれが目的だったから、最初のデートでホテル行きになっても構わないと思っていたが、高木がそれなりのプロセスを踏むのに内心苦笑した。

無邪気で可愛い感じとは打って変わり、ベッドの上では高木がかなりの経験者であることが分かった。時間をかけて一生懸命尽くしてくれたものの、結局南にとって身体も心も弾むことのない儀式だった。終わった時、男とのセックスを好きになることは絶対はないという確信が南の心の中を走った。

大学卒業を控えて、南の前に横たわる選択肢を考えてみた。

二通りの生き方しかない。故郷に帰り見合い結婚をし、家を継ぎ普通の生活を営む。あるいは家族に背を向け、レズとして生きる。どちらを選んでも、幸せに生きるということ

から一生無縁であることが、手に取るように分かる。

暗い気持ちで日々を過ごしていた頃、一条の明かりが差すように目の前を明るくしたのが、シドニーの一大ゲイ・イベントであるマーデイグラの記事だった。

南はいつも、オーストラリアという国に興味を持っていた。太陽がサンサンと輝く明るい国で、人々は大らかでフレンドリーだという単純なイメージをそのまま信じて憧れた。高校時代によく読んだのが外国旅行の体験記だが、アメリカものやヨーロッパものや、あるいは東南アジアものよりも、オーストラリアの旅行記に一番心が躍った。

どの本を読んでも湧いてきた変わらないイメージがある。それはヨーロッパのように重くなく、アメリカのように広大のものでもなく、東南アジアのように混沌とした世界ではない。単純で大きな太い筋が一本走ったような国。その簡潔なイメージが、体質的に南に合ったのだと思う。

だから東京で大学生として生活がスタートすると、よくオーストラリア大使館に立ち寄り、ライブラリーで自由に閲覧できる現地発行の日本語の新聞や雑誌を開いて時間を過ごした。ページを開くと、現地の風が吹くような気がして、南は幸せなひと時を楽しんだ。

南のお気に入りは、発行以来20年以上の歴史を持つ「豪州プレス」という月刊新聞。100ページ立ての雑誌のようにぶ厚い新聞で、オーストラリアのニュースが硬軟取り混ぜてカバーされている。

南がフアイルされたその新聞のバックナンバーをめくっていた時、派手なパレードの写真が添えられたマーデイグラの記事が南の目を止めた。南は魅入られたように、その記事を読み始めた。

シドニーでは毎年2月に、ゲイ&レスビアンの最大のイベントであるマーデイグラが開催される。

今では最大規模の国民的なお祭りであり、期間中は国内はもとより海外からも人を集めて、50万人以上の人間がこのイベントに繰り出す。スタートしたのは1978年だが、最初は今のようなスケールの大きいお祭りではなく、同性愛の権利を主張したシリアスなもので、行進に警察が出頭し暴力沙汰となり逮捕者も多数出た。それが四分の一世紀を経て、多くの市民がエンジョイする一大イベントに変貌を遂げた。

南は、マーデイグラの最終日のパレードにはいろいろな団体が趣向を凝らし参加するが、現在は警察を代表し警察官によるグループも行進するという文章を読みながら、涙をこぼしていた。

最初は異端視されていたものが、長い年月を経て、皆に愛されるものに生まれ変わったのだ。その道のりで、社会の偏見に対する口惜しさや、現在の地位を得るために並々ならぬ苦労があったに違いない。南はそう考え感動した。写真の、紅白の時の小林幸子や美川憲一も真っ青になりそうな、巨大で豪華なドレスに身を包んだドラッグ・クイーンたちは底抜けに明るく楽しそうに見える。

南は記事を読み終えた時、心が軽やかになっていることに気付く。そして、一つの決心をする。シドニーへ行き、このマーデイグラを見るという決心だ。

大学を卒業すると、南は郷里へ帰った。家で花嫁修業のようなものをして、持ち込まれ

る見合いも数件こなす。相手は決まって南を気に入り、婿養子でも構わないという返事が常だったが、南はいつも「今ひとつピンとこない」と気持を述べ、お茶を濁した。

そして10月になり、南は両親に切り出した。独身最後の思い出として、オーストラリアへ行かせて欲しいと。そして帰国後、私も両親も気に入る男性を見つけて結婚しますと。すると、あっけなく許可が下りた。

11月に出発し、翌年2月のマーデイグラ見物を旅のハイライトにし、4月に帰国という約半年の旅だった。

シドニーに着くと、南は手際よく必要なものを決めて行った。住む所は。情報センターの掲示板でめばしいものを数件チェックし、最終的に紀子というワーホリの女性のフラットをシェアすることに決める。紀子のシェアメイトが日本へ帰国したため、その後釜に納まった訳だ。

クラシックな外観を持つ建物も素敵だったが、そこに決めた一番の理由は、バスルームにフルサイズのバスタブがあったこと。お風呂好きの日本人には考えられないことだが、こちらでは意外にもちゃんとしたフラットでさえ、バスルームはシャワーだけというのはザラにある。後で気が付いたが、オージーでなみなみと湯をたたえたバスタブに身体を横たえるという人はあまり居ない。これなら、シャワーだけで済む筈だ。

日々が流れるにつれて、英語学校であるいは紀子を通して、南の交友関係が少しずつ広がって行った。ただし、日本人との交友関係だったが。

真夏のクリスマスと新年を初めて経験した南は、年が明けてあることを実行する。出会い系サイトを通じて、オーストラリアのレズビアンと出会うことだ。

レズの出会い系サイトに登録すると、すぐメッセージが届いた。

会う場所と時間を決めてのブラインドデートに、いつも期待と不安を抱えて出掛けたが、何度かその種のデートを重ねた後南が実感したのは、いい出会いというものはなかなか無いという現実だった。別に愛する人を求めている訳ではない。レズとしてセックスを経験するのが目的だったが、その気にさせてくれる出会いはなかった。

ジェニファーとベッドインしてしまったのは、彼女が最後に会った女性だったから。南は、もうこういうことはこれを最後にしようと思われ、ジェニファーとの待合場所に出掛けたのだった。

肥満気味の身体を黒いジーンズに押し込み、刈り上げたショートのは髪はいかにもといった感じだったが、ジェニファーがこれまで会った女性と違っていたことは、ユーモアのセンスがあることだった。

それに好感を持った南は、彼女が望むならイエスと言ってもいいかな、でないと一生「その事」を知らずに人生を終えてしまうかもしれないと、頭の中で計算していた。果たして、南はジェニファーに誘われ彼女のフラットへついて行き、初体験の時間を持った。ジェニファーの執拗な愛撫に、多分南は何度も声を上げたに違いない。

ジェニファーに抱かれながら、南は高木のごつごつとした硬い身体を思い出していた。

あの岩のような身体に比べて、ジェニファアの身体は丸みを帯びて何と温かいのだろう。南はジェニファアに夢中でしがみついていた。

セックスだけの関係はすぐ飽きがくると分かったのは、週末は決まってジェニファアのと過ごすという習慣が1ヶ月以上も続いた頃だ。

女同士のセックスがこれ程バラエティに富んでいたのかと、目を見開かせる思いがしたが、一通り経験するともう十分という気がした。セックスは愛が伴わなければ意味がないと、南は思うようになった。愛という言葉が抽象的過ぎるなら、心がときめく人と置き換えてもいい。といって、ジェニファアとの関わりを後悔はしていない。激しい快樂オンリーの時間を経験して、南が本当に欲するものが理解できたから。

そうなるジェニファアに会うことが億劫なものとなり、電話がかかってきてもあれこれと理由を並べて、週末に会うことを出来るだけ回避した。

マルディグラはもうすぐ開催される。最初の計画通り、マルディグラを見て日本へ帰ろう。シドニーで一番インパクトがあった経験がジェニファアとのセックスというのは、少しチープな感じがしないでもないが、何もないよりはましだと南は自分に納得させた。

パレードの先陣を切るダイクス・オン・バイクス（オートバイに乗ったレズビアンたちが）がスタートした。南が最も期待していた出し物は、恒例のようにパレードのオープニングを飾る。全身を黒いレザーで身を固めた女性たちが、数十台の黒いバイクに乗りエンジンをふかし、颯爽と見物人の目の前を疾走する。一人でバイクにまたがる者も居るが、カップルで疾走するのが断然多い。男っぽいレズも勿論居るが、大多数は足も長くスタイルが良くカッコウいい。中でも金髪のカップルは、まるで映画を見ているような感じで決まっていた。

南は彼女たち一団が、一陣の風のように大きな音を残して去った後、心に爽快な風が吹いていた。まるで自分がバイクのハンドルを握って走っているような爽快感。

「アナタワ、ニホンノヒトデスカ?」。隣で見物していた女性に、突然たどたどしい日本語で話しかけられ、南は驚く。これまで見物に夢中で周囲に目が行かなかった。笑顔を浮かべた優しそうな女性が、南を見つめていた。若くはない。多分30才を少し過ぎたぐらいだろう。「ええ、日本人です」と、南は日本語で応じていた。それがゲイルとの出会いだった。

品があり人柄の良さそうな印象に、南は警戒心を持たず一緒にパレードを楽しむことになった。パレードが終了したのは深夜に近い。別れ際お互いの携帯の番号を交換し、近いうちに又会いましょうと約束した。

それから毎日、南はゲイルからの電話を心待ちするようになっていくことに気付く、当然とする。誰かが電話を心待ちするようになれば、それはもう恋だと言っていたが、ゲイルに恋しているのだろうか。南は自問した。それは甘味な自問だった。南から電話をかけることもできたが、最初の電話は向こうからかけてきて欲しいと南は思う。

待望の電話は、出会いから4日目にかかってきた。フレンドリーなトーンで、ゲイルは

南を映画に誘った。電話が終わり携帯を置いた南は、心臓の鼓動を確認した。

ウィークデーが終わる金曜日、ゲイルが秘書として勤めるオフィスのあるビルの入り口で待っていると、約束通り6時きっかりにゲイルが片手を上げて出てきた。ホテルのコーヒーストップで簡単な食事を済ませ、映画館に向かう。

南に一つの期待はあったが、ゲイルがこちらの人間なのかどうか確信はない。単に日本人に興味があり、友達になりたいだけなのかも知れない。が、南の心配は取り越し苦労に終わった。映画を見ながら、ゲイルは南の手をやさしく握り締めたから。南は躊躇なく、ゲイルの暖かく柔らかい手を強く握り返した。その時から二人は恋人同士になった。

毎日会い、ゲイルのアパートに泊まる夜が多くなる。そして、南は早苗のリッチなマンションにただで住めるという幸運に浴し、ゲイルが週末はいつもそこに泊まることになった。

そんな頃だった。もうすっかり忘れてしまっていたジェニファアの奇襲を受けたのは。いったい何故、ジェニファアがこのドレスを知ったのだろうと疑問に思ったが、前のアパートのシェアメイトだった紀子に、私宛のレターが来たらここへ転送してほしいと、アドレスを教えていたことを思い出した。

「私はゲイルを愛しているの」

南の口から出た言葉に、南自身が驚く。こんな言葉を口に出れる日が来るとは。

さつきから心配そうに見守っていたゲイルの顔が、瞬時輝く。

「ジェニファアとの時間はとても楽しかったわ。でも今はゲイルを愛しているの」

南は落ち着いた口調でそう告げる。突然愛という言葉が出て拍子抜けしたのか、ジェニファアは苦笑し、大げさに両手を開くと首をひねった。

「オーケイ。南がそう感じてるのなら」

意外にもあっさり引こうとするジェニファアに気付き、もう少しドラマがあってもいいのではと焦る。

例えば、「ミナミを愛してるんだよ。そんなに簡単に諦めることはできない」という台詞とか、怒りに任せた平手打ちなどがあればもっとドラマチックになるに違いない。そんな南の思いをよそに、ジェニファアの肥満体があっけなく部屋の外へ消えた。

ゲイルにやさしく肩を抱かれていた。

「サンキュー。ミナミ。私もあなたを愛しているわ」

ゲイルの言葉が心地良く南の耳に響いた。

「ミナミの両親は、ミナミのことを知っているの？」

「レズビアンだということ？」

「イエス」

「とんでもない。日本では、特に私の実家がある田舎では、カミングアウトすることは不可能だし、もし両親に告げれば、彼らはただ悲しむだけだわ。ゲイルは？」

ゲイルはイギリスからの移民者だ。

「私は大学生の時にカミングアウトしたので、両親、兄弟、友達は皆知っているわ。ただ父と母は古風なタイプの人間なので、表面的には理解してくれたけど、多分失望したと思う。理解するのと賛同するのでは、大きな違いがあるわ。兄弟が居るんだけど、女の子は私一人だったので、母が特に失望したと思う。娘の孫を抱くことが不可能だと分かった時、彼女はとても悲しんだと思う。勿論そんなことはおくびにもださないけど、私にはよく分かるの。だからという訳でもないんだけど、そういうしがらみを断ち切りたいと思ってオーストラリアへ移民を決めたの」

ゲイルはそう言って赤ワインを一気に飲み干した。

ゲイルと食事を取るクラブ「ルビー」は、シドニー唯一のレズビアンクラブ。レズの女性たちの溜まり場であるダンスクラブだが、食事もできるようになっている。そこで働いている人間もウーマンオンリーで、女だけの館だ。

多くはいかにもという感じの女たちだが、一人や二人、まるでファッション・マガジンからぬけだしてきたようなモデルまがいの美しい女性もたまに混じっている。

「ミナミは、オーストラリアで永住する気持ちがあるのかしら」

ゲイルがやさしく問いかける。

「アイ・ラブ・ユー」と公言して以来、二人の会話がこれまでよりも突っ込んだものになった。将来の計画が婉曲的に会話に上る。

「分からないわ」

南の実感だ。マルデイグラを見た後、日本へ帰る予定だったが、もう3ヶ月オーバーしている。両親にはシドニーがとても気に入ったので、もう少し長居をしますと連絡している。ワーホリのビザだと後3ヶ月延長できるのだが・・・。

「あわてなくていいわ。ゆっくり時間をかけてミナミにとってベストの決心をすればいいのだから」

テーブルの傍を通る女たちは、多くがゲイルと南を見て目を見張る。ナイスカップルが居るといふ賞賛の目つきだ。南は誇らしい気持ちになる。ゲイルは、南の切れ長の目をミステリアスでセクシーというが、南はゲイルの大きな二重のブルーの瞳が羨ましい。冷たいブルーではなく暖かさの溢れたブルー。多分ゲイルの人柄がそう感じさせるのだと南は思う。

愛する人となら、ただ抱き合っているだけで十分だ。南はベッドの上でゲイルにぴったりと密着し、つくづくそう思う。愛し愛されている確信があれば、この世で欲しいものは何もない。

すべての女がそうだとは思わないが、南は愛がなければセックスにはもう興味を示さないだろうと予感する。こんな崇高な気持を味わうことは、奇跡に近い。

微かな寝息をたて安らかな夢路の中に居るゲイルの傍で、これからのことを考えてみた。南の前に、今は大きな違った選択肢が開けている。このままゲイルと一緒にシドニーで暮らすという未来図だ。

驚いたことに、オーストラリアでは同性愛のカップルが法的に認められている。南はゲ

イルと同棲すれば、将来同棲ビザというカテゴリーで永住権を取ることが可能なのだ。ゲイルはつきりと口にはしないが、時々南とこのままずっと一緒に居たいことを切望するニュアンスを匂わす。早苗のフラットが月末でリースが切れた後、ゲイルのアパートに同居することが決まっただけなのだが……。

南は日本に居る両親のことを思い浮かべる。父母を捨てゲイルとシドニーで永住することには、やはり実感が湧かない。とすれば、ゲイルとの生活はワーホリの思い出となるように、運命付けられているものだろうか。そう考えても、南は少しも失望しなかった。異性愛にしろ同性愛にしろ、一体この世の中で、愛し愛されたという幸運な経験を持つ人間がどのぐらい居るのだろうか。

南はそれを手にした。そう実感できる。

この愛が永遠に続くものかどうか、南には分からない。かえって一番美しい時間を楽しんでる時に、さよならをするのが賢明なのかも知れない。

とにかく、南は結局日本へ帰ることになっても、ゲイルとの思い出があれば生きて行けると思う。愛し愛された人間は、その思い出だけで、どんな環境でも幸せに生きられる筈だ。

それは南にしみじみとした充足を与え、満ち足りた気分ですごすの間にか眠りに落ちていた。

土曜日の朝は、ゲイルにとって普段とは違い、怠け者の朝となる。

早苗は働いていないが、ゲイルは月曜から金曜までのオフィスワーカーなので、いつも昼近くになって、寝ぼけた目をして、よろよろとベッドからと起き出すのが常だ。

早苗は素早くゲイルのために、コーヒを用意する。

シャワーを浴びたゲイルと一緒にブランチを取るため、オックスフォード・ストリートへ繰り出す。

このストリートは、シティとボンダイ・ジャンクションをつなぐ長い大きな通りだが、ゲイが多く住むと言われているダーリングハーストのエリアを通るところは、別名ゲイ・ストリートと呼ばれ、真昼間からゲイのカップルが堂々と手をつないで歩く光景は珍しくない。

早苗のマンションがダーリングハーストにあつたため、ウィークエンドのブランチは、その通りにあるコーヒショップで取るのが習慣になつていた。

南はゲイルと手をつないで、ゲイ・ストリートを歩く。

3月は暦の上ではもう秋だが、陽射しはまだまだ強烈で夏が居座っている。南は、向こうからオリエンタルの女性が歩いてくるのに気付く。近付くにつれ、かなりの美人であることが分かった。セミロングの黒髪が艶を帯びて光っている。かつてのブルック・シールズのようにきちんと揃えてはいるが、黒い太い眉毛のためか気が強そうだ。だが、華のある綺麗な子だ。

すれ違いに南と目を合わせたその女性は、小さい声で「こんにちは」と南に会釈した。南も自然に「こんにちは」と言葉が出た。

ゲイルが「知ってる子？」と、南の目を覗き込む。「ノー」と返事をしながら、南は幸

せな気分になっていた。

これまで数回こういうシチュエーションがあったが、決まって日本人は同性と手をつないで歩く南を奇異の目で見た。さっきの女性の目には、何の偏見もなかった。そのことが南は嬉しかった。

#### 褐色の肌をしたボーイフレンド

知子は陽射しを避けようと、木陰を求めた。シドニーは3月から秋に向かうと聞いていたが、真夏のような熱気が身体中にまといつく。ハイドパークの木陰にあるベンチに腰掛け、バッグからハンカチを取り出し、にじみ出す汗を押さえる。

週末の公園は人の数も少なく静かで、向こうでスケートボードで遊ぶ子供たちの歓声が時々聞こえるぐらいだ。

シドニーでの生活も、すでに6ヶ月が過ぎた。「島流し」というカタチで姉の住むシドニーへ送られた訳だが、まったく期待しなかっただけに、シドニーを好きになったことは意外な贈り物という気がした。

好きになった一番の理由は、人々が他人の思惑などこれっぽっちも気にせず、自由に生きていることだ。少なくとも、知子にはそう見える。それは多分個人主義と呼ばれるもののなだろう。

さつきオックスフォード・ストリートですれ違ったあの日本女性にも、それが当てはまる。多分レズビアンのカップルなんだろう。レズの世界は、知子にとってまるで分からない未知の世界だが、不快感はなかった。むしろ二人とも自然体でいい感じがした。それは、あの日本女性もパートナーの女性も、シドニーの街で自由に生きてからに違いない。

知子は涼気を得るとベンチから立ち上がり、すぐ近くにあるクイーン・ビクトリア・ビルディング（通称QVB）をのぞくことにした。

そこは古式豊かな5階建てのアンティークの建物を復旧させ、ショッピング・ビルに変わらせた名物の場所。ブランド・ショップから高級チョコ・ショップまで、あるいはコーヒーショップからレストランまでさまざまなショップが入って、退屈しない。

QVBに向かって歩きながら、シドニーは歩くのに適した街だと知子はつくづく思う。海が手に届くところにあることとコスモポリタンの雰囲気は、以前ツアーで行ったことのあるサンフランシスコによく似た街という印象を最初持ったが、坂道の多いシスコと違い、平坦な地形は散歩に最適だ。心を圧迫するような高層ビルが林立する訳でもない。勿論田舎町でもない。必要なものがコンパクトに詰ったサイズの手頃な街。それがシドニーと知子は思う。そしてそんな街を何も考えずにブラブラ散策する時、知子の心は和んだ。

シドニーの街は休日は閑散としているが、QVBだけは別で、ツーリストやローカルの買い物客で混雑していた。一通り見ると、知子はコーヒーショップの外に並べられたテーブルに座り、カプチーノをオーダーした。

カプチーノをすすりながら行き交う人の流れを眺めていると、知子は突然海を見たい衝

動に駆られた。ここから10分も歩けばオペラハウスが立つシドニー湾に出れるが、波が打ち寄せるビーチが見たい。

時計を見ると3時前。まだ時間は十分にある。知子はボンダイ・ビーチへ行くことにした。ビーチまでは、バスで30分程度。東京ではこんな具合にはいかない。ビーチへ行くのは一日仕事だ。こういう衝動にいつも簡単に応えてくれるのも、シドニーのいい所だ。

思っていた通り、ビーチは人でごった返していた。ボンダイ・ビーチは観光ルートにもなっているように、シドニーで一番人気のあるビーチ。だが人の群れで過密状態という程でもない。

知子はビーチを避け、ビーチに設けられたプロムナードを散策する。そこで柵に身体を預けて、ビーチを一望する。ビーチに寝そべる人を目がけて、白い波が打ち寄せる。ずっと遠くの沖まで、青い海面が広がっている。その向こうは南極なんだと思った時、知子は初めて南半球に居ることを実感した。

すっかり心が洗われた気分、シテイ行きバスを停留所のベンチに座って待った。今夜のディナーは、あのチャイニーズ・レストランだとぼんやり考える。

知子が居候している姉一家は、日曜日のディナーはレストランに繰り出すのが習慣になっている。チャイニーズ、イタリアン、ジャパニーズのレストランを順番に回る。

どうしてそういう習慣になったのか、知子は知らない。多分、日曜ぐらい姉をおさんどんから解放させてやろうという、義兄の思いやりからきているのに違いないと知子は推測する。

シドニーで姉家族と生活するようになり、知子が気付いた一番大きなものは、姉に対する義兄のやさしさだ。いい結婚をしたんだという感慨を知子に与えた。

先ほど知子を凝視して去った二人組みのサーファーが戻ってきた。「ハイイ。どこ行きのバスを待ってるの」と、背の高い方が聞く。「シテイ」「じゃ車があるからシテイまで送って行くよ。日曜日は、なかなかバスは来ないよ」「サンキュー。バット、ノー・サンキュー」。やれやれナンパなのと、知子は思う。「どこから来たの」「私の国。それとも住んでる所」「両方」「日本人でモスマンに住んでるわ」「じゃ車でモスマンまで送るよ」「結構よ」「車で送るからその辺でお茶でも飲まない」「ごめんさい。そんな気は全然ないわ」。かなりしつこいが、どうってことはない。バスが来るまで会話ぐらいは付き合っただけという気持ちだ。いざという時は一喝してやろうという戦闘的な気持が起こる。「お茶がダメなら、車で送らせてよ」「ノー・サンキュー」その時だ。「アー・ユー・オーライト？」と一人の男が割って入ってきた。

その褐色の肌をした青年はサーファーたちに向かい毅然とした態度で、「さあ、行って行って」と促す。上背のあるガッチリした体格の青年を前に、サーファーたちはおとなくし引き下がった。

多分右も左も分からないジャパニーズ・ガールが、サーファーたちからまわっていると思ったのだろう。余計なお世話とは思わないが、そんなにドラマチックなものじゃないわと言いたい気もする。でも一応お礼はと思っているところにバスが到着した。「サンキュー」そう言っバスに乗り込こもうとする知子に、「僕もこのバスなんだ」と、その青年が従った。

当然のように知子の傍に座って自己紹介した青年の名前はロイ。取り留めない会話を

しながら、知子はロイがかなり魅力的な青年であることに気付く。大きなガラス玉のように光る瞳。まるで歯磨きのコマージュナルに出てくるような歯並びのいい真っ白い大きな歯。漆黒のカーリーヘア。

だからシテイと一緒にバスを降りた際、時間的な余裕もあったので、ロイからお茶を誘われると、「30分ぐらいなら」という前提で応じた。

コーヒーショップで、ロイはオーストラリアの先住民であるアボリジニの血が八分の一混じっていることを、誇らしげに語った。シドニー大学の3年生。そして、「ロスト・ジェネレーション(LOST GENERATION)」運動のボランティア・ワークをしていると説明した。

「ロスト・ジェネレーション」の意味が分からず説明を求めたが、十分に理解できない。辛うじて分かったことは、白人がこの国に定着し始めて頃、福祉という名の下、アボリジニの子供たちを強制的に家族から隔離し施設に収容したが、現在成人したその子供たちから、政府の行為は非人道的なものとして「失われた世代」に謝罪を求める運動らしい。

知子は何の屈託もなく喋るロイを見ながら、何とチャームिंगな話し方をするんだろうと感心した。外見が美しい人はゴマンと居る。が、物を食べる時もそうだが、話す時も美しいと思わせる人はそう居ない。

ロイは自分の説明が終わると、知子に質問の矛先を向けた。

知子は、姉家族と一緒に住んでいること、ワーキング・ホリデーのビザで来ているので、1年間滞在出来ること、日本では金融系の会社に勤めていたことなどを、そこそこの英語で説明した。

ただ、「何故オーストラリアへ来たの?」という質問には、正直に答えることが出来なかった。上司との不倫騒動で動転した両親によって、ほとぼりが冷めるまでという理由でシドニーに住む姉一家へ送り込まれたなんて言える訳がない。「一種のサブタイカルかしら」と、無難に答えていた。

知子は30分が過ぎたことを知って切り出す。「コーヒーをありがとう。とても楽しかったわ。英会話の勉強にもなったし」ロイは不意打ちをくらったかのような表情を見せたが、すぐとびつきりの笑顔で、「僕の方こそ、トモコと話が出来てとてもハッピーだった」と握手を求めた。それから真面目な顔をする、「またトモコと会うことは可能かな」と聞く。「携帯の番号を貰うことは可能かな」と照れる。知子はロイの仕草を可愛いと思いつつも、毅然とした態度を取る。「ごめんなさい。ロイは素敵な人だけど、初対面の男性に自分の電話番号をあげるのはいわ。でも、もしロイがいいのなら、電話番号を頂くわ」「電話くれる」「ええ」ロイはウエイターからメモ用紙とペンを借りると、彼の携帯番号をいねいに書き知子に手渡した。

「ジャパニーズ・ガールはとてもシャイだと聞いてたけど、トモコはハッキリした性格なんだ」「そういうのは嫌い?」「大好きだよ」そう言うと、ロイはまた大きな白い歯を見せて笑った。

知子が上司である佐々木と不倫関係になったきっかけは、覚えていない。金融関係ではトップ5に入る会社の国際部の部長をしていた佐々木は、40を過ぎていたが、今風の成

功者の常で若々しくカジュアルな雰囲気があった。大学卒業後、その金融会社に入社した知子は2年後のスタッフ編成で国際部に回され、佐々木に出会う。

勿論お互いに好意を持っていたのは間違いない。だが、不倫という門戸を開けたのは佐々木の筈だ。何故なら、いくら好感を持っていても妻子持ちの男性に積極的に向かうことは、知子の趣味ではない。丁度付き合っていた男性との関係が終わったばかりという知子側の事情も、不倫の後押しとなった。

不倫を不倫のまま納めておけば何の問題もなかった。ところが佐々木が本気になったため、一悶着が起きてしまった。知子の知らないところで佐々木が妻に離婚話を切り出したため、激情した妻が、知子の家へ子供連れで乗り込んできたのだ。両親にしてみれば、青天のへきれきというものだったに違いない。

結局知子は会社を辞める羽目になり、ほとぼりが冷めるまでという名目で、シドニーに住む姉の涼子の下へ送り込まれた次第だ。

知子は佐々木との結婚を望んだ訳でもなく、この不倫ドラマでは職まで失った被害者。おまけに両親に知られたこととうざったいことをしてくれたなとうんざりしたが、佐々木を恨む気持はなかった。

だから最後の挨拶をと思い、成田から佐々木の携帯に電話を入れたが、「現在この電話番号は使われておりません」という録音メッセージが耳に響き、逆に佐々木からの正式な決別を感じ取った。悲しいという気はしなかった。証拠に、飛行機が滑走路を走り始めると、もう26にもなってしまう。この辺で海外生活するのもいい気分転換になるかもしれないという、呑気な気持が膨れ上がってきた。

「ともちゃん。皆さん飲み物を切らさないかどうか見てちょうだい。白ワインは冷蔵庫から、赤はラックから取りデカンタに移してから、テーブルに持って行くのよ」

キッチンで姉の涼子はきびきびと仕切る。

「それから今から1時間後ぐらいに、健一の部屋をちょっと覗いてね。あの子いつも掛け布団をベッドから落とすので、掛け直してやって」

10才年上の涼子に、知子はまったく頭が上がらない。有名大学を出て一流会社に勤め、大手企業に勤める優秀な男性と結婚し海外で生活している涼子は、姉というより仰ぎ見る年上の女性という像を、知子の中に植えつけた。そして今回の不祥事が、それに輪をかけた。年齢が一回り違うことも理由の一つかもしれないが、姉としての親近感はなく、涼子の存在は知子にとって威厳のようなものに近い。

クールな美貌のお姉さんとよく言われ、一見冷たい印象を与えるが、だからと言って涼子が冷たい人間だという訳ではない。むしろその逆で、不倫事件には一切触れず、「シドニーでゆっくり休養して、また再スタートすればいいのよ。ともちゃんはまだ若いのだから」とか、「オージーのボーイフレンドでも作って気晴らしをすれば」と、声をかけてくれる。が、姉に甘えるような気持は昔から起きない。

ダイニングルームから、弾けたような笑い声が上がった。義兄は、時々会社のスタッフを親睦を兼ねて、今夜のように夕食に呼ぶ。

テーブルを囲んでいるのは、ジョナサン、ティム、マギー、多恵子。ジョナサンとマギ

ーは40後半のベテラン。タイムは30に鳴ったばかりの青年。多恵子はワーホリなので20代の筈だが、もつと年上に見える。女性から見ても目のやり場に困るほどの豊満な胸の持ち主で、グラマーな姿態は熟女のもの。

知子は白ワインを持ってテーブルを回る。この夕食会は義兄のスタッフの親睦のためなので、一応皆んなにお酌をした後は、知子は引き下がる。健一と一緒に早目の夕食を終えていた。

シドニーは、夏の6時、7時はまだ明るい。知子は読みかけの村上春樹の「1Q84」を持ってプールサイドに出て、デュッキチェアに座りその本を読むことにした。別に大金持ちでなくても、プールのある家というのは珍しくない。

「トモコ」と呼ばれて見上げると、タイムが立っていた。

「何を読んでいるの」

「村上春樹の『1Q84』という小説よ」

「オー。ハルキムラカミ。彼の小説を読んでみたいと思ってるんだ。どんな小説なの」

そう聞かれて、答えに詰まった。村上春樹の小説は、一言では説明できない。

「うーん、説明するのは難しいわ。月がふたつある世界に、のることができなければ、多分読破できないと思う。C B Dにある紀伊国屋で、英語版が平積みになってたわ。あそこで買えるわよ」

「グッド。是非行って買ってこよう」

「タイム、こんなところに居てたの。皆さん、タイムはどこへ行ったんだろうって、心配してますよ」

突然、涼子が姿を見せた。

「ソーリー。トモコとハルキムラカミの話に夢中になってしまった」

二人は家の中へ戻った。

姉の住む家は社宅だが、典型的な歴史的な建築方式のテラスハウス。テラスハウスの内部はどの家も申し合わせたように、レイアウトが同じだ。階下に広々としたラウンジとキッチンがあり、2階に3室もしくは4室のベッドルームと、トイレと浴室を兼ねた広いバスルームがある。それにロマンチックな暖炉が付いているのが特徴だ。

涼子から言われていた時間から40分ほど遅れてしまったが、健一の寝相をチェックするため、音をたてないようにして健一の部屋に入る。

健一は掛け布団をベッドから落とさず、行儀良く就寝中だった。シドニーの日本学校に通う健一は小学3年生だが、まだ2年程度のシドニー生活で、英語の発音が完璧なのに知子は舌を巻く。子供が現地で外国語をマスターするのはあつという間だとよく言われるが、本当にその通りだ。

知子が部屋から出ようとした時だ。健一の部屋から少し離れたところにあるメインのバスルーム辺りから、低いトーンだが慌しい感じの英語の会話が聞こえてくる。

知子はドアを少し開け様子を窺う。知子の目に飛び込んできたものは、涼子とタイムがバスルームの前でキスする場面だった。タイムの茶色の髪に涼子の白い指が絡む。

知子の心臓がドキドキと音を立て、身体の体温が一気に上がった。

「エー、トモコなの？ワーオ、ビッグサプライズ！」

ロイの弾んだ声が気持ち良く耳に響く。

「電話を貰えるとは思わなかった。トモコと会って以来もう一ヶ月が経っているから、ギブアップしていたんだ」

「ごめんなさい。忙しい日が続いていたので」

あれから一ヶ月が経っていたなんて！知子は、涼子とタイムの現場を見た後、何故か急にロイに会いたくなり電話を入れたのだった。土曜日の午後、州立美術館の前で会うことにした。

一ヶ月ぶりのロイは相変わらず引き込まれるような笑顔を見せて、知子との再会を喜ぶ。シドニーの輝く太陽のような笑顔。知子の中で、ロイにする強い好意がくつきりと芽生えた。

美術館の目の前にあるボタニカルガーデンへ入る。ロイは自然に知子の手をつなぐ。ロイの暖かさが伝わってくるようで、知子の心が和んだ。同時に、知子の良心がちよっぴりうづく。久しぶりに会えて嬉しい気持ちにウソはないが、電話をしたのは、純粋に会いたかったからではなく、動揺した心の反動だったからだ。

藤棚の下のベンチに腰を下ろすと、ロイは「ジャスト・ウェイト」と言い姿を消すと、すぐアイスクリームを二つ手にして戻ってきた。

「エブリシング・イズ・オーケー？」と覗き込むロイの優しい目に誘発されて、一瞬、姉の不倫現場を目撃して以来心にわだかまっているものをぶちまけたい気持ちになるが、「イエス・オーケー」と、知子はスマイルで返す。

アイスクリームをなめながら、取り留めのない会話を交わし、気が付くと5時を過ぎていく。もうそろそろ帰らなければならない。「ロイ、今日は久しぶりに会えて、とても楽しかった。もう帰る時間が来ちゃった」「オーケー。次はいつ会えるの？」。知子は、次の日曜日に同じ時間に同じ場所だと約束した。

(ロイは整頓魔なんだ)。アパートに一步足を踏み入れて、知子はそう思った。こちらではスタジオアパートと呼ばれている1LDKで、ベッド、ちよっとした応接セット、机などが、きちんとレイアウトされている。本棚や机の上の本が几帳面に一糸乱れずという感じで並んでいる。

サリーヒルズと呼ばれるこの地域は、アボリジニが多く住む場所で、時々暴動も起き、決して安全な場所ではない。アパートの壁も壁一面に、例のグラフィティが書きなぐられている。が、ロイの部屋はまるで別世界のように違っていた。勤勉と質素がブレンドされた清冽なエネルギーを感じる部屋。彼は、この部屋で弁護士になるため頑張っているのだ。奨学金とアルバイトで学費、生活費をまかなっている。これまでの人生で、このような「勤勉青年」と知り合う機会がなかったので、知子は大きな好奇心を持って部屋をじろじろと観察した。「こんな小さい部屋だから、トモコが一生懸命見回っても何も出てこないよ」と、ロイからジョークが飛んだ。

それと、ロイはグッド・クックでもあった。手料理のランチに招待され、初めて彼のアパートを訪れたのだ。小さなテーブルでロイが作ったチキンパイを口にし、知子は「おいしい」と、声を上げ、すぐ「デリシャス」と英語に直した。

大学の話や、ロスト・ジェネレーション運動の話を知っているとあつという間に時間は過ぎ、帰宅の時間が来た。モスマンへ帰るためにはサーキュラーキーからフェリーに乗る。アパートを出て、二人でサーキュラーキーへ向かう。途中にあった公園の大きなユーカリの木の下で、知子は初めてロイとキスを交わした。

壁時計を見上げると、午後6時50分。知子は、約束の7時にドアのベルが鳴ることを知っている。

ロイと付き合うようになって一番驚いたことは、時間厳守なこと。デートの待ち合わせに遅れたことがない。屈託がないように見えて、神経質などころがあるのかも知れない。

ロイとのデートが重なる時、ロイは一度自己紹介のためにも、涼子一家を訪問したいと口にした。同様に、涼子も一度ボーイフレンドを家へ招待しなさいと知子に勧めたため、今夜のディナーの招待という運びになった。

7時。玄関のベルが鳴る。知子は玄関の踊り場にある大きな鏡で身なりをチェックした後、ドアを開けた。数十本の赤いバラの花を抱えたロイが立っている。ちつぱり緊張感を浮かべながら。

バラの花は知子のためではない。二人で相談し、ディナーの手土産として、涼子の好きな赤いバラの花を涼子にプレゼントすることに決めた。

知子はロイから頬に軽いキスを受けた後、彼の手を取りラウンジに導いた。そこで、義兄と健一が握手をしロイを迎えた。キッチンに居た涼子が、挨拶をするためラウンジに出てきてロイの姿を認めた。その瞬間涼子の顔が凍りついたのを、知子は見逃さなかった。

涼子は如才なくディナーのホステス役をこなしたが、食事中知子の頭を離れなかったものは、何故姉の顔色があのように変わったのかということだ。

ロイも状況を察していた。ディナーがお開きとなり、知子は表通りまでロイを見送るため一緒に歩いたが、「トモコのお姉さんは、アポリジニを見たことがないのかな」と、呟いた。

「ともちゃん、ロイが黒い人だとは全然言ってくれなかったじゃない。私はてっきりオーストラリア人だとばかり思ってたのよ」

「ロイは、オーストラリア人よ」

「ううん、白人の男性という意味よ」

知子の身体を疲労と無気力が覆う。

皆が寝静まった後話がしたいと言われ、ラウンジのソファに座った知子への開口一番の言葉がこれだった。

「シドニーの日本社会は、小さくてとても閉鎖的のところなの。佐々木の義妹が黒い人と付き合っているなんて噂が立てば、とんでもないことになるわ」

何とつまらない女になってしまったのだろうか、姉は。

「別にシリアスな付き合いじゃないし。単なる友達よ」

「あのね。ここでは皆さんとても退屈しているの。だから単なる友達だともちゃんは思っている、一緒に歩いているのを見られただけで、根も葉もない噂で持ちつきりになるのよ」

知子は黙って聞き役に徹するつもりでいたが、次第に腹立たしくなった。

「何故黒い人はダメなの。第一ロイは黒人じゃないわ。アポリジニの血が八分の一混じってるだけだわ」

知子は何とくだらない会話なんだろうと思いつつも、言い返さずにはいらなかった。「八分の一だろうと十六分の一だろうと、黒い人は黒い人。ダメって言うのじゃなくて、私たちとは住む世界が違うわ。ともちゃんも子供じゃないんだから、そういうことは賢く判断しなきゃ」

この女の心に、一匹の毒虫が住んでいる。人種差別という毒虫が。

「日本の父や母にあれほど心配をかけたのだから、ともちゃんはシドニーで自重しなければならぬわ」

日本での不倫騒動のことを、涼子は始めて口にした。母親から不倫騒動について一部始終聞かされていた筈なのに、涼子はこれまで一切それに触れなかった。そのことを知子は心から感謝したが、当たり前だ。不倫女が不倫女に説教できる訳がない。

知子の口が勝手に動いた。

「不倫はいいの？」

知子の言葉に、涼子は怪訝な顔をする。黒い人と友達になることはダメだが、日本での不倫はいいのと聞いていると勘違いしたような顔。

「タイムとお姉さんの不倫よ」

知子の口が意地悪な言葉を吐き出した。

「お姉さんとタイムがキスするのを見たわ」

涼子は驚きで目を見張り、血の気を失った白い顔をして茫然とした。

我に返った涼子は、ソファから立ち上がるとラウンジを出て階段を上って行った。2階の気配を確かめるためだろう。

ラウンジに戻りドアを閉めソファに再び座った涼子は、平静な表情を取り戻していた。

「何を言っても言い訳になるわね。ともちゃんがどういう理由で不倫に走ったのか、知らない。私はね、一家でシドニーに移ってきて1年が経った頃だったわ。何だか何もかも空しくなってしまったの。私の人生って一体何だろうとよく自問していた。海外赴任のエリート・サラリーマンの妻といっても、要は夫と子供の世話をするおさんじゃない。それに30後半に入った女としての焦りのようなものもあったと思う。そんな時、ブロンドのハンサムな、それも年下の男から愛を囁かれたら……。目の前がパッと明るくなったような気がしたわ」

不倫する人妻の誰もが口にする言い訳を聞きながら、知子は思っていた。不倫なんてどうでもいい。許せないのは、涼子の心に巣食う人種差別なのだ。

涼子にそれだけは言いたくない。衝動に駆られたが、知子の口は貝のように閉ざされたままもう何も出てこない。気まづい沈黙が続いた。

それを打ち破ったのは知子だ。「もうロイとは会わないわ。それから心配しないで。お姉さんのこと、誰にも言わないから」という言葉で。

褐色の汗ばんだ筋肉質の身体を抱きしめながら、知子は何と美しい男の身体なんだろうと感心する。ロイをホテルに誘ったのは知子の方だ。

姉との深夜の会話から数週間経った頃、知子の日本への帰国が決まった。姉が日本の母とどんな話をしたのか知らないし、興味もない。涼子から、「お母さんが、お父さんだけの生活は寂しいとぐちってたわ。ともちゃんもこの辺で日本へ帰った方がいいかも知れない。将来のこともあるし」と告げられた時、黙って首を縦に振っていた。

日本へ帰る前にしなければならぬことがある。ロイとのセックス。

男の抱き方で女は愛情を読める。ロイの熱く優しい愛撫を受けながら、知子はふとロイに愛されているのかもしれないと思う。それは、日本へ帰ることを告げた時ロイの泣きべそをかいたような表情と重なり、知子に甘酸っぱい気持を与える。ロイを愛しているのだろうか、知子は自問してみる。分からないというのが本音だ。ロイと寝ているのは、涼子へのリベンジだったから。

空港へ向かう途中、涼子は何も言わない。

空港で車から落として貰いそれでさよならと思っていたが、税関の所まで付いて来て見送ってくれた。

「お父さんやお母さんによく伝えて。多分来年のお正月には休暇を取って帰れると思う。ともちゃんも日本で頑張ってるね」と別れの言葉を告げ、小さく笑ってみせた。

知子も肯きながら、笑い顔を返した。姉に対する怒りはもうない。古風な言い方だが、同じ血を受け継ぎながら、「涼子」にならなくて良かった。そう思うだけだ。

知子は搭乗口近くにあるカフェテリアに入り、コーヒーを求め窓際のテーブルに座った。どこまでも楽天的な雲一つない青空と、太陽の黄金色の光が溢れる窗外。知子は、オーストラリアはこんなシーンのように、すべてが万遍に照らされそして輝く国だと思っていた。だがここにも光と影がある。それを身内の人間を通して知るといふ皮肉。

だからと言って気落ちはしない。ロイのような心身ともに美しい男をプレゼントしてくれた国だもの。そのロイと完全に終わった訳ではない。日本でその気になれば、貰ったメールのアドレスへメッセージを送ればいつでもコンタクトが取れる。やっぱりオーストラリアへ来て良かった。知子はそう肯いた。

#### ドメスティック・バイオレンス

多恵子はコーナーのスシ・ショップでアバカドとツナのロールとミネラル・ウォーター求め、近くの教会へ向かった。

教会の広場にはベンチがあちこちに置かれ、それらは大概大きな木の下にあったため涼しげな木陰を作り、太陽を避けて戸外でランチを取るための絶好の場所になっていた。

空いているベンチに腰かけ、スシロールをほおぼる。

何故だか分からないが、シドニーはスシブームで、雨後の筍のように、いたるところにテイクアウトエイ、お持ち帰りのスシショップがある。経営者はチャイニーズあるいはコリアンだそうだが、味は美味しくもなければ不味くもないというレベル。

もともと日本の寿司職人からは、「こんなのが寿司と言えるか！」と一喝されるのは必至だが、外国で暮らす日本人にとってなら、値段もまあまあ、不味いと文句を言う程でもないというのが本音だと思う。多恵子も一ヶ月に一度位、ランチにこのスシのお世話になる。

先ほどボスの佐々木課長から、「この間は知子がお世話になり、どうもありがとう」と礼を言われ、「いいえ。とんでもありません」と返したものの、尊敬する上司だけにちよっぴり良心が咎める。

課長は当然知子が多恵子のフラットで一泊したものと思っっているが、事実はそのではない。多恵子はただダシに使われただけ。

知子から電話があり一生のお願いと泣きつかれたことは、急に日本へ帰ることになったのだが、一晚多恵子さんの所で泊めてという懇願だった。

知子と親しい訳でもなければ、友達でも勿論ない。上司の義妹として、上司の家で数回しか会ったことがない。それに多恵子はパトリックというオージーと同棲していたので、唐突な感じがして驚きを隠せなかった。

が、何のことはない。本当に泊めて欲しいという頼みではなく、外泊する口実だった。

その夜、知子のおごりでパトリックも入れて近くのレストランで夕食を取った後、フラットへ戻り雑談をしていたが、時刻が11時になったのを確認すると、「多恵子さん、本当にありがとう」という言葉を残して出て行った。11時まで待っていたのは、万が一家から電話があることを用心してのことだろう。

多恵子は一切詮索しなかったが、あれは男との逢引きに違いない。パトリックも知子がドアを閉めた途端、「今から男に会いに行っただよ」とウインクしてにやりと笑った。

知子の相手は、一体どんな男なんだろう。秘密の逢引きも、なかなか風情があつていいと多恵子は思う。知子は美人なので、深夜男に会うために出て行く姿は絵になっていたと多恵子は思う。

女はやはり男とのドラマの中に居てなんぼのものだとつくづく感じる。

シドニーでの生活はもう1年以上が過ぎてているが、何とドラマチックな経験が待ち受けていたことか。日本での判で押ししたような退屈なOL生活からは考えられないような、ローラーコースターにでも乗った感じの、アップ・アンド・ダウンの日々。

シドニーで、最初に関わるようになった男性はマレーシア人だった。関わったと言っても深い関係になった訳ではない。通っていた英語学校のクラスメイトで名前はトニー。23歳で、多恵子より四つも若い。

これは異例のことと言わなければならない。何故なら、多恵子は日本では一回り離れた

30代の男性にはモテたが、20代の男性ましてや自分より若い男性から声が掛かったことは皆無だったから。これは容姿からきていると、多恵子は自覚していた。

多恵子の容姿の一番の特徴は、胸の豊かなことだ。巨乳の上に可愛い顔が乗っかっていれば、流行の巨乳アイドルとして同世代の男性にモテた筈だが、多恵子はオバサン顔とまでは言わないまでも、丁度30代の主婦のような雰囲気であって見えた。

だからトニーの誘いは多恵子にとっては新鮮は驚きだったので、好きとか嫌いとかは関係なく、トニーと食事をしたり映画を観に行ったりしたが、その時点で、後々トニーがスピーカーに変貌を遂げるとは夢にも思わなかった。

多恵子は日本で英語学校に何年か通い、英検も準1級を合格していたが、シドニーで英語に関して日常生活では殆ど問題がないことが分かり安心した。日本で英語のために費やした時間とお金が無駄ではなかったことが証明されたからだ。

実際、これは異例のことと言わなければならない。日本での英語熱は冷めることがないが、いくら英語学校に通おうと英検の資格があるうと、現地では殆ど何の役にも立たないというのが現実だから。日本での英語が机上のものだからだ。

英語力に自信を持ち、シドニーの英語学校で上流者用のクラスを選んだ。そのクラスには日本人は居らず、インドネシア、中国、タイ、フィリッピンからの学生で占められていた。皆かなり流暢な英語を喋り、発音も良い。

そんな周囲に、少なからず疎外感を感じていたのかも知れない。だから、トニーから、「ハーイ」と話しかけられて時の嬉しさは、特別のものがあった。

すぐに学校ではトニーと共有する時間が多くなった。ランチタイム、休憩時間はいつもトニーと喋っていた。

初めてのデートは映画の誘いだった。これまでの多恵子の人生で、年下の男からの誘いはなかったので、新鮮な驚きがあった。

深く考えることなくディナーやクラブに出かけるデートが続いたある夜、トニーからの電話があった。愛の告白というものだ。「タエコが大好きなので、正式に付き合っただけ」というシリアスなトニーの言葉に、悪い気はしなかった。しかし、トニーとステディになることに現実感はない。

この時点でトニーにはつきりと言え、トニーがストーカーまがいの行動に出ることとはなかったと、振り返ってみて多恵子は思う。

しかし、殆どのジャパニーズ・ガールがそうであるような、多恵子もまたイエスとノーをはっきり言えず、言葉を濁してしまう。「好きになってくれてありがとう。でもその気になれなくて」と答えた多恵子の意図は、「サンキュー。バット、ノーサンキュー」だが、勿論トニーには伝わらない。シャイで踏み切れないんだという印象を、トニーに残した筈だ。

電話での告白以来、多恵子を見るトニーの目付きが変わった。

スリムで背が高く、黒いフレームのメガネの奥のトニーの熱い視線は、多恵子をたじろかせた。トニーの一途さが増すにつれて、多恵子は後退する。

多恵子は意を決して、トニーに告げた。「学校が終われば日本へ帰ることになるので、付

き合うのは不可能だと思う」。これが多恵子が犯した2番目のミスだ。トニーは目に強い光をたたえて、「どこに住むことになるかと、二人で幸せに生きていける」と固い決意を表明した。

そして、トニーからの電話が毎日ひっきりなしに続いた。1日に数十回の電話がかかるようになる。多恵子はその執拗さに恐怖を覚え始める。最後の手段として取った多恵子の行動が致命的なミスとなった。ひたすら逃げることにしたのだ。これが結果として、トニーを完全なストーカーに変貌させた。

フラットに押しかけられるのが怖くて、友達の家へ転がり込む。学校へも行かない。知られてい職場、免税店にも行けない。当時多恵子は電話が鳴ると、身体がビクツと震えた程だった。

たった一言、「あなたを好きではない」とハッキリ言えなかったことが、收拾のつかない事態を招いてしまった。

トニーをストーカーにした一因が、多恵子の優柔不断な態度にあったのは否めない。だが、このストーカーのドラマを振り返ると、多恵子の心のどこかでそれを招いていたことも認めざるをえない。

雨の夜、家の前でずぼ濡れになって暗い目をして男が待っているシチュエーションを、全ての女が一度や二度は夢想した筈だ。ただし、女にとって好ましいストーカーは、こちらがストップをかけた時、消えてくれるストーカーでなくてはならない。

トニーはストップをかけても消えてくれなかったが、パトリックという男によって多恵子は救われる。

パトリックは多恵子が住んでいる建物の3階のフラットに住んでいた。朝出勤の時、4階からエレベーターに乗り込む多恵子とよく一緒にになり、「グッド・モーニング。タエコ。ハウ・アー・ユー？」とフレンドリーに声をかけてくれた。30を過ぎたばかりらしいが、前髪の薄さは中年のものだ。ただ笑顔が可愛く、多恵子は彼を見る度に、キューピー・マヨネーズのキューピーを連想した。

トニーから逃れるため友達フラットに居候中、多恵子はある午後着替えを取りにこっそり戻ってきた。その時、建物の前でパトリックとばったり顔を合わせた。「ずっと居なかったみたいだけど、旅行でもしてたの？とても心配してたんだ」という言葉に、多恵子は涙をこぼしそうになった。

すれ違うだけの赤の他人と思っていた男性からのやさしい関心は、状況が状況だけに多恵子の心に沁みる。「エブリシング・イズ・オーケー？」と多恵子を覗き込むパトリックの目に、暖かいものが宿っている。後でアフタヌーンティーのおいでよと誘われた時、多恵子は素直に肯いていた。

結局お茶だけでは済まず、ベッドインする羽目となった。

これは意外な成り行きだ。これまで多恵子は初めてのデートでベッドへ直行するということとはなかったから。セックスでもして気晴らしをしたかったのだと思う。実際、大いに気分は晴れた。

おまけに彼は巨乳好みで、「こんなセクシーな胸を見たことがない。ジャパニーズ・ガ

ールは皆胸が小さいと思つてたのに、ナイス・サプライズ」と褒め称えたことも、多恵子をいい気分させた。

満たされたセックスで、束の間の幸せに浸れる。ベッドの上で横たわる多恵子の耳元で、「タエコ。僕の大切なガールフレンドになった欲しい」と、パトリックが囁いた。多恵子は考えることもなく「イエス」と返事をしていた。途端に、多恵子の心に明るいものが流れたような気がした。トニーから逃れるチケットを手にしたように思えた。

トニーにボーイフレンドが居ることを告げれば、ストーカー行為を止めるだろう。男は男をもつて制するのだ。

そして実際そうだった。が、多恵子は今度はドメスティック・バイオレンスの日常に投げ込まれたことを知るのに、大した時間はかからなかった。パトリックは、ウーマン・ビーターだったのだ。

頬に激的な痛みが走ったかと思うと、口の中に塩っぱい味が広がった。パトリックに殴られたのだと自覚するのに、数秒が必要だった。

唇の端に何かねっとりとしたものがあるのに気付き手でぬぐうと、それは赤い色をした血だった。

「何故殴るの？」

頭の中を占める大きな恐怖が、そのまま言葉になる。すると2発目の鉄拳が飛んできた。

「やめて」

という言葉が喉でつかえる。

自衛本能が働いたのか、多恵子は一瞬の内にバスルームに逃げ込みカギをかけ、水で濡らしたタオルをひりひりとする顔に当て、涙を流していた。

これまでの人生で、親にだって叩かれたことはない。何故パトリックにこんな風に殴られなきゃなんないの。多恵子は痛さと悔しさと、声を上げて泣きじゃくった。

「タエコ。アム・ソーリー。ソー・ソーリー」。多恵子は、ドアの向こうのパトリックの声に、子供が哀願するような切羽詰った響きがあるにに気付き、泣くのを止めた。

一体これはどういうことなんだろう。数分前は恐怖の暴力男だったのが、今は弱々しい打ちひしがれた幼児に変貌している。

多恵子は息を止めて、パトリックの言動に耳を澄ました。

パトリックは泣いていた。「ソーリー。タエコがジョナサンと楽しそうに話すのが我慢ならなかったんだ」。ジョナサン？多恵子の頭が回転する。今夜ディナーを共にしたパトリックのベストフレンド。彼は、シャロンというセクシーなガールフレンド同伴だった。ようやく事の成り行きが見えてきた。パトリックは嫉妬しているのだ。

しかし多恵子は合点が行かない。ジョナサンは多恵子に外交辞令的に話しかけ、多恵子もそれに答えたただけだ。尋常ではないという感じはあったが、嫉妬からの暴力だと分かれると、多恵子の気持も少し落ち着いてきた。

恐る恐るドアを開けると、パトリックが涙を流したまま突っ立っていた。

まるで母親に置き去りにされた子供のような不安な顔をして。「アイ・ラブ・ユー。タエコ。アイ・ラブユー・ベリイ・マッチ。結婚しよう」。多恵子は自分の耳を疑った。プロ

ポーズの言葉を聞くと、思ってもみななかった。暴力の穴埋めにそう言っただけなんだろう。

パトリックはアイスを包んだタオルを、多恵子の顔の腫れ上がった部分にやさしく当てる。「タエコのことをとても愛してるんだ。だからタエコが他の男と話すのを見て、とても腹立たしかったんだ」。

パトリックは多恵子の肩を抱き、ベッドルームへ誘う。

その夜のセックスをどう表現すればいいのだろう。パトリックの熱い唇がひりひりと痛む部分に触れた時、多恵子の身体に電気が走った。パトリックは殴ったという罪悪感があるのだろう。終始下僕のように振舞った。それは多恵子を女王のような気分にさせる。一方で、殴られた痛みのが感覚が、思い出したように身体を走る。これまでの快楽に、S感覚とM感覚の両方が交互に表れ、快楽を一步深めたような感じ。

満ち足りた気分で居る多恵子の耳で、「二度と殴ったりしない」とパトリックは子守唄のように繰り返す。

しかし、パトリックはその約束を守らなかった。

帰宅の時間が遅れたと言って殴る。話を聞いていなかったと言って殴る。電話で話すのが長過ぎると言って殴る。他の男を見ていたと言って殴る。殴った後は別人のように優しくなり、ベッドの上では、下僕となって徹底的に多恵子に奉仕するというパターンは変わらない。

顔を殴られたのは最初だけで、その後は胸や脚を殴るのが続いた。そして、「タエコの素敵なボディを誰にも見せたくないのだから」という言葉が加わる。

さすがに多恵子もパトリックの異常な振る舞いは、単に気が短くすぐ手が出ると言った類のものではなく、ある種の病気なんだと気付かざるを得ない。

一方で、パトリックとのセックスは、時間と場所を問わない奔放なセックスがエスカレートした。

映画館、駐車場、公園、車の中、果てはエレベーターの中でも、嵐のような欲望をむき出しにして、多恵子を求めた。

多恵子が一番驚いたのは、このようなセックスにに対し応じることができると大胆さが、自分の中に潜んでいたことだ。

ある日、多恵子は意を決して、インターネットで「ドメスティック・バイオレンス」をサーフィンした。

出てくるわ。出てくるわ。多恵子とパトリックのようなリレーション・シップの中に居るカップルの事例が驚く程多く網羅されている。ドメスティック・バイオレンスが決して異例のものではなく、日常的に起きていることがよく分かる。

多恵子はダメステイック・バイオレンスの背景の項を、すぎる思いで読み始めた。

何故暴力を振るうのか。さまざまな要因が重なるらしいが、大雑把に分けると二つの理由が考えられる。一つは酒癖が悪いこと。酔っ払うと暴力を振るうタイプだ。

もう一つは、暴力が日常茶飯事の環境で育った場合、その傾向を受け継ぐという。男性の場合、特にその確立が高いとのこと。多恵子はこれだと直感した。パトリックは酒を飲むが、酔っ払うということはない。キューピーのようなパトリックが大きなトラウマを抱えていることは間違いない。

次に、被害者シンドロームの項に多恵子は目を移した。

ダメステイック・バイオレンスから脱出するのは簡単なことだ。加害者から去ればいい。何故何度も暴力を振るわれても、一緒に居るのか。被害者の多くは、相手が暴力を振るうのは自分に責任があるのだという罪悪感に捕らわれているという。

それとここを去れば、誰からも愛されないではという不安。それは自信欠如からくるもの。そこに子供が居たり、経済的な要素が加わると、完璧な暴力の世界の囚人になるという。

多恵子は首をひねる。ここに記述されているものに当てはまるものは、多恵子の場合無かったから。子供がいる訳でもなく、パトリックに養って貰っている訳でもない。足かせは、何も無い筈だ。多恵子さえ決心すれば、スーツケースを提げて今すぐ出て行ける。

本能を剥き出しにしたような、パトリックとのセックスに捕らわれているのだろうか。多恵子の頭に、結びの言葉として載っていた専門家の言葉がこびりつく。「ドメステイック・バイオレンスは当事者が努力して解決できるようなものではなく。直ちに専門家に相談しカウンセルを受けることが重要である」。

オーストラリアでもDVは社会的な問題になっており、常時、それを防司

ここ数日間、テレビのニュース番組の目玉である「メル・ギブソン事件」を、多恵子は今夜も釘付けになってパトリックと見ていた。

メル・ギブソンはオーストラリアから掛け値なしの国際的なスーパースターとなった人気俳優だ。数年前に30年以上続いた糟糠の妻と離婚し、若い美人のロシア女性と結婚し一児をもうけ、幸せな第二の人生をエンジョイしているものと思われていたが、蓋を開けると、彼もドメステイック・バイオレンスの張本人だったというショッキングな暴露ニュース。

この女性は、ギブソンとの電話の会話を全て録音しており、それを手に入れたテレビ局がその暴力的なやりとりを小出しにして、数日間ニュースとして流している。おまけに、彼に殴られ歯を折られたという証拠の写真も一緒に。

この電話のギブソンは、本当にショッキングなものだった。

彼女への罵詈雑言が気違い沙汰としか思えない信じられない怒りの口調で、延々と続く録音してテレビ局に走った女も女という批判もあるが、映画でのヒーローぶりからはまったく想像も出来ない、ギブソンの醜い一面だった。

ギブソンはこれで俳優としての生命は絶たれたと言われるほどのインパクトを持ったスキヤンダルとなっている。

多恵子は、そのニュースを見ながら暗澹たる気持ちになった。

スクリーンのヒーローであるメル・ギブソンがドメステイック・バイオレンスの加害者なら、男はだれでもそうなる要素を持つているのに違いはないと思うからだ。唯一の救いは、

前妻がメディアに、30年の結婚生活で、1度も彼は手を上げたことはないコメントを出したことだろうか。

「彼は、酒癖が悪いので有名なんだよ」と、パトリックがつぶやく。

多恵子は意を決して、告げた。

「パトリック、専門家にカウンセリングを受けてみてはどう」

驚いたように多恵子を見つめるパトリック。

「何故」

「何故って…。いくらジェラシーからだからといって、パトリックの行為は異常だと思う」そう告げたことを、多恵子はすぐ後悔した。

パトリックの顔色が変わり、DVもドラッグ・アディクトと同様、家族やパートナーや友達のアドバイスに耳を傾け更正するような単純なものではないと、インターネットに書かれていたことを思い出したからだ。

ぐずぐずしていると、また鉄拳が飛んでくる。多恵子は、「ごめんなさい。余計なコメントだったわ。コーヒーを入れるわね」という言葉を残し、慌ててキッチンへ向かった。

「女を殴るような男は絶対ダメよ」

弘美はきっぱりと言い切った。

キリツとした顔にスラリとした姿態。そしてきびきびとした動作。弘美は人目を惹くような正統派の美人ではなかったが、人生に真正面から向かっているようなパワーがあふれた女性。

オーストラリアでの彼女の経路は、ワーホリの中では際立ったサクセスストーリーだといえる。

ワーホリにとって、一番の勲章は永住権だ。

永住権獲得の方法は二通りある。職によるか結婚によるかだ。ワーホリのジャパニーズガールの多くは、オージーとの結婚で永住権を手に入れる。その中で、弘美はまず職によって永住権を勝ち取り、その後、オージーと恋に落ち婚約し結婚を間近に控えた女性。つまり自身の能力で永住権を獲得し、同等の立場でオージーと結婚しようとする日本女性だ。結婚で転がり込んでくる永住権よりも、数倍値打ちがある。

弘美は、ワーホリとして大手の総合免税店で働き始めたが、そこでワーキング・ビザを取って貰い、数年後に永住権を取って貰っている。

現在の肩書きはジェネラル・マネージャー。よほど会社にその実力を認めて貰わない限り、こういうサクセス・ストーリーは起きない。

まず、ワーホリは同じ会社で6ヶ月以上働いてはいけないという規則があるため、たった6ヶ月の間に面倒なワーキング・ビザ申請をしてまで雇用したいと会社に評価されるのは簡単ではない。

次に、会社が従業員のために永住権を申請するのは稀だ。何故なら、永住権を取得した従業員に義務は付随しない。パスポートに永住権が貼られた翌日に、会社を辞めることができる。辞めても永住権はキャンセルにならない。会社がそのリスクを負ってまで永住権

を申請してやろうとという人間は、会社にとって大きなプラス要素を持つ実力者でなければならぬ。

弘美はまさにその二つの難関を突破し、永住権を手にした成功者なのだ。

多恵子が弘美と知り合ったのは、その免税店で働いていた時。単なるワーホリの売り子だった多恵子は、流暢な英語できびきびとスタツフに指示する弘美に圧倒され、弘美への尊敬と憧れを隠さなかった。そのためかどうか分からないが、周囲の人間には冷たいボスと見られていた弘美は、多恵子には面倒見がよかった。

多恵子がトニーというストーカーに悩まされていた時、しばらく弘美のフラットに居候させて貰ったことさえある。

多恵子は久しぶりに弘美に電話を入れ、土曜日の午後彼女のフラットを訪ねた。パトリックに関してあるがままには語れないが、何かアドバイスを貰えるかもしれないと思ったからだ。

しかし、目の前の弘美は何かこれまでとは違う。話は聞いてくれているのだが、頭の中では何か他のことを考えているような感じ。仕事が多忙なのかもしれない。

「忙しいの」

「そうでもない。どうして」

「弘美さん、何だか疲れているみたい」

「大丈夫」

そう言うと、弘美は本題に戻った。

「多恵子さん。どんな理由があつても暴力を振るう男は絶対にダメよ。だんだんエスカレートして、ドメスティック・バイオレンスにでもなったらどうするのよ。どんなに好きでも、暴力男とは絶対に幸せにはなれないわよ。パトリックにきっぱり言つてやりなさい。今度殴つたら、それで二人の仲はおしまいだよ」

多恵子はふと、ブラウスを脱ぎ身体に残る無数の痣をここで弘美に見せれば、弘美は何と云うだろうと想像した。すぐに警察に連れて行かれ、パトリックのことを訴えるに違いない。

「分かった。今度手を上げたら、あのフラットを出て行くわ」

このままでは幸せになれないこと位、多恵子にも分かっている。だが、パトリックに三行半をたたきつけようとも思わない。

何故だろう。パトリックとのセックスに縛られているのだろうか。そんな単純なものではない筈だと首を振る。

パトリックが与えた一番大きなインパクトは、これまでの人生で、これ程深く激しく私の人生に入りこんできた男が居ただろうかという感慨だ。それに損得勘定で言えば、世の中には暴力男はゴロゴロと居る。それならば、普段は優しくそしてセックスの上手な暴力男の方がずっとましだ。おまけに、パトリックは「永住権」というご褒美を与えてくれるかもしれない。

そして思う。女は、男とのドラマの中に居てなんぼのものだと。多恵子は、そのドラマの中に居る。

## エイズから貰った愛

弘美は車を駐車場に停めると、急ぎ足でオフィスへ向かう。会社から与えられたいわゆるカンパニー・カーで、マネージャークラスの特権だ。

このブルーのホンダ・アコードのハンドルを初めて握った時の誇らしさは、今でもよく覚えている。ワーホリからスタートし、よくここまで到達したものだという充実感が満ちた。それは日が経つにつれて薄れて行ったが、それでも毎朝エンジンをふかす時、小さな幸せのようなものが心の中で浮き立つ。

だが、ここ1週間は何も感じない。胸に大きな鉛が入り込み、それが弘美を下へ下へと引きずり落とすような気分。月曜日はいつもそうだが、かなりのミーティングをこなさなければならぬ。とにかく仕事モードに切り替え、1日を乗り切らなければならぬ。

交差点の青信号を待ちながら、弘美は先週の土曜日に会った多恵子のことを思い出していた。愚鈍とは言わないが、優柔不断なところのある多恵子は、前のストーカーの件もそうだが、男につけこまれやすいタイプだと思っていた。巨乳の多恵子がオーリーのボーイフレンドに殴られることを想像しても、そう奇異な感じがしないのが彼女のイメージだ。

一応それらしきアドバイスはしたが、男に1度や2度殴られるぐらいが、一体何だというのだろうか。エイズに罹るよりは、百倍も千倍もましだ。

オーストラリアでは、結婚を前にしたカップルがエイズのための血液検査をするケースが多い。それは、結婚後、妊娠、出産という大事な行事のための安全確認のため。

弘美も結婚を控えて、GPと呼ばれる主治医のクリニックで、チェックのため血液を採取された。主治医から電話があり、結果は電話ではなく直接会って話したいと言われ、すぐアポイントを取った。

勿論弘美は悪い結果が出たのだと想像がついたが、この時点でまさかエイズに罹っているとは思わなかった。付随のチェックで、血圧が高いとかコレステロールの数値が高いとか言われるのだろうかと思っていた。

クリニックで初老のGPから、「ヒロミ、バッドニュースをソーリー。結果はHIVポジティブ」「今は良い薬があるから、健康管理さえすれば、長い間クオリティ・ライフを営むことは可能ですよ」という言葉を、上の空で聞いていた。

ショックでフロアにへなへたと倒れこんでしまったのは、フラットに帰ってからだ。この私がエイズに罹るなんて！誰からうつされたのか？その答えは簡単だ。婚約者のステイプからだ。

こちらでは永住権申請の際、健康診断の一部として血液検査をし、エイズの有無を明らかにしなければならぬ。その時の検査の結果は勿論HIVネガティブだった。それが2

年前のことだ。検査するまでの1年間はセックスはゼロだったし、検査後、セックスをしたのはステイブしか居ない。

ステイブがこんな病気を持っていたなんて、信じることが出来ない。インテリジェントな容貌に、落ち着いた性格。まだ30後半でしかないのに、栗色の豊かな髪に白髪が混じっているのも、かえって、コーポレート・ローヤル、企業弁護士という仕事に就くステイブに似合っていた。

ステイブに出会ったのは、2年前の会社のクリスマス・パーティー。会社とは取引のないステイブが、どんなツテでパーティーに来たのか弘美には分からなかったが、人混みの中で数分話しただけで、この人とは何だか気が合うなという感じを持った。ステイブも同じ心境だったのか、数日後会社で電話がかり最初のデートの約束をした。

弘美は、付き合う男はまず頭が良くなければまったく興味を持つことが出来なかった。知的な感じのステイブは、第一印象から点数が高かったが、話してみると、それを裏打ちした。おまけに、彼はユーモアのセンスも持ち合わせていた。デートを重ね、ステイブからプロポーズされた時、弘美は躊躇なく「イエス」と答えていた。

弘美は、時々オーストラリアでの軌跡を振り返ることがあったが、しみじみとした充足を味わうのが常だった。弘美の信条である、「努力をすれば必ず報われる」が真実だったことを身を持って証明したから。

ところが、こんなしつぺ返しが待ち受けていたとは。エイズによって明日死ぬ訳ではないが、大きな可能性としては10年後には死が待っている。結婚も出産も出来ないし、家庭を作ること出来ない。それを思った時、弘美の目から涙があふれ、そしてそれは号泣に変わった。

「弘美さん、弘美さん…」

突っつくような声で、弘美は我に返る。目の前の5人のスタッフが、怪訝そうに弘美を見ている。ここは、会社のミーティング・ルーム。弘美の会社の最大の顧客は日本人。日本人の夏休みを3ヶ月前に控え、日本人ツーリストへのプロモーションに関し、各部門のマネージャーに最後の段階のプランを聞いていたところだ。5人のマネージャーがそれぞれの状況を説明中、弘美はまたエイズのことを考え始め、各自のレポートが終わったのを弘美は気付かないでいた。最後のマネージャーのレポートが終わっても、弘美の口からは何も出ず上の空状態だったため、傍に座っていたアシスタントの麗子から、名前を連呼されたのだった。

「アトム・ソーリー。つい去年の数字の詳細を考えていたら、まったく回りが見えなくなっちゃって」

弘美はとっさの機転で、その場を何とか取り繕った。その後は元の弘美に戻り、きびきびと各マネージャーに適切な指示を与える。10時から始まったマネージャー・ミーティングが終了したのは2時前だった。

「弘美さん、ランチを一緒にしませんか」という麗子の誘いを、「ちょっと急いで仕上げなければならぬレポートがあるので、サンドイッチでも買ってくるわ」と断り、「それじゃ、サンドイッチ買ってきましょうか」というオフアームも断り、自分のオフィスへ戻る。

オフィスのドアを開けると、大きく息をついた。あんなぶざまなところをスタッフに見られたのは、初めてだ。でも仕方がない。死刑の宣告を受けた人間が動揺するのはあたりまえ。ましてやスタッフと呑気にランチを取る気には、さらさらなれない。

弘美が一刻も早く取らなければならぬ行動が何か、分かっている。ステイプに連絡し、事情を説明することだ。それが弘美には出来ず、1日1日と日を延ばしていた。以前は殆ど毎日のように会っていたが、ここしばらくは会社が忙しくまったく時間が取れないと弁解し、会わないでいた。どのように切り出せばいいのか、それが決まるまでの時間稼ぎ。弘美は、二重、三重の苦悩の中でもがいていた。

「ファッキング・ビッチ！ HIV ポジティブだって。私からうつされただと。冗談もいい加減にして欲しい」

大声を張り上げるステイプを、弘美は信じられない思いで見ている。こんなに激怒し大声を上げるステイプを、これまで見たことがない。ましてや汚いスラングを唾を飛ばして叫ぶステイプなど、想像することも出来なかった。顔の形相までが変わっている。普段の落ち着いた知的な容顔はみじんもなく、目がつり上がり怒りで赤みを帯びた顔は、弘美に赤鬼を連想させた。

GP から信じられない結果を聞いた日から約2週間が経ち、弘美はようやく意を決してステイプに伝えることにした。こんな話はレストランなどの公共の場では出来ないもので、弘美は久しぶりにステイプを自宅に招いて夕食の用意をした。これまで何度もあったシチュエーション。弘美はいつもいそいそと愛する男のために料理を作ったが、そのお返しとして、ステイプは弘美の手料理を褒め、その夜弘美を愛した。

だが今夜は違う。砂を噛むような気持ちで夕食に手をつけ、久しぶりに会う弘美の言動に何か訝しいものを見るような目付きのステイプに、思い切った事の説明に及んだ。途端にステイプは急変したのだった。

「オー・マイ・ゴッド！ ヒロミがポジティブなら、私も感染してるんだ。オー・マイ・ゴッド！」

「ステイプ。そうじゃないわ。今説明したように、私はこの3年間ステイプ以外に誰とも性交渉はなかったわ。2年前の血液検査ではネガティブだったのよ。論理的に考えてみて。そうになると、私はあなたから感染したとしか考えられないじゃない」

「ファッキング・ビッチ！ そんなことはまったく不可能だ」  
動転したステイプは取りつく島もなく、話が出来ない。弘美は、弘美の中に残っていた僅かな理性で、その場を修正しようと焦った。

「ステイプ。お願いだから、気を落ち着けて聞いてちょうだい。すぐに血液検査を受けて。その結果を元に今後のことを話しましょう」

「今後のことだって。私たちに今後があるとでも思ってるのかい」  
ステイプは乱暴な手付きで上着を捨て、ドアに向かった。ドアのノブを手にし立ち止まると、振り返り捨て台詞を吐いた。

「私がポジティブだったら、ヒロミのことを訴えるつもりだから覚悟していた方がいい」  
「好きなようにすれば！」

弘美も怒りのあまり、ステイブに言葉を投げつけた。

急に静かになった部屋で、弘美は大きな虚脱感の中に居た。まったく思いもかけなかった醜態を、ステイブは曝け出した。

最後の捨て台詞は弁護士らしく「訴える」という言葉だが、確かにオーストラリアではエイズに罹っているのを知りながら、セーフセックスをしないで相手にうつした場合、犯罪として告訴される。あの動転した様子から、ステイブがエイズであることを知らなかったのは信じることが出来る。だが、彼からうつされたのは間違いない。

ステイブと話すことで、これからの指針のようなものが見い出されるかもしれないという微かな期待があったが、状況を徹底的にこじらせただけに終わった。

これからどうすればいいのだろう。日本へ帰るべきなのか。日本の家族にどう話せばいいのだろう。もしこのままシドニーに住むのなら、会社に知らせておかなければならないだろう。それが原因でクビになることはない。この国には不当解雇法という、働く人間を守る強い法律がある。以前ニュース記事になったが、エイズが理由で解雇された人間が会社を訴えて勝ち、会社は多額の賠償金を支払わされている。

弘美の一番の心配は、周りの人間がどういう反応を示すかということだ。オーストラリアはエイズ教育が進んでいる。胸の奥ではどう感じているか分からないが、少なくとも表面上は一切偏見も差別もないというのが、一般の人間のエイズに対する態度だと言える。そう考えると、日本へ帰るよりも、こちらでの生活を選ぶべきかもしれない。だが、ステイブとの仲が決裂した今、ここには頼りになる親しい人間が一人も居ない。この地で一人寂しく死んでしまうのか…。

それにしても、私が愛し結婚し家庭と一緒に作ろうとした男の正体は、こんなにも醜いものだったのか。おぞましきで身体が震える。それは、HIVポジティブだと告げられた時、身体を走ったおぞましきと同質のものだった。

深夜物音一つしない静かな部屋で、答えの出ない問いかけをしていると、虚しさが首をもたげてくる。しばらくすると、部屋中がぐもった奇妙な音で充滿した。それは弘美の嗚咽だった。

「弘美さん、お身体の調子はどうですか」

アシスタントの麗子が、心配そうな顔をして弘美に聞く。

「どういう意味かしら」

弘美は一瞬緊張する。もうばれているのだろうか。

「ここ2週間位、弘美さん元気がなくて顔色も悪く、いつも心配事を抱えてる感じなので、皆さんどうかしたのじゃないかと心配してますよ」

「皆さん？」

「ええ。だって弘美さんといえば、ときどきしたボスとして皆から尊敬されているじゃないですか。それが急に元気を失くすと、そりゃ心配しますよ。私は弘美さんのアシストですからよく聞かれます」

「で、麗子さんはどう答えているの」

「忙しい日がずっと続いていたので少しダウンしているかもしれませんが、一応答えて

います」

「ありがとう。その通りなの。30の声を聞くと、ちよつと無理をするとすぐシワ寄せが身体にくるわ」

「少し休めばいいのに」

「ダメよ。こんな稼ぎ時に休んでたら、すぐクビが飛ぶわ」

「私が早く弘美さんの代理が出来るような力を付ければ、こんな時にはゆつくりと休んで貰えるんですが」

弘美は、会社の中ではまだばれていないことを、麗子の話から確信する。その安堵が、麗子に対してやさしい言葉となって出てくる。

「麗子さんはもう立派に一人前よ」

本当はそんなことは思っていない。この子は、この辺りが限界だ。アシスタント・マネージャー以上のポジションには上がれない。それは、会社が永住権を取らないことを意味する。

麗子も弘美と同じように、ワーホリとしてスタートした。職場では殆どのワーホリが6ヶ月で使い捨てという現実から見れば、麗子が、一線を画する実力があつたのは事実だ。感じのいいルックス。ハードワーカー。頭も悪くないし性格も良い。だから、会社はワーキング・ビザを取り、弘美のアシスタントの職を与えたが、これ以上出世階段を登るとは思えない。

海外で男に伍して仕事をする場合、勿論まず語学が堪能でなければならぬ。そして、イエスとノーがはっきり言える人間でないとダメだ。そこから更に上昇しようと思うなら、ストリート・スマート、いい意味でタフでなければ無理だと、弘美は思う。それは努力して得られるようなものではなく、生来のものだ。弘美は思っている。麗子にはそれが欠けていた。

そう思うのは弘美だけではない。先月のマネージャー・ミーティングで、麗子の永住権は申請しないという結論が出ている。彼女のワーキング・ビザは2年間有効で、後1年残っている。今後の身の振り方のために十分な時間を与えるという配慮で、少なくともビザが切れる半年前に、会社の意向を伝えなければならぬ。落胆するのは目に見えてる。伝えるのは弘美の仕事でいい役目ではないが、こういう状況でのハウツウは習得しているので、どうということもない。

麗子のような人間に出会うと、弘美はいつも自身が勝利者であることを確認したものだ。だが、今弘美は思う。永住権がどれほどのものだろう。健康で普通の生活をまっとうする者が、真の勝利者なのだ。

「あつ、もう少しで忘れるところだった」

麗子が1オクターブ高い声で叫ぶ。

「弘美さん、ゴールドコーストのジェフさんから、電話がありました。弘美さんが外出中に。弘美さんが元気がないと聞いたので、電話したのだと言っていましたよ。メッセージなし、コールバックも要らない。電話をしたことも別に伝えなくていいと言われてたんです」

「ゴールドコーストには会社の支店がある。やれやれ、私の噂はあつちにまで飛んで行ってるんだ。そう思いながらも、懐かしい気持が湧いてきた。ジェフ。人の良さそうな誠実

な笑顔が、フラッシュバックのようによみがえる。もう1年以上も彼とは会っていない。彼から、結婚を前提に付き合っただけと言われたこともあったのだ。それに対し、弘美はイエスとは言わなかった。

「ヒロミ。アー・ユー・オーケー？」

「ええ。何とかサバイブしているわ」

久しぶりに聞く電話の向こうのジェフの声は、暖かさが溢れていた。

「ヒロミがダウンして、いつも青い顔をしていると聞いて心配になり、時々電話を入れてたんだ」

「ええ、麗子から聞きました。サンキュー」

「本来なら、結婚を控えてバラ色の頬で居るべきレディが、青い顔をしていちやダメだよ」弘美は言葉に詰る。数秒間の沈黙の後、自虐的な気持で言葉を吐く。

「結婚はキャンセル。ステイプとは結婚しないわ」

今度はジェフが言葉に詰ったのか、数秒の沈黙が流れる。

「ソーリー。プライベートなことに口出しして」

「気にしないで。大丈夫だから」

会話の流れから、来週本社に出張して来るジェフとディナーの約束をした。

これまでも本社出張があった筈だが、働く部門が違うためか、顔を合わせるといこうとはなかった。

この総合免税店での花形の部門は、顧客の大部分を占める日本人ツアーリスト部門だ。だからその部門のトップに居る弘美は、かなり重要なポジションと言えた。ジェフから好意を示された時、彼はその部門がいろいろと分けられた一つのセクションのマネージャーでしかなかった。言い方を変えると、ジェフは弘美の部下という位置に居た。弘美は当時、鋭敏な感覚で人生と向き合っていた。人柄の良さというものに高い評価を与えず、自分より下の単なるマネージャーよりも、頭の切れる俊敏な法律家を選んだのだ。

ジェフは、弘美から「ノー」という返事を受け取った後、自ら望みポジションを商品開発部に、職場をゴールドコース支店に変えた。それは第三者の目から見れば、都落ちと思われるものだった。

「ヒロミは料理も上手なんだ」

すっかり上機嫌でワインのグラスを手にしたジェフが、弘美の料理の腕を褒め称える。大したものを作った訳ではない。スープとパスタとサラダの3点セット。

ジェフとは、レストランでディナーを取るつもりでいたが、直前になり弘美はレストランに繰り出すが億劫になり、急遽ジェフを自宅に招くことにした。レストランで楽しむ気持の余裕がない。

弘美の心に立ち込める暗雲は消えないが、その場で演技をすることを自身に課した。会社ではやり手のゼネラル・マネージャー。知人に対しては、聡明で落ち着いた弘美。これまでの弘美のイメージに、出来るだけ近付くための演技。その分自宅で一人になると、

気持が割り増しで塞いだが…。

今夜はジェフの前で、旧交を温める友達を演じなければならぬ。だがジェフの相変わらぬ優しい目に誘発されるかのように、全てを打ち明けたいという衝動に駆られる。それに自惚れた言い方をすれば、どういうレベルかは分からないが、まだ私に好意を持ってくれているに違いない。そうでなければ、デイナーの約束などしない筈だ。弘美はその好意に甘えてみたいと思った。弘美は決めた。もしジェフが何故結婚がバツになったのかを聞いたら、その時は全てを打ち明けようと。外人は普通プライベートなことに、顔を突っ込んだりはしない。特に男性なら尚のことだ。

果たして、ジェフはその質問を口にした。

「ヒロミ、もし答えたくなければ、ノーアンサーでいいんだけど。差支えがなければ、何故結婚がキャンセルになったのか教えてくれない」

「私が、HIVポジティブとわかったからよ」

何の淀みもなく言葉が出た。ジェフは目を丸くした。心が呻くようなトーンで、ジェフの言葉が続く。

「オー。ヒロミ。ソーリー。ベリイ・ソーリー・トゥ・ヒア・ザット。そんなプライベートなことを聞いたりして、本当にごめん」

「そんなに気にしないで。それを知った時はとてもショックだったけど」

弘美は、ステイブとの経緯を簡略してジェフに説明する。ジェフは多分検査の結果待ちだと思うが、弘美からうつされたらと激怒し一切連絡がないこと。弘美自身は、彼からうつされたことを疑わなかったが、今では何が何だか分からなくなってしまっていること。ステイブが豹変し、弘美を「ファッキング・ビッチ」と罵倒したことは、とてもじゃないが言えない。ステイブの人格を守るためではない。そういう下等な男を選んだ弘美の品性を、疑われるからだ。

ジェフの目がキラリと光った。人が大きな決心をした時、目から放つ光線だ。

「ヒロミ。ウイル・ユリー・マリー・ミイ？」

ジェフの言葉を理解するのに、かなりの時間を要した。それは、その言葉が想像も出来ない非現実的なものだったから。マリー？結婚？これはプロポーズ？弘美の頭に、それらの単語が、黒々としたゴシック体で浮かび上がった。弘美の理性が次のようなフレーズを作る。

「ジェフ。悪い冗談はやめて。ちゃんと話を聞いているの。私はHIVポジティブなのよ」

「それがどうしたと言うんだい。HIVポジティブの人間を愛しちゃいけないという法律でもあるのかい」

今度は、弘美が目丸くする。

「ヒロミのことをずっと愛していた。ノーと断られても、愛することをストップすることは出来なかった。人を愛することは、条件が付くものでもなければ、状況で変わるものでもない」

弘美は今日の前にあるものが、一体何なんだろうと考える。人の良さそうな笑顔しか印象に残らなかった男が、愛を告白し求婚している。普通の女にはではない。エイズの女にだ。弘美の内部で、感動が波打ち始めた。ジェフの言葉が続く。

「HIVポジティブは、勿論悲劇であるのは疑いもない。でも現在は、非常に効果的ない

い葉が開発されている。だからもうエイズ患者は短命ではない。エイズの女性が妊娠し出産し、子供はエイズフリーという例だってある」

「うつるかも知れないという恐怖感はないの。ジェフ」

「まったく問題なし。勿論いつもセーフセックスは欠かせないよ」

愛を告白されることは嬉しいが、エイズに対する日常のハウツウを聞くことが、何故かもつと嬉しい。

「サンキュー」

人は何度心のままに言葉を紡ぐのか知らないが、このサンキューはまさにそれだった。

ジェフの言葉は、更に実質的だった。

「それから、ヒロミはセカンド・オピニオンを求めたのかな。どんな病気もそうすべきだけれど、特にシリアスなものは絶対にそうしなきゃダメだよ」

弘美は悲嘆に明け暮れて、そんなことは思いつきもしなかった。

「ヒロミ。本当にごめん。ひどい醜態を見せてしまつて」

ステイブは、弘美が知っている落ち着いた喋り方でそう告げた。検査の結果はネガティブだったと伝え、数週間前の非礼を謝っているのだ。自身が安全圏に居ることを確認した後、他人に示すことのできる思いやり。そんなものに何の価値もない。弘美は受話器を置いた後、何の感情も湧き上がって来なかった。怒りさえも、もうなかった。

弘美は公立のクリニックへ行き、エイズの検査を頼んだ。数週間後に出た結果はネガティブだった。弘美は、それを信用することが出来ない。念のため、もう一度血液を採取し検査することを申し込む。2週間後に出た結果もネガティブだった。クリニックで、担当者の一部始終を説明すると、エイズの最初の検査で、ファースト・フォールト（FIRST FAULT）と称される誤診は稀ではないと慰められた。

弘美は全てがクリアになった時、へなへなとその場に座り込んでしまった。喜びからではない。それまで弘美を必死で支えていた気概が、いつぺんに抜けてしまったからだ。

弘美の薬指で、ダイヤモンドの婚約指輪がキラキラと光る。返したステイブからのものより数カラット落ちるが、弘美はジェフからのこの指輪の方が、比較にならない程輝いていると思う。これが「本物の宝石」だから。この数週間の苦しみと、突然空から落ちてきた幸せをどう表現すればいいのだろう。今回の「エイズ騒動」は、神様から頂いた最大のプレゼントだと思うことにしよう。この本物の宝石をどういう風に愛して行くか。それが弘美に与えられた課題だ、弘美が全生涯を賭けて向き合っていかなければならない課題だ。

麗子の疑問は解かれぬまま、宙に浮いている。疑問とは、ここ数週間の弘美の言動だ。急に元気をなくし顔色も冴えず、ミーティングでも頻繁に上の空という感じで、これまでの弘美のイメージを180度転換させたような立ち振る舞い。麗子はショックを受けて、弘美に一体何が起きたのだろうと、その一挙手一投足を目を光らせて見つめていた。

麗子は最初、ステイブとの仲がうまく行っていないのだと推測した。案の定、婚約は破棄されたが、考えてみると、弘美は男女の色恋沙汰を職場に持ち込むタイプではない。何か究極的なトラブルの中に居て、それが婚約破棄という結果を招いたと考える方が道理を得ている。

そして急に決まったジェフとの婚約。会社の古参者にさりげなく二人の間柄を聞いてみたが、数年前、本社で一緒に働いていたことがあるというだけで、それ以上のことは浮かび上がってこない。そして、皆がジェフを、「出世とか昇進などにまったく興味がなく、マイペースで人生を楽しむ人柄のいい男」と評した。優しくフレンドリーなのは、電話で話しただけですぐ分かる。一度、本社に出張中のジェフをエレベーターの前で見かけたことがあったが、上背のあるナイスガイという印象を持った。だが、ステイブとは余りにもタイプが違っている。

女が好きな男のタイプというものは、そう変わるものではない。結婚なら話は別で、そこに打算が働く訳だから、社会的なステイタスや財産、家柄や学歴などが優先することもあるが、ジェフはこれらのどれも持ち合わせていない。

紛れない事実は、弘美が今幸せだということ。それは、誰の目にも明らかだ。伶俐な顔に、笑顔が頻繁に浮かぶ。ビジネス優先主義だった鋭い横顔に、丸みが加わったような印象を与える。これまでの弘美には決して見られなかったものだ。

一切無駄口を聞いた事がない弘美が、麗子に話しかけて雑談するようなことも起きた。おまけに、ビザに関して、正確に言えば永住権に関して、「この会社だけに固執しないで、他のオプションもチェックした方がいいわよ」というアドバイスさえ貰った。

何故、麗子はこれ程弘美に関して執着するのか。それは、弘美がダウンした時、麗子は密かに、これはチャンスかも知れないと思っただけだ。弘美がおかしくなり突然辞めるようなことになれば、会社は、たとえ実力がなくても仕事の流れを知っているという理由だけで、麗子に弘美のポジションを与えなければならぬだろう。それは、必然的に永住権申請につながる。それが全て水の泡に帰した現在でも、麗子はあれこれと弘美に関して詮索するのを、止める事が出来なかった。

麗子の頭に、「永住権」という言葉が強く響く。それは、麗子がどうしても欲しいものだ。シドニーで1週間滞在し、麗子はここに住みたい願った。街の空気が身体に合うという感じ。心がクリーンになり、ハッピーなフィーリングはいつも体中に溢れている。こんな気持ちにさせてくれる街があるのだ。

ここで永住するには、パーマネント・ビザを取得しなければならない。方法は二つしかない。結婚、あるいは仕事によるかだ。たまたま愛する人と出会い、結婚というコースにつながるがいいが、ビザを取るための結婚、すなわちビジネス・マリッジをする勇氣は、麗子にはない。1万ドル出せば、「結婚」を斡旋して貰うことも可能らしい。

麗子には、仕事で永住権を取る選択肢しかなかった。ワーホリ就職状況を徹底的に洗って出てきたのが、現在勤めている会社だった。この会社の顧客の7割が日本人ツーリストのため、常に日本人スタッフを必要としている。ワーホリは、6ヶ月しか同じ職場で働けないため、殆どが使い捨てだが、この会社は実力のある者にはワーキング・ビザを、そして永住権取得の可能性も大だという評判があった。麗子は、ここで自分の運を試してみようと思った。

店員として、ここに就職するのは簡単だ。店員は流動的なポジションだったため、常に空きがあった。麗子は6ヶ月が勝負と大きな深呼吸をし、自身を奮い立たせた。

真にグッドワーカーになるのは容易ではないが、グッドワーカーの振りをするのは難しいことではない。麗子は、職場では常にスマイルを絶やさなかった。人工的なスマイルにならないよう、気を付けながら。残業、週末出勤は率先してこなす。がむしやらにならないよう、嫌味にならないよう、細心の注意を払い、メリハリの利いた働き振りを示した。

果たして、3ヶ月が過ぎた頃、弘美から、ワーキング・ビザ取得の意向を伝えられる。麗子の計画は、見事に実現した。ただ、麗子の出世双六はここで上がりだった。

ワーキング・ビザを与えられた後は、弘美直属のアシスタントとして働くことになり、マネージャー・ミーティング参加の資格を得る。それは、ミーティングで、会社に利益をもたらすアイデアを出すという義務を伴う。ここでは、スマイルと骨身を惜しまない働きぶりだけでは、何の得点にもならない。才能が試される場所だ。

麗子も必死でいろいろなアイデアを考えるのだが、弘美たちの成る程と思える議論の前で萎縮してしまう。麗子の考える企画は、いろいろな意味で、弘美たちのものとはレベルが違うことを認めざるを得ない。

そういう空気の中で1年も居れば、永住権申請はないということを実感しない訳にはいかない。

麗子の人生は、いつもこうだ。ある程度のところまでは行くが、本当に欲しいものは手に入らない人生。キャリアにしる、異性関係にしる。

本当は雅彦が一番好きだったのに、シドニーに来るまで付き合っていたのは修一。が、他人から見れば、修一も悪くないレベルの男。本当はトップの編集長になりたかったが、勤めていたタウン誌では、副編集長止まりだった。これも、一介の編集者から見れば、羨むポジションだろう。

シドニーでも同じことを繰り返している。本当は永住権が欲しいのに、手にしたのはワーキング・ビザでしかない。けれど、6ヶ月で使い捨てのワーホリから見れば、垂涎の的の筈だ。

要するに、麗子はルーザーと呼ばれる敗北者ではなかったが、ウィナーと呼ばれる勝利者でもなかった。

「もっと、グッと飲めよ。明日はデイオフで仕事はないんだから」

アントンが麗子のワイングラスに、白ワインをなみなみと注ぐ。

チャイナタウンにあるチャイニーズレストランは、金曜日の夜なので満席だ。ここは高級レストランなので、静かな雰囲気の中気取った感じで、お客は週末の夜をエンジョイし

ている。麗子は友達とよくチャイナタウンのレストランを利用するが、どれもチープな店で、騒音と喧騒でゴった返す様子に慣れているため、少しでも居心地が悪い。

ワインに目がない麗子は、グラスに口をつける。ワインはとても美味しいが、アントンを見ながら、一体私は何をしてるんだらうという自問が次第に大きくなる。

アントンは会社の社長の一人息子。弘美のアシスタントとしてスタートした第一日目に、弘美から、「アントンから声がかかるわ。でも絶対に応じないでね。事務系で新しい日本人の女の子が入ってくると、必ずちよっかいを出す息子なの。そういうトラブルがあったのは、2度や3度でしかないの」と警告された。確かにアントンからしつこく誘われたが、当時永住権を取るといふ大目的があったため、それどころではなかった。何回も「ノーサンキュー」を告げると、アントンはあきらめたようだったが、それでも思い出したように電話があった。

今夜は、永住権獲得は無理と理解した麗子のところに、アントンからの突然の電話があり、デイトする羽目となったのだ。

小さい頃から何不自由なく育った人間が持つ、鷹揚さと物怖じしない態度。リッチキッドを絵に描いたようなアントンを前にして、麗子の心模様がカタチになる。アントンとのデイトに応じたのは、彼を通して永住権獲得の道はないかという下心からだ。卑しさという言葉に代えてもいい。彼から、父親の社長に頼んで貰えるかもしれない。あるいは、求愛され結婚すれば永住権は取れる。

麗子は、その滑稽な動機に舌打ちをした。貧すれば鈍するとは、よく言ったものだ。

「アントン。今夜は素敵なダイナーをありがとう。ワインのせいかしら。少し疲れた感じ」  
こんな茶番劇は、さっさと終わりにしたい。

「分かった。じゃワインを飲み干して、終わりにしよう。僕も憧れのレイコと念願のデイトができて、とてもハッピーだったよ」

麗子は洗面所に行き身なりを整えるとテーブルに戻り、バッグをつかんだ。アントンが勘定を済ませ、麗子のためのタクシーを拾うため通りに出た。

麗子が覚えているのはそこまでだった。

麗子は目覚めた。軽い頭痛があり、身体中に疲れが残っている。ベッドの上で寝返りを打ち天井を見上げて、「アッ」という声を上げた。ここは、自分の部屋ではない。麗子は慌ててベッドから起き上がると、混乱した気持ちで周囲を見回す。高価な家具にクラシックな大きなベッドの寝室。心臓の音を聞きながら、寝室を出る。

広いスペースのラウンジに、高級なソファセットが置かれている。大理石のテーブルの上に置手紙を見つける。それは、アントンからのものだった。

「ディア、レイコ。昨夜レストランを出てタクシーを拾おうとしたら、レイコは僕の肩にもたれたまま眠ってしまった。何度も揺り動かしたのだけれど、ビクともしないので、僕の部屋まで連れて来て、僕のベッドをお貸しした次第。コーヒーなど良ければ好きなようにどうぞ。それからドアは自動ロックなので、閉めるだけでオーケイ。バイ。アントン」

—  
そうか、ここはアントンのマンションなのか。麗子はキッチンに入り、水道の蛇口をひ

ねり大きなグラスを水で満たすと、のどを鳴らして飲みつくした。洗面所で、二日酔いと剥げた化粧のひどい面相を洗い落とし、服装を整えると、アントンのマンションを後にした。

ビルの外に出て、太陽の光を浴びながらタクシーを待っていると、麗子の思考が機能し始めた。何だかおかしい。麗子はワインが大好きで、かなりの量を飲む。だが、これまで前後不覚になったことは、一度だってない。昨晚のディナーでアントンと飲んだワインは2本。アントンと同じペースで飲んだとしても、麗子が飲んだのは1本ぐらい。気の合った友達と騒ぐ時は、一人で2本分ぐらいの量を飲むが、意識不明になったことは一度だってない。

何だか変だ。その思いを胸の中でしばらく遊ばせておくと、それに呼応するかのようになり、一つの言葉が浮かんできた。デイト・レイプという言葉だ。

デイト・レイプは、文字通りデイト中に起きるレイプ。暴力によるレイプと、スパイキング（ドリンクに睡眠薬などのクスリを混ぜること）によるレイプがある。スパイキングは、今オーストラリアでは社会問題になっている。特にクラブでエンジョイする女性のために、保身術用の、ドリンクに浸すとクスリが入っていると色が変わる、リトマス試験紙のようなものが市販されているほどだ。

麗子は、ディナー中、洗面所へ行くためテーブルを立った。あの時、アントンは、麗子のグラスにクスリを混入したに違いない。

麗子は、1週間後、ようやくレイプ・クライシス・センターを訪ねることにした。いつまでも答えの出ない問答に、嫌気がさしてしまったから。こんなトラブルは、友達には相談できなかった。順序から言えば、相談するのに最も適切な人物は弘美だったが、麗子のプライドがそれを許さない。

胸の中に収めておくには、問題が大きすぎる。これはもう第三者的な公的機関にヘルプを求めるしかないという結論を出し行動に移るのに、1週間の時間がかかってしまった。麗子は、1週間遅らせたことが状況を不利にしたことを、センターで知る羽目となる。

市内にあるセンターの建物は、ビルの谷間でひっそりと息づくような外観だったが、一歩中に入ると、しっかりと機能しているのが一目で分かった。それと、重いものを抱えた女性の気持を和らげるためか、フレンドリーな雰囲気、麗子は安心した。

受付で登録すると、すぐに担当者が奥から姿を見せた。めがねをかけたスージーという中年の女性。麗子は個室に通され、そこで事の始終を説明した。「うーん」と唸り、両手を組むスージー。それから、スージーは的確の言葉で状況をまとめた。

スージーは麗子に、アントンのマンションからセンターに直行すべきだったことを告げた。直ちに医師の診断を受け、性交渉とスパイキングの有無を立証できたからだ。ただ立証できても、それが決め手にはならないと言う。レイプの裁判は、最終的には彼女の言い分と彼の言い分の対決になる。相手が裕福な家の息子なら、金にまかせて一流の有能な弁護士を雇うだろうから、非常にタフな裁判になることは必至とのこと。

スージーはソフトな口調で、「ハウ・ドウ・ユー・フィール・ナウ」と聞いた。メガネの奥の目から、温かみが伝わってくる。麗子は、その質問に意表を衝かれた。今どういう気持ちかと聞かれて、答えが出てこない。これまでレイプの有無だけに、頭を巡らせていた。レイプは、麗子が無意識の中で行われたものだから、その意味で実感が無い。だから実際のレイプに関しては、何の感情も湧かない。レイプされたと想像することに、激しい怒りと屈辱感が起きるのだ。

「レイコ。アントンの件以来、他の男性とのセックスはあったの」という質問に、「ノー」と答えると、スージーは、「あなたの話は100%信じるわ。だから困難だけれど、レイコが告訴を決めるなら、センターは全面的にバックアップします。それで、手始めに遅すぎたのは事実だけれど、医師の診断を受けることを勧めます」と、力強い言葉で締めつけた。

もう一度よく考えたいと伝えセンターを後にした麗子は、素人考えでも、このデイト・レイプを実証することの難しさを理解し、落胆した。

他の日本人の女性が、アントンから被害を受けたという噂を麗子は聞いているが、何も公になっていないところをみると、皆泣き寝入りをしたのだろう。麗子は、泣き寝入りだけは絶対に嫌だと、心に誓う。

高木佐和子の名刺には、「豪州プレス」の編集者という肩書きが書かれていた。麗子は、一介の編集者よりも、少なくとも副編集長レベルの役職を持つ人と話したかったのという不満が、チラツと頭をもたげる。電話の落ち着いた声から年配の女性を想像していたが、実際は、ショートのヘアがよく似合う、可愛い感じの人だ。だが、すぐ内容の把握や質問から頭の切れることが分かり、麗子は少し安心する。

麗子が豪州プレスに電話し、ホテルのコーヒESHOPで高木佐和子に会っているのは、アントンへの仕返しのためだ。麗子はセンターを訪ねた後、アントンを訴えることを諦めたが、腹の虫が治まらない。いろいろな仕返しを考えた末、こちらで発行されている日本語新聞でこのデイト・レイプの記事にして貰い、一矢を報うことにした。

シドニーには驚く程日本語発行物があるが、実は、麗子はその殆どのオフィスを訪ねている。シドニーに着き仕事探しをスタートした時、日本では情報誌の編集者をしていた麗子は、出来れば同種の仕事をとりたい、各オフィスを回りインタビューを受けた。どのオフィスも経験者歓迎だったが、永住権は取れないとはっきり言われたため、180度転回して現在の職場に落ち着いたのだ。

麗子は、記事にして貰う新聞として「豪州プレス」を選んだ。一番大きな会社だったから。

「麗子さんのお話、ショックを受けました。今は、気持ちに落ち着かれていますか」麗子が話を終えると、高木佐和子はそう言葉をかけた。興味本位ではない、相手を思いやる心情があふれていた。いい人なんだなと麗子は思う。

「ええ、大丈夫です。どうもありがとう」

「今デイト・レイプはオーストラリアでも社会問題になっていますが、現実に犠牲者の方から話を聞くとショックですね」

「そう言い、コーヒを一気に飲み干すと、話を続けた。」

「今、丁度ワーキングホリデー制度がオーストラリアでスタートして30年になるんですけど、30年記念のワーホリ大特集を組んでいるんです。その一つとしてこの事件をレポートさせて頂いたら大きな社会問題として話題になると思います。ただ問題が一つあります。麗子さんはデIFOメーション・ローというのをご存知ですか。日本語で言うとな名譽毀損の法律ですが、こちらではそれがきつちりと守られているので、こういう記事はとっても厳しいんです。ですから、麗子さんの事件の状況や背景を変えたものにしなければ、記事にするのはとても難しいと思います」

「変えたものとはどういうことですか」

「ええ、職業とか背景はまったく異なるものにしなければ、上司から許可が下りないと思います」

話を聞きながら、期待が失望に変わるのに大した時間はかからなかった。

「日本だと名譽毀損で訴えられて負けても、賠償金はすずめの涙程度ですから、日本の雑誌や週刊誌はあることないことを乱暴に書き散らせるんだと思います。こちらでもし裁判で負ければ、最低ミリオンのレベルの賠償になるので、とても神経質になっているんですよ。勿論弊社は無料のコミュニティ・ペイパーですが、大手の商業新聞だろうが、コミュニティ・ペイパーだろうが関係なくです」

麗子の失望に気付いたのか、  
「たとえ背景をまったく変えても、ワーホリへの警告としてとても有意義な記事になるのは間違いないと思います」  
と、熱意を持って説いた。

他のワーホリへの警告なんていうものには興味がない。何かの方法でアントンをチクリと刺したい。それだけが目的なのだ。だから記事はいくら匿名にしても、麗子ならR子、アントンならA男、免税店も頭文字を取ってC免税店とする程度の挑発はしたい。麗子は少し考えさせて欲しいという返事をし、佐和子と別れた。

麗子は社長室のドアをノックする。さつきから急に鳴り始めたドキドキという音で、麗子は心臓がどこにあるのか、その位置を正確に把握する。今から一か八かの勝負に打って出るのだ。

ドアが開くと、社長秘書のリリアンが、「ハロー、レイコ。ハウ・アー・ユー？」と手を取って迎えてくれた。秘書室の向こうに、これから対峙する社長が控えている。アントンの父親である社長が。

麗子は高木佐和子と会った後、何か方法はないものだろうか思案し続けたが、ある夜、一つの案を思いついた。かなり危険な企みだが、失うものは何もないと自身を奮い立たせ社長に電話した。話の概要に社長が絶句するのを感じ取ったが、とにかく詳細は会ってからとアポイントを取ることに成功した。

20分待たされ、麗子は社長室に通された。入社して以来1年が経つが、社長と会って直接話すのは始めてだった。すっかり禿げ上がり、頭がテカテカと光る恰幅のいい中年。この人が、一代で会社を築き上げたのだ。

麗子はヒステリックにならないよう気を付けながら、事の全容をぶちまけた。麗子はす

べて事実を話そうと決めていた。アンTONを訴えるつもりでクライシス・センターに行き、それが難しいことと分かったことも、地元の日本新聞社と相談したことも、ありのままに述べた。そして本題に入った。日本の雑誌にもちかけるプランがあること。それは、この会社にとって大きなダメージになる筈。もしそれをストップしたければ、永住権を取って下さい。全てを言い尽くすと、奇妙な脱力感に襲われた。

社長は鋭い目で麗子をにらみつけると、「レイコは私を脅迫するのかわ」と口を開いた。麗子は、「ノー。ただ悔しくて、何かをしなければ気がおかしくなりそうで…。これは、私の切羽詰った自己防衛です」と答えると、思ってもみなかった涙が一筋頬を伝った。社長はしばらく沈黙を守った後、「少し考える時間が欲しい。会社としての結論が出れば、連絡しよう」と麗子に告げた。麗子は立ち上がると社長に向かって深く頭を下げ、社長室を後にした。

2週間後の夜、麗子の自宅に、会社の弁護士から電話がかかってきた。会社は永住権を申請する。但し一つ条件があると切り出した。永住権が取れたら会社を辞めるという条件。それは麗子の望むところだから何の問題もない。弁護士はノー・クレイムとコンフィデンシャル、すなわち今後一切クレイムを出さないことと、一切口外しないことを同意する書類にサインが必要なので、来週都合のいい日に彼に会いに来るよう告げ、受話器が置かれた。

勝負に勝った。自分にこれほどのしたたかさがあったのが驚きだった。窮鼠猫を噛むというもなのかも知れない。きれいな勝ち方ではないのは百も承知だ。汚い手を使ったと言えるのかも知れない。そして、これは麗子の人生に汚点を残すものになるのかも知れない。麗子は何かで読んで覚えていたフレーズを、自分に言い聞かす。汚点も肉体関係も洗えば落ちるというフレーズ。

数分もしない内に、初めて一番欲しいものを手に入れたという喜びのカラーで、身体中が染まる。それは殆ど有頂天とでも呼びたいシロモノだった。

よみがえる心のときめき

デート・レイプの記事は、喉から手が出るほど欲しい。佐和子は、何度も須山麗子に電話をかけた衝動にかられたが、その都度我慢した。事が事だけに、しつこく食い下がるのは控えるべきだという良識があった。彼女と面談した際、必要なことはすべて言い尽くした。彼女の判断に任せる以外に方法はない。一ヶ月もなしのつづてということは、ボツということなのだろう。

それにしても、オーストラリアでも凶悪な犯罪が増えつつある。佐和子のシドニー在住歴も8年が過ぎようとしていたが、佐和子の人生も大きく変わったように、この国も変貌を遂げたと思う。

8年前にシドニーの街を初めて歩いた時感じた安らぎを、今でも覚えている。すれ違う

誰もが、フレンドリーな笑顔をを見せていた。それが今では、険しい顔つきでセカセカと歩いている。頭の中は富と名声を追うことだけでいっぱい、他人を思いやる余裕がない。佐和子は自身の人生を振り返ってみて、前進したのか後退しているのか結論を出すことが出来ない。8年間は長かったという気がするが、あつという間の出来事だったような気もする。異国で、恋愛、結婚、出産、離婚と続いた軌跡を振り返ると、佐和子はすでに、「女の一生」を生きてしまったかのような深い思いにとらわれるのだった。まだ30にもなっていないのに。

佐和子がシドニーに来たのは、21歳の時。短大を出て社会人を1年経験した頃だ。

別にこれといった理由があった訳ではない。ただ漠然と海の向こうの国へ行きたいという願望があった。単なる旅行ではなく、正式に働くこともでき生活することが可能な国。それを念頭に入れ、ドステイネーションを選択していると、俄然浮かび上がってきた国がオーストラリア。

大した生活費を持参した訳ではなかったたので、佐和子はすぐに仕事を必要としたが、心配は取り越し苦労に終わった。職種さえ選ばなければあぶれることがない。

いつも従業員を募集している職種は、ジャパレスのウエイトレスと免税店の店員。佐和子はウエイトレスの仕事を選んだ。

佐和子が働くジャパレスは高級ジャパレスだったため、ユニホームとして、かなりちゃんとした和服が支給された。初めの頃は、何もシドニーにまで来て帯を締めることもないだろうと、ちよつぱり照れたが、すぐ異国でディスプレイ・ジャパンをしているような感じを、面白いと思うようになった。もう一つのプラスは、佐和子の着物姿はなかなか似合っていたことだ。小さな顔に、性能のいい目や鼻や口がコンパクトに並んだ感じの佐和子の和服姿は、艶やかさこぼれ落ちる風情が目立った。これまで着物といえば成人式にしか着たことがなかった佐和子にとって、これは意外な発見だった。

他のワーホリのウエイトレスからも褒められたが、オージーの客に大いにもてた。チップもはずまれたし、デートの誘いもあった。トニーと出会ったのは、そのジャパレスでだった。

「サンキュー。名前は何て言うんだい」

冷たいおしぼりを一同に渡すと、ブロンドのがつしりした男性が、給仕する佐和子に名前を聞く。ウエイトレスに名前を聞くのは、気がある証拠だということを佐和子は承知している。だが、その度に胸がドキドキと波打った最初の頃と違い、慣れると、「ハロー。ハウ・アー・ユー？」程度の挨拶用語でしかない。ただ、その男性との会話の流れは、いつもと違った。

「佐和子です」「オー、ノー。ユー・アー・ノット・サワー。ユー・アー・ベリー・スイート」と言葉が返ってきた。

佐和子の名前から生まれたジョークで、サワー、苦味をつぶしたなんてとんでもない、スイート、とっても可愛いじゃないかと言ってくれたのだ。佐和子はなかなか機転の利く

オージーだと感心し、給仕をしながら、トニーと自己紹介した男を観察し続けた。

大きな肩幅に、太陽に焼かれ過ぎてグレイに変色したブロンドの髪。屈託のない大きな瞳。ジャストサイズの高い鼻は品があった。その下の白い大きな歯が、清潔な感じで光っている。佐和子が料理の上げ下げをする度に、ふ厚い唇が開き「サンキュー」を繰り返し、特上のスマイルを佐和子にくれる。

同席する他の3人も頑強な身体をしたオージーで、佐和子は彼らはスポーツ選手に違いないと推測する。

コーヒーが配られ食事が終わりになる頃までに、佐和子は、トニーを何とセクシーでカッコいいのだろうと思うようになり、4人の大男のテーブルで、トニーだけがくつきりと際立ち、他の男たちの存在が見えなくなっていた。佐和子の中で、トニーに対し、恋心が芽生えていたのだ。

勘定書きをテーブルに置きながら、このまま単なるお客とウエイトレスの関係で終わるのならばとても残念だ、と思う。佐和子の方からイニシヤティブを取ることはできない。トニーがフレンドリーなだけで、その気がなければ、大恥をかく。

勘定書きの上にクレジットカードが置かれているのを確認し、それをピックアップすると、レジへ向かう。と、カードの下にちいさなメモ用紙を見つける。携帯の電話番号と、電話をしてというメッセージが書かれていた。佐和子の心臓がドクドクと音をたて、目の前がパツと明るくなったような気がした。

人は過去の出来事を振り返り、もしあの時こうだったら、こうなっていた筈なのにと想像する。佐和子はよく、もしあの時、トニーが電話番号が書かれた用紙を渡すことさえなければ、その後、彼と結婚し、彼の子供を産み、そして離婚するという人生を歩まなくてすんだのにと想像した。

どんな恋も、その序章はそれぞれ美しく輝いている。

佐和子は、トニーと恋人関係になり、幸せの頂点に居た。トニーは、佐和子が推測したように、スポーツマンだった。セミプロのサーファー。

ワーホリにはワーホリ事情というものがある。ワーホリのジャパニーズガールにとって、スポーツマンのオージーをボーイフレンドに持つことは最高のステイタス。

オーストラリアはスポーツ天国。だからスポーツマンが主流の男。特に日焼けした逞しい身体を持ち、ブロンドの髪をかきあげるハンサムなサーファーは、掛け値なしのスーパースターだ。

こういう男たちが選ぶガールフレンドは、決まって白い肌に長いブロンドの髪を風になびかせた美人。彼らが、王道に行くカップル。それに比べると、たとえ美人であっても、ジャパニーズを含むエスニックの女たちは、野外席の女。だから、その種の女がスーパースターのポジションを持つオージーをボーイフレンドに持つことは、稀だ。

それを佐和子は、すんなりとやってしまった。特権意識というものは何と気持がいいのだろうと、この頃の佐和子は思っていた。

ワーホリの誰かのフラットで開かれたパーティに、トニーと連れ立って行ったとする。するとその場に居合わせた全員の目が、佐和子とトニーに注がれる。それは賞賛と嫉妬が

混ざったような視線。佐和子は思うのだが、純粹な賞賛だけの視線や言葉に、大した価値はない。その裏に嫉妬を読んで、初めて満たされる。丁度、他人の幸せを見て幸せは感じられないが、他人の不幸を見て幸せを感じるのに、似ているのかもしれない。

オージーは、セックスが大好き。特に男性ホルモンが頭のとっぺんからつま先まで充滿しているような、スポーツマンなら尚のこと。だから時々、考えられないようなスポーツ選手のセックス・スキヤンダルが、メディアを賑わす。最近、フットボールのスーパースターの、同僚であり親友のワイフとの不倫が暴露された。不倫スキヤンダルはもう珍しくもないが、不倫が発覚した状況に人々は目を剥いた。スーパースターも同僚もワイフ同伴で、コーチの家で開かれたパーティに出席していたのだが、何とその家のトイレで不倫現場を発見されたという顛末。ホテルのトイレではない。普通の家のトイレ、彼らのパートナーや多くの友人や知人が手を伸ばせば届くような至近距離で、事に励んでいたとは恐れ入る。ただ、オージーはセックスを大いにエンジョイする人種だが、それだけまたセックスに関して寛大な人たちなのかも知れない。雑誌の餌食にはなったが、両カップル共、離婚することもなく元のサヤに納まっている。

トニーも例外ではなかった。毎晩、佐和子を求めた。それを佐和子がいつもエンジョイしたかという、すんなり「イエス」と答えることはできない。何故なら、こんな素敵なおスから求めることは、いつでも喜んで応じるべきという義務感も感じていたから。トニーに抱かれることは大層気持ちいいことだったが、頭の隅で、これは本当の快樂だろうかという懐疑の声を聞くこともあったから。

今ならそう感じて当然だったと思える。何故なら、佐和子はトニーという人間を好きになつたのではなく、トニーの持つイメージを好きになつただけだったから。

2年間の交際の後、トニーとゴールイン。

ピクチュア・パーフェクトという言葉があるが、結婚式の記念写真を見る度に、佐和子の頭にその言葉が浮かんでくる。見かけだけはパーフェクト。白いタキシードを着たトニーのハンサムぶりは、まるでスターのよう。白いウエディング・ドレスの佐和子も、それに劣らず美しい。

日本から家族や友人たちが式に出るためわざわざ来豪したが、誰もが異音同音にトニーのルックスに感嘆し、いかに佐和子がラッキーであるかを繰り返して口にした。

しかし、佐和子の幸せはここまでだった。結婚式が済めば、「日常生活」というものがスタートしたから。

結婚式を挙げた時、佐和子は既に妊娠4ヶ月に入っていた。トニーは結婚が決まるとコンピュータ使用を放棄したため、佐和子はすぐ身ごもってしまった。つわりと生活苦が一緒になって襲ってきたのが、新婚時代。

日常生活が始まりすぐ分かったのは、トニーの生活力の無さだった。どんな世界でも、一番潰しがきかないのがセミプロと称される輩、と佐和子は思う。トニーも例外ではない。テレビで中継されるような大会に出場するような、プロのサーファーではない。とあって。

趣味に留めておくにはうますぎる。セミプロのサーファーは、チャリティイベントなどでその妙技を発揮し喝采を浴びるが、そんなものは1セントのお金も運んでこない。

子供ではない。20も半ばを過ぎたそういう大人が生活費を稼ぐのは、どうでもいいような繋ぎの仕事によって。彼らの一番の関心ことはサーフィンだから、本当の仕事は二次となる。

普通の人間が試行錯誤を繰り返しながら自身のキャリアを築こうとする時期に、サーフィン三昧で明け暮れ、30を超えてようやくこのままセミプロのサーファーで過ごすことは出来ないと思っても、その時は遅すぎるのが常。言い換えると、将来性はゼロ。

それでも、トニーはまだ恵まれた環境に居たと言える。父親の援助で小さなサーフィショップを持っていたから。大げさに言えばオーナー社長だが、家賃を払ってトントンという経済状態で、生活費までは稼いでくれなかった。

これらの現実、トニーと生活するようになって初めて分かったことだ。いきおい、佐和子の肩に生活費がのしかかってきた。

佐和子は日本人医師が開くクリニックで、受付兼助手という仕事を見つけたが、忙しいのに反比例するように、給料は良くない。だから、必然的に切り詰めた生活を余儀なくさせられた。佐和子は身重の身体で、この上子供が産まれた後どうやって生活すればいいのかと、しばしば暗い気持ちに襲われた。

それに引き換え、トニーはオージーの典型的なキャラクターである、「ノー・ワリイ」を連発するノーテンキな態度は変わらなかった。佐和子がトニーのことを、美形ではあるが生活力皆無なので坊という目で見えるようになるのに、大した時間はかからなかった。

佐和子は、トニーとの結婚の経緯を省みると、いつも不思議な気持ちに捕らわれる。

日本でなら、美形だが生活力はゼロの男と遊んでも、結婚するような愚考は避けるだろう。それが、外国という舞台で、外人が相手だと、その愚考に有頂天で走ってしまう。おとぎ話の中に居るような錯覚に陥ってしまい、現実が見えなくなるのか、それとも、まだまだ外人崇拜（ハンサムな外人という条件付だが）が抜けきらないのか。

愛があったのかどうか。佐和子は、トニーという人間にではなく、トニーの持つイメージに対して、恋におちたことに気付く。こんな結婚が破綻するのは当たり前だ。結婚から半年が過ぎた頃、佐和子は、ピクチュア・パーフェクトのトニーとの結婚が失敗だったことを認めざるを得なかった。

佐和子は臨月に入っていた。とにかく出産を終えて落ち着くまでは我慢をしようと、決心した。

全ての女が母性本能を備えている訳ではないことを、佐和子は自身の出産で知った。

カイリーと名付けたその子は、驚く程の量のブロンドが輝く、目鼻立ちのハッキリした女の子。勿論外人顔。佐和子は天使のような顔で眠るカイリーを見つめる度に、複雑な感情が湧いてきた。母親が持つ筈の、子供への愛しさではない。絡み合っただけの屈折したような感情。トニーとのセックスが産んだ副産物。これからの私の私の人生の足かせ。母親役を強制する小動物。母親とはまったく異なる容貌を持つ異星人。

唯一のポジティブな考えは、とにかくこの子を立派に育てなければならぬという義務

感ぐらいたろうか。

トニーはカイリーが生まれると、サーフィンから足を洗いパーマネントの仕事を探した。レジメもなく、そう若くもない男が職を探す時、選択肢は狭い。不動産業界あるいは自動車業界のどちらか。要するに、家売るか車売るかの選択だ。どちらも、スズメの涙のような基本給プラス歩合制という厳しい業界。

佐和子は、これまでサーフィン・ボードで遊んでいた男が、営業をやれる程世間は甘くないと冷ややかな目で見ていた。が、少なくともトニーは、父親として社会人になろうと努力していることは認めていいと思った。しかし、それが佐和子の心を温かくすることはなかった。

一方が幸せで、もう一方が不幸せというカップルは、この世には存在しない。一方が不幸せなら、もう一方も不幸せだ。家の中に、もうだいたい前から空々しい空気が流れていたが、二人とも、それについて真正面から向かうことを避けていた。

佐和子は、カイリーが生まれてからは、赤ん坊の世話を口実に子供部屋で寝ることが多くなり、セックスは一度佐和子が強く拒絶して以来、トニーが求めてくることは無くなった。

それでも日常生活があり、日々は過ぎて行く。離婚というドラマを引き起こすためには、何かトリガーが必要だった。それは、トニーの浮気というカタチで現れた。が、皮肉にもそれは逆効果をもたらす。離婚の契機を待ち望んでいた佐和子だったが、トニーの浮気相手が友人の留美子だと分かると、本心とは裏腹に、トニーに泣きながら留美子と手を切ることを懇願する有様だった。

留美子は、ジャパレスで働いていた頃からの友達で、オージーと結婚したもののすぐ別れたバツ一。相手は初老の貧相なオージーで、佐和子は、留美子の結婚は永住権欲しさによるものにとらんでいる。

留美子は、佐和子たちの披露宴で、友達を代表して堂々と英語でスピーチをしてくれたほど仲が良かったが、カイリーの世話に追われて疎遠になっていた。

トニーのシャツのポケットから出てきた一枚の紙切れから、佐和子は、留美子との浮気を知ることになる。その紙切れには携帯の電話番号が書かれてあったが、その番号に見覚えがあった。佐和子は自身の携帯にインプットされている留美子の番号を引き出すと、思っていた通り、紙切れのと同番号だった。

その日帰宅したトニーを問い詰めると、彼はあっさり白状した。

「何故？」

ラウンジでビールを飲もうとしたトニーは、佐和子の質問に肩をそびやかさせた。何故だか分かっているじゃないかと鼻で木をくくったような反応だ。

「私たちには、カイリーがいるのよ」

口から出た言葉に、佐和子自身が驚く。子はかすがいというものは、こちらでは通用しないのだ。しかし、さまざまな感情で胸がいっぱいになって止まらない。

「そりゃ、私たちの生活は今パーフェクトじゃないわ。でも日常生活って、いつも楽しいことばかりじゃない。いろいろとバッドタイムがあつて当たり前じゃないの」

そう言うと、涙がこぼれた。それが引き金になり後は堰を切ったように涙があふれ号泣していた。泣きながら、佐和子は一体これは何のための涙なんだろうと、自問していた。驚きで目を丸くしたトニーは、佐和子の肩を抱くと、「もうルミコには会わない」と約束し、「アーム・ソーリー」を何度も繰り返した。

一見元のサヤに戻ったかのような日常が返ってきたが、結局、それから半年後に二人は離婚する。佐和子の方から切り出した離婚。

トニーと留美子ができて当たり前と、ずっと後になって佐和子は肯く。トニーは外見はセクシーなイケメンだし、オージの男性がセックスを断たれていたのだから。留美子との浮気が分かった後、佐和子の取った行動はつまらないミエからだ。佐和子は、他の女とできて捨てられた妻という役割を、演じたくなかっただけ。特に他の女が日本人だという事実は我慢できない。別れ話は、佐和子がイニシヤティブを取らなければならない。

離婚して佐和子が手に入れたものは、小さなフラットと、カイリーが18歳になるまでという条件の教育費を含む二人の生活費。トニーにそれだけの余裕がある筈もなく、全てはトニーの父親の懐から出たものだ。

離婚後、贅沢さえしなれば親子二人の生活には困らなかったもので、佐和子は前からやってみてきた仕事にチャレンジすることに決めた。小さい時作文を書くのが好きだった佐和子にとって、憧れの職業はジャーナリスト。

シドニーにはかなりの数の日本語の媒体があふれているが、その中で、佐和子は老舗の「豪州プレス」の門を叩いた。常に人手不足らしく、すぐ面接の段取りとなり、面接、筆記試験の後、次の週に採用という連絡を貰う。

後で、文才は並という評価だったが、英語が喋れることと永住権保持が買われ採用されたことを知った。

豪州プレスは月刊の新聞だが、タブロイド版で100ページあり、ボリュウムは新聞というより雑誌に近い。佐和子の属する編集部は、編集長の鈴木を中心に佐和子を含む編集者が3人。それに、タエちゃんと皆から呼ばれているワーホリ1人で構成されていた。

タエちゃんは可愛くもなければ美人でもない地味な女の子だったが、日本の一流雑誌社で編集の経験があり、記事を書くことについて、てにおはを合わせることを初めいろいろと佐和子にアドバイスをした。それを鼻にかけるようなことはなかったので、佐和子は素直に感謝した。

社長は、高木由佳という女社長。25年前にオージと離婚後、女手一つで新聞をスタートし、今では30人近いスタッフを抱えるビジネスとして大成功を収めている。「猛女」と陰口を叩かれているのが、佐和子にとって、異国で成功した日本女性としての鏡だ。大学を出て立派な社会人になっている彼女の娘を見ても分かるように、シングルマザーとして、立派に子供を育てている。それも佐和子にとって、一つの指針だ。

佐和子はおおむね現在の生活に、満足していた。日本でなら、とてもじゃないがジャーナリストの仕事をするには不可能だったに違いない。無料のコミュニティ新聞だが、会おうと思えば、この国の首相にだって、インタビューを申し込めるぐらいのステイタスを持つているメディアで働いている。そしてカイリーへの愛情。それは生きる意味を与えて

くれるほど尊いものになっていった。母性というものは、佐和子の場合、生まれつき備わっているものでなく、ある時生まれ、そして育っていくものだと分かった。そんな環境に、世の中に100%ハッピーで生きている人間なんて居ないという「世間の真実」を混ぜれば、佐和子は、毎日ほぼ満ち足りた生活を送れるのだった。

豪州プレスに勤めるようになって、すでに2年の月日が過ぎた。

「佐和子。例のデイト・レイプはバツ？」

編集会議で編集長の鈴木に聞かれる。入社してすぐ鈴木から名前を呼び捨てにされて奇異に感じたが、今はもう慣れた。確かに外国ではお互いをファースト・ネームで呼びあうが、いくら外国とはいえ、日本人同士では、よほど親しくならない限り、そんなことはない。

「ええ。もう1ヶ月も連絡がないですし、多分問題になるようなことはしないことに決めたんだと思います」

「うーん、残念だな。非常にタイムリーなトピックだからね」

鈴木はペンを耳にかけると、腕を組み唸った。動作が大げさなのもこの人の特徴だ。鈴木のおフィス内での言動から、この人は豪快な編集長というのを演じているのだと佐和子は常に思っていた。本当は多分気が小さく神経質なんだと思う。何故なら、合同ミーティングで、高木社長と丁々発止とやり合う時、鈴木の隣に座る佐和子は、いつも鈴木の方がブルブルと震えているのを目撃しているから。ちよっぴりメタボ系の鈴木は、不倫がばれて奥さんから三行半をたたきつけられたらしい。その相手は以前編集部に勤めていたワーホリの女の子なのだそうだ。

「今回のワーホリ大特集のサイド記事として、センセーションを巻き起こしたのにな。じゃ、佐和子はタエちゃんをアシストにして、ワーホリ遊戯をまとめて。手始めに各クラブを回って偵察してよ。それじゃ、各自受け持ったものは十分に取材をお願いします。以上で編集会議は終わり」

佐和子は、自分の説得不足で記事にできなかったのかも知れないと、ちよっぴり責任を感じる。

携帯の電話が鳴る。案の定タエちゃんからだ。急用が出来て来れないと言う。深く詮索はしなかったが、急にデイトか何かが決まったのだろう。

金曜日の夜、記事のためにクラブを探訪しようと、タウンホールで待ち合わせをしていたのだ。その矢先のドタキャン。仕方ない。会社からは一切残業代が出ないので、もし何か面白いことが決まれば、ましてや6ヶ月しか在籍できないワーホリがそちらを先行しても、文句は言えない。近頃のワーホリは本当に軽すぎるんだからと内心愚痴ったが、いけない、近頃の若者云々のフレーズが出ると年を取った証拠と言われていたっけと、頭を振る。佐和子はバツでシングルマザーだが、タエちゃんとはたった5つしか年が違わないのだ。

佐和子は気を取り直し、一人でダブルベイにあるクラブに行くことにした。ワーホリ特

集で佐和子が受け持ったのは、「ワーホリ遊戯 男の声が多くかかった子が勝ち」という記事。ワーホリの可愛い女の子の間では、クラブへグループで出かけ、そこで何度男から声がかかるかを競争する遊びが、伝統的に続いているらしい。その取材として、タエちゃんとかケ所のクラブに立ち寄るつもりだったが、一人だと少々気後れがする。それで一番高級という評判のダブルベイのクラブなら安全だと考え、そこへ足を向けた。

「ベイ」と書かれたクラブのドアの前で躊躇したが、仕事のためという大義名分で自身を奮い立たせ、ドアを押す。ドレスコードのある高級クラブの割にはドアマンも居なく、誰でもが気楽に入れることに肩すかしを食う。

佐和子はカウンターの椅子に座り、バーマンにカンパリソーダを注文する。クラブの雰囲気を一言で言うなら、シックと言う言葉だろう。広いラウンジのようなスペースに、モノトーンのゆったりしたソファが何点か置かれている。そこで談笑する人達。小さなスペースだがダンスフロアがあり、優しいBGMに合わせて軽く身体を動かす人達。このクラブのドレスコードはファッショナブル。お洒落ならOKということだと思いが、男性はタ伊を締めたスーツが多い。女性はカクテルドレスが圧倒的。年齢は30代プラスといったところ。ルックスも、かなりレベルが高い。社会のエリート達が憩う場所、あるいは彼らのハンティング・プレイス。本当にこんな所で、ワーホリの女の子達が、何度声をかけられるかのプレイをするのだろうかという疑問が起きる。よほどの美人か可愛い子でなければ、ここでは男性の関心を引かないだろう。

「エキユス・キユーズ・ミー？」という声の方向を見ると、ハンサムガイが、佐和子を見つめていた。

「一人？」

「ええ。実は、日本語の新聞の編集者なの。最近シドニーで流行っているクラブの特集をするので、下見に来ているのよ」

女一人で金曜日の夜クラブに来ている恥ずかしさから、問われもしないことをべらべら喋った後、佐和子は苦笑する。

「ジャパニーズ？」

「ええ。佐和子と言います」

「僕はマーク。ナイス・トウ・ミート・ユー。良ければ一緒に飲まない。僕はここの常連だから、このクラブに関してならいろいろな情報を提供出来るよ」

「ええ。いいわ」

佐和子は自然に応答していた。

「ゆっくり出来るソファの方へ行こうよ」

というマークに従って、佐和子はカウンターの椅子から立ち上がった。マークは佐和子の手を取って先導する。

空いているソファに陣取ると、マークが「ドリンクは何かいい？」と聞くので、「カンパリソーダをお願い」と答えると、軽快な足取りでカウンターへ向かった。「すぐかえってくるから」という言葉を残して。

佐和子は何だか楽しくなってきた。あんなハンサムにナンパされるとは。自分を褒めて

やりたい気分。ルックスがいいだけの男が、いかにつまらないかは身を持って経験済みだが、別に結婚相手を探している訳ではない。「女の一生」を若いうちに経験してしまったような気がしていた佐和子は、自身の人生の全ては子育てだと戒めていた。だが、マークが立証してくれた。男と女が媚びあう舞台、それもかなりレベルの高い舞台で、まだまだ勝負できることを。心が晴れて、これからの人生にパッと光が射したような浮かれた気分。女の自立が叫ばれ、実際、佐和子もそれをスローガンにして生きてきたのに、単にいい男から声がかかっただけで、こんなにも幸せな気分になれる真実をどう解釈すればいいのだろうか。

ドリンクを手にし、こちらへ戻ってくるマークを認めると、佐和子は高揚した気分になった。それは長い間忘れていた、心ときめきというものだった。

「佐和子とタエちゃん、週末の取材はバツだったんだって」

編集長の鈴木が大きな声で聞く。

「すみません。収穫ゼロです。佐和子さんとも話したんですが、クラブ回りと一緒に、ワーホリの女の子で遊んでる子を探して、彼女たちから情報をゲットしようと思ってます」

タエちゃんが屈託なく答える。

「うん。それがいい」

勿論、佐和子はタエちゃんが仕事をすっぱかした事を告げ口はしていない。それよりも、タエちゃんがドタキャンしてくれたことに感謝しているぐらいだ。タエちゃんが横にくっついていたら、マークとの素敵な出会いもなかったに違いない。

「それではワーホリ特集の締め切りも近づいてきているので、任されたものはそれぞれ責任を持って仕上げるように。以上で編集会議は終わり」

マークとは飲みながら1時間位雑談をし、携帯の番号を交換してクラブを出た。佐和子から電話をかけることはしたくない。今の世の中、積極的にイニシアティブを取る女性はゴマンと居るのは分かっているが……。

マークは電話をくれるだろうか。ちよっぴりの心配が胸に浮かぶ。けれど、それは甘美な心配だった。

